—大阪大学—
NewsLetter
www.osaka-u.ac.jp
2011–2015

世界に開かれた大学
世界に貢献する大学

世界適塾

～学問による「調和ある多様性の創造」～

大阪大学第17代総長
平野俊夫の4年間

大阪大学
OSAKA UNIVERSITY

—大阪大学— NewsLetter 2011–2015

www.osaka-u.ac.jp

大阪大学　第17代総長　平野俊夫の4年間

—ごあいさつ—

世界に開かれた大学 世界に貢献する大学「世界適塾」
～学問による「調和ある多様性の創造」～
大阪大学第17代総長 平野俊夫……3

Ⅰ　実績／取り組み
2011年8月 総長就任時のインタビューより……5
大阪大学未来戦略（2012—2015）—22世紀に輝く—……9
未来戦略機構……15
世界トップ10に向けたグローバル化の強化推進と人材育成・獲得支援策……17
スーパーグローバル大学創成支援事業（タイプA）「世界適塾構想」……23
2015年 年頭挨拶　22世紀に輝く「世界適塾」へ……25
世界適塾ビレッジ／大阪大学ベンチャーキャピタル……31
箕面新キャンパスプロジェクト……33

Ⅱ　適塾
大阪大学の沿革「原点から未来へ」……35
大阪大学の教育研究「適塾から大阪大学へ」……37
適塾特別対談「安藤忠雄／平野俊夫」……39

Ⅲ　研究／学問
湯川秀樹のノーベル賞／国際賞……43
大阪大学未来トーク……45
世界に冠たる大阪大学の「免疫学」……47

Ⅳ　教育／学生
平成26年度 卒業式・大学院学位記授与式—総長式辞……51
平成27年度入学式—総長告辞……57
平成26年度 秋季卒業式・大学院学位記授与式—総長式辞……61
平成26年度 秋季入学式—総長告辞……64
総長×学生　「研究の原動力は知的好奇心だ」……67
阪大なでしこ　世界にチャレンジ……71
総長×学生×教員　「インドネシアと日本」……75
医学と「いのち」をテーマに高校生に熱い講義……77
大阪大学オリジナルウイスキー完成記念イベントを開催……79

Ⅴ　世界へ、未来へ
環太平洋大学協会（APRU）第19回年次学長会議……81
カリフォルニア大学大阪大学オフィス開設……83
世界トップ10の研究型総合大学を目指す／新聞広告……84

平野俊夫総長の足跡　2011.8～2015.8 トピックス……85
平野総長4年間の理事・監事……87

「免疫学者として、総長として～来し方を思い、未来を想う～」
～天の川 世界適塾 はるかなり～　——平野俊夫総長 最終講義……89

大阪大学
OSAKA UNIVERSITY

世界に開かれた大学
世界に貢献する大学

世　界　適　塾

～学問による「調和ある多様性の創造」～

大阪大学第17代総長
平野俊夫

—ごあいさつ—

私が総長に就任いたしました2011年は、忘れもしない東日本大震災があった年です。その後7.8%給与カットにはじまり、大学改革促進の機運が盛り上がり、大学のミッション再定義や第3期中期目標・中期計画に向けて大学を3つの類型に分けるなど様々な大学改革促進政策が国から打ち出されました。この中で大阪大学は常に全国の国立大学の先頭を切って大学改革に努めてまいりました。

私は就任早々、まず「大阪大学未来戦略2012−2015—22世紀に輝く—」を策定し、その中心的機構として総長直轄の「未来戦略機構」を設置いたしました。そして、「世界適塾」構想を打ち出し、物事の本質を究める研究や物事の本質を見極める能力を有した人材育成により、大阪大学は世界に開かれた大学、世界に貢献する大学、「世界適塾」として世界でトップ10に入るような研究型総合大学を目指すという志を掲げました。その心は、「社会あっての大学、社会のための大学」であるという考えに基づいています。

その理念は、学問による「調和ある多様性の創造」により、心豊かな人類社会の発展に貢献することを掲げました。この理念と志のもとに、この4年間寝食を忘れて大阪大学の発展のために、「世界トップ10に向けたグローバル化の強化推進と人材育成・獲得支援策」としてまとめた様々な改革を行ってきました。その過程で、個の力の最大化のみならず大学全体、すなわち組織の力の最大化を如何にすれば図れるかに注力してきました。

また、以下の様々な施策を実行する財源として、国立大学改革強化推進事業、研究大学強化促進事業、スーパーグローバル大学創成支援経費、国立大学機能強化経費、学長のリーダーシップ発揮特別経費、リサーチ・アドミニストレーター(URA)を育成・確保するシステムの整備事業など合計約50億円を獲得するとともに、官民イノベーションプログラムで200億円を獲得してきました。

特別教授の創設、クロス・アポイントメント制や年俸制などの柔軟な人事制度、研究大学強化促進事業採択とそれに伴う34の国際ジョイントラボ設立や若手研究者育成プログラムなど国際的な研究展開の促進、学生の自主研究支援プログラムなど学生が主体的に学べるプログラムや環境整備、スーパーグローバル大学タイプA採択とそれに伴う学事暦・カリキュラム改革・入試改革の一体的教育改革推進、そしてカリフォルニア大学オフィスの大阪大学への誘致などの国際戦略など様々な施策を実行してきました。特に施設老朽化対策のためのスペースチャージや学内予算配分の見直しなどは他の国立大学に先駆けて実行しました。大阪大学の様々な改革は全国の国立大学の手本とみなされ、大阪大学には全国の大学や文部科学省から様々な問い合わせがあり、日本の国立大学の発展にも寄与できたのではないかと考えています。

運営費交付金が減る中での大阪大学未来基金の募金活動も2031年創立100周年に向けた大阪大学の基盤充実のためとの思いで取り組んできました。中でも、未来戦略機構に異分野融合研究を促進するための研究部門を作り、創薬、認知脳、光量子科学、グローバルヒストリーなどを推進していることは、大阪大学の研究力強化や国際化に大きく貢献しつつあると思います。4年間に審良静男特別教授(2011年)と坂口志文特別教授(2015年)がガードナー国際賞を受賞するという大変素晴らしい成果もありました。

イギリスの歴史あるQS社のアジア大学ランキング2015では、アジアで13位、国内で2位にランクされました。ランキングは大学の全てではなく、単なる一つの指標にすぎないことはもちろんですが、されどグローバル化の時代では海外の学生は大学ランキングを指標として大学を選びます。優秀な留学生を獲得するためには大学ランキングは決して無視できません。今回QSという一つの大学ランキングではありますが、大阪大学の歴史で初めて国内2位になったことはそれなりに意味のあることと考えています。

また、2007年に大阪外国語大学と統合して以来、最大の課題でありました箕面キャンパスの問題も、2015年6月に箕面市長との共同記者会見で明らかにしましたように、単なる外国語学部等の箕面船場駅(仮称、2020年に北大阪急行が千里中央から延伸され、新設予定)前への移転ということではなく、世界適塾構想の大きな柱、大阪大学のヘッドクオーターの可能性を秘めた案という形で解決への道筋をつけることができましたことは望外の喜びであります。これは2021年創立90周年事業の柱になると思います。

世界適塾構想のハード面で重要な学生寮に関しては、「世界適塾ビレッジ」10年計画を立案しました。外国人学生や日本人学生のみならず教職員との混住とコミュニケーションを促進するためのPFI方式を取り入れた計画です。その第1期計画が2015年夏に本格的に始動します。政府の出資により大阪大学に設立された大阪大学ベンチャーキャピタル株式会社の活動内容に関する認定と認可を2015年6月末に国立大学として初めて得ることができました。大学外からの出資も加えて100億円強の資金で8月からベンチャー育成活動を始めます。大阪大学の様々な知財を社会へ還元する大きな道筋をつけることができました。

2015年6月には、環太平洋大学協会(45大学が加盟)の第19回学長会議を大阪で開催しました。これからますます重要になる環太平洋地域の主たる大学の学長が大阪に集まり、この地域の大学の絆を強くすることができました。学問による「調和ある多様性の創造」が21世紀の大学に求められる最も重要な役割であることを提唱し、強い共感を得ることができました。4年間の「世界適塾」構想のひとつのマイルストーンになったのではないかと考えています。

また、大阪大学の強い分野や異分野融合研究領域の次世代の卓越した研究者人材を育成するための世界基準の大学院「世界適塾大学院」設置に向けての道筋も作りました。このような改革と活動を継続していくことにより、大阪大学は「世界適塾」へと大きく発展する可能性を得ることができ、10年後、20年後、そして22世紀にも輝く大学になることができると私は信じております。

「勿嘗糟粕」という言葉を残されている初代総長の長岡半太郎先生は、大阪大学を去るにあたり「阪大を日本一の大学にするため教授陣には私の力のかぎり新鋭をすぐって、集まりいただいたつもりだ。そして研究第一、殊に産業科学の研究に力を入れる気運を作った。長岡は今大阪を去るが、どうか、教授・学生共々に、この阪大の学燈を守っていただきたい」と述べられました。私自身は長岡先生ほどの人物ではありませんが、この4年間で「世界適塾」に向けて数多くの道筋をつけることができたのではないかと思います。この道筋を最大限生かしていただき、立ち止まることなく、大阪大学が引き続き「世界適塾」を目指して世界でトップ10に入るような世界に冠たる大学に発展する努力を続けていくことを強く願っています。

夢は叶えるためにある

夢は簡単に実現しないから夢と呼びます。しかし、夢は自分に関係ない別世界だと考えてしまえば、夢は永久に夢です。夢に向かって目の前の一つ一つの山を登りきって行けば、いつの日か夢は現実のものとなります。たとえ、夢が現実のものにならなくても、そのプロセスが人生を豊かにしてくれます。大学を素晴らしいものにしてくれます。私は「世界適塾」への道半ばで大阪大学を去ることになりましたが、これからは皆様一人一人の力と英知を合わせて、大阪大学を「世界適塾」へと導いて欲しいと思います。それができるのは他でもない教職員・学生の皆様一人一人の力です。

天の川　世界適塾　はるかなり

皆様方と大阪大学のために、この4年間一緒に汗をかけたことは大変ありがたく、今となっては一生涯忘れがたい思い出となりました。ご協力、ご助言、ご支援、ご鞭撻いただいた多くの皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

最後に皆様方のご健勝とご活躍をお祈りしています。

2015年8月

▶2011年9月発行　大阪大学ニューズレター53号 掲載　総長就任インタビュー より

22世紀にも輝き続ける大学に——

将来花開く学問の種をまき、夢を持ち続けて生きる

第17代総長
平野俊夫
Toshio Hirano

大阪大学初の文系総長だった鷲田清一前総長に代わり、医学系研究科長・医学部長を務めた平野俊夫教授が大阪大学の第17代総長に就任した。任期は2011年8月26日から4年間。

平野教授は、スウェーデン王立科学アカデミーが表彰するクラフォード賞をはじめ、日本国際賞など数多くの受賞歴がある免疫学の研究者。

大阪大学100年の計を見据えつつ、「学問と教育の府」として将来に花開く基礎的学術研究を推進すると語る。

天まで届かなくても天を目指す

——総長就任をどのように感じ、受けとめられましたか。

総長に選ばれた6月10日は、くしくも恩師の山村雄一先生（第11代総長）のご命日にあたり、感無量というか、運命的なものを感じました。私が教授になった翌年の1990年4月、中之島で新しい研究室を指導して間もないころ、阪大病院に入院しておられた山村先生からちょっと来るようにと電話がかかってきました。病室に伺うと、「これを君にあげる」と先生直筆の色紙をいただきました。

そこには「樹はいくら伸びても天までとどかない。それでも伸びよ、天を目ざして」と書かれていました。常に全力を尽くしてできる限りのことをやれ、という意味でしょう。研究室に掛けて、いつも眺めているのですが、疲れているときにはきつい色紙でもあります。サイエンスはエンドレスですから、科学者はいつまでも真理や本質を求めていけということでしょう。これはサイエンスだけではなくて、人生にも言えることだと思っています。人生においても、人間はいろんな夢を追い求め続けます。しかし、現実は厳しく、簡単に実現できないから夢であり、理想であると思います。つい現実に妥協してしまい、適当にやろうとなりがちです。現実は現実として厳しく直視して、そのうえで、あくまでも夢や理想を追い求めよ、現実に妥協することなく、天を目指せという戒めです。

こういう気持ちをいつまでも持ち続けていれば、人は、肉体的に老いても精神的に若さを保つことができます。夢や理想やユートピアに向かって、一歩一歩進んで行くことが重要です。それは大学の運営においても同じだと思うのです。

——大学の使命である研究や教育、さらには運営面でも、夢や理想が大事だということですか。

そのとおりです。

もう一つ、山村先生は「夢見て行い、考えて祈る」という言葉を残されました。この色紙は多くの方に贈られており、私も教授になったときにいただきました。山村先生はこの順番が大事だとおっしゃっていて、考えて行うのではなく、行い考えることだと。研究を例に挙げると、論文ばかり読んで、つまり考えてばかりいてはだめなのです。やはり実験するという行動が重要で、独自の行動をした後で考える必要があるのです。考えてばかりいる、情報ばかり収集していると、新しい創造的なことはできない。独自に実験して新しい現象を見つけて、それをよく検証し考察する。そして、最後は「祈る」です。これは宗教ではなく、何かの成果を達成したとしても、それがどれだけ素晴らしいことかは、人間が判断できるものではない、神のみぞ知るということです。

例えば、私がかかわったインターロイキン6の発見にしても、25年前の当時は、どれだけ重要なものかということは想像できなかったわけです。非常に重要なものであることがだんだん分かってきて、最終的には関節リウマチを改善する医薬の研究に結びつきました。

私は今でも研究が好きで、総長になることにちょっと寂しい思いもあるのですが、選ばれたからには全力投球をして、責任を果たしたいと思っております。

基礎的な学問が大事であり、人材が大事であるという信念に基づいてやってきました。
結局、組織を形成しているのは一人一人の人間です。
いくら建物が立派でも、中身や人が伴わなければ、その組織はだめなのです。

「学問と教育の府」に徹して

——医学部長、大学院医学系研究科長として3年間の経験は、どのように生かされますか。

今から4年前に、肺がんが見つかり、阪大病院で手術を受けました。入院して思ったのは、阪大に育ててもらい、命まで助けてもらったので、定年前の3年ぐらいは若い人のために、また組織のために貢献したいということでした。研究一筋に過ごしてきた私には、大きな心境の変化でした。退院後に医学部長の選挙があり、推薦され、選ばれたという経緯があります。

医学部は基礎的な研究から臨床まで幅広く、先端的な移植や救命救急医療、公衆衛生など社会に面しているところもあり、大阪大学の縮図みたいに多様な組織です。そこで、少しでも医学部を良くしたいという思いでやってきました。

医学部教育には、医師を育てるという専門教育、職能教育の面があるのですが、それだけでは不十分です。学問的な裏付けのある医師、考える医師、リサーチマインドのある医師、将来の医療を担う医学研究者を育てて世に送り出す必要があります。それには、基礎的な学問が大事であり、人材が大事であるという信念に基づいてやってきました。結局、組織を形成しているのは一人一人の人間です。いくら建物が立派でも、中身や人が伴わなければ、その組織はだめなのです。教授選考の際には、優れた人を一人でも多く全国からリクルートしてくるという方針を徹底しました。人の問題ですから、その成果は10年先、20年先に出てくると思いますが、同様の考え方で大阪大学全体の運営に当たるつもりです。組織の規模はうんと大きくなりますが、基本は一緒

▶2011年9月発行　大阪大学ニューズレター53号 掲載　総長就任インタビュー より

「学問と教育の府」である大学が、
どこまで基礎的な学問・研究に力を割いているかということが、その大学の底力です。
大学は5年、10年単位ではなくて、100年単位で生き続ける必要があるのです。

だと思っています。大学の本質は、「学問と教育の府」であることです。

今、日本が大変な時です。こういう時代だからこそ、地に足を着けて、大学のやるべきことを地道にやることが、現在の困難を克服することに、結果として日本の将来につながるであろうというのが、私の考えです。

産学連携と同時に基盤研究を推進

――今まで以上に基礎的な学術研究を重視するという方針ですね。

「学問と教育の府」である大学が、どこまで基礎的な学問・研究に力を割いているかということが、その大学の底力です。大学は5年、10年単位ではなくて、100年単位で生き続ける必要があるのです。大学は100年単位で評価されるべきものであって、大阪大学が22世紀においても輝き続けるためには、時代の流行に流されるのではなくて、永続的な学術研究の基盤を確固たるものにすることが大切だと思っています。

競争的資金というのも曲者で、3年、5年という非常に短い期間に結果を出す必要があり、長期的なビジョンに立った大学運営ができなくなります。もう少し長いレンジの研究に、国が目を向けてほしいですね。機会があるごとに国に対して大学の立場を主張していくことも、総長の役目だと思っています。

今は出口が見える研究に大型予算がつく傾向もあって、実用的な研究や産学連携に関連するような研究に、日本の大学全体が走りすぎているように感じています。

――大阪大学は日本の大学の中でも、最も産学連携を推進してきた大学であり、それが伝統の一つになっています。

大阪大学そのものが民間の資金でできた唯一の帝国大学ですから、産学官連携の理想的な見本みたいなところです。私は産学官連携は阪大の強みだと思いますし、積極的に推進すべきだと考えています。ただ一方で、基礎的研究というのはすぐに成果が上がらないものですから、忘れられる傾向がある。それが若い人にも伝わりますと、次の新しい芽が出てこないことを危惧しているのです。そういう意味で、やはり基礎的学術研究が大事であるということに、ちょっとバイアスを加えないと途切れてしまうような状況にあるのではないかと思うからです。

仮に応用的・実用的な研究、産学連携が可能な研究ばかりをやっていると、それで5年や10年ぐらいはいいかもしれませんが、20年、100年先にはだめになると思うのです。やはり20年、100年先に産学連携ができるようなことを、今やっておかないといけない。桜の花が満開になって花見をしているうちに、花は散って行きますから、常に次の種をまき、苗を植えておかないといけない。それが基盤研究なのです。

産学連携を推進すると同時に、基盤研究をいかに盛り上げていくか。大学が将来に向かって伸びていくためには、そこを何とかしないといけません。今回、研究担当理事を二人に増やしたのも、その狙いがあるからです。

学部留学生を増やして育てる

――教育について、構想やビジョンをお聞かせください。

国際化がポイントになるでしょうね。最近の日本人学生は、内向きになっていると言われますが、医学部でも留学を避ける傾向があります。留学しなくても日本でそれなりに研究できることもあって、現状に満足するというか、夢が小さくなってきているのを感じますが、これは社会現象ですね。

そこで私が考えているのは、アジアの高校生に大阪大学の各学部に入学してもらうことです。大学院は国際化が進みつつありますが、問題は学部の学生です。中国や韓国やベトナムなど、アジアの優秀な高校生はアメリカの大学へ行ってしまっています。その人たちを大阪大学に呼びたいのです。

私の理想は、全学部入学定員に占める留学生の割合を10%前後にすることです。例えば、タイなどの高等学校と提携して、優秀な人を推薦してもらう。そういう提携校を増やして、寮で日本人と一緒に生活し、日本の文化も学んでもらう。日本人学生も、やる気のある外国人学生に刺激されて伸びますし、国際感覚が植えつけられます。国際交流を、社交的なものではなく、実際に学生が海外から入学してくるような、もっと実質的なものに変えたいと思っています。

――「国際化拠点整備事業」の一環として、英語だけで学位取得が可能なコースもスタートしています。

それをもっと発展させて、制度的により良いものにしていきたい。私は何も英語をしゃべるのが国際化や国際交流だとは思いません。言葉の問題ではなくて、人間と人間の交流が大事なのです。

留学生には1、2年の間、英語で講義をするとともに、日本語のみならず日本文化を教育し、専門に進めば各学部の事情に応じて、ある学部は100%英語の授業、ある学部は半分英語で半分日本語、ある学部は大半が日本語と、学部の自主性に任せることになると思います。日本語の国家試験にパスしなければならない医学部などは、日本語が80%ぐらいで、英語が20%ほどになるかもしれません。

阪大の箕面キャンパスには、すばらしい環境を持つ日本語日本文化教育センターがあるので、そのリソースをうまく使うと、留学生は母国語と英語と日本語の3カ国語に対応できるようになります。

阪大の各学部を卒業して大学院に進む人、日本で活躍する人、母国に帰る人、あるいは世界に飛び立つ人、なかには阪大の教員になる人も出てくるでしょう。阪大で育った人が世界中に広がり、その人たちの間で人間関係ができてくる。つまり、阪大の内部から国際化されていくわけです。教育の停滞を打ち破る魔法はないのですが、これは大学にとっても、日本の国にとっても有用なことだと思います。

学生時代は山登り、趣味はクラシック音楽

――個人的なこともお聞きします。どんな学生時代でしたか。

もともと体が弱いほうだったので、高校時代は体を鍛えようと思ってハイキングクラブに入り、山歩きをしていました。阪大に入学してからは医学部の山岳部に所属し、登山に熱中しました。富士山以外の3000㍍級の山はすべて登りました。なかでも南アルプスの仙丈岳が好きで、冬山も含めて10回ぐらい登っています。

当時の医学部の講義は暗記物が多くて退屈だったのですが、3年生の秋に近藤宗平先生の放射線基礎医学の講義を聴いて感動しました。京都大学理学部のご出身で、とても理論的でフレッシュだったので、講義が終わったらすぐに先生のところへ行きました。近藤先生の研究室に出入りするようになり、いろいろ実験をさせてもらって、学生の時に学会発表もさせていただきました。

その後、山村先生の免疫学の講義を受けて、免疫研究の面白さに目覚めました。山村先生の講義も暗記ではなく、やはり考える講義でしたね。近藤先生には、まだ国家試験を受ける前から、「免疫を研究するなら早くアメリカへ行くのがいい」と言われました。結局、山村先生の第三内科で1年間の臨床研修の後に、近藤先生の紹介で、ボルティモアにあるNIH（国立衛生研究所）の研究室に留学することになりました。ボルティモアに着いたとき、空港まで車を運転して迎えにきていただいたのが、第三内科の先輩で恩師の岸本忠三先生（第14代総長）でした。岸本先生からは研究の本質と厳しさを教わりました。そういう人の出会いは大事だと、つくづく思います。

――ご趣味は？

クラシック音楽やオペラが好きですね。高校時代は少しバイオリンを習っていましたが、4年ほどでやめました。アメリカにいたときは、月に1回ぐらい土曜日に、ボルティモアからニューヨークのメトロポリタン歌劇場まで、片道3時間ほどかけて車を運転し、オペラの昼の部と夜の部を続けて鑑賞して明け方に帰るというような事もありました。

今の瞬間を必死に生きる

――大阪大学の教職員の方には、どういうことを望みますか。

大阪大学を構成しているのは一人一人の方々であり、一人一人の力が大阪大学を支えています。それぞれの人がどういう使命感を持って仕事に臨むかということで、大学全体のことが決まってくるわけです。大阪大学が22世紀においても誇りをもって輝き続ける大学であるために、それぞれの分野で、夢を持って全力投球していただきたい。それをできる環境づくりが、総長である私の仕事だろうと思っています。

――最後に、学生の皆さんへのメッセージを。

私は若い人に、「目の前の山を登り切る」ことが重要であると言ってきました。たとえ低い山でも頂上に立つことができた人だけが新しい展望を得ることができ、次に目指すべき高峰が見えてきます。

私の経験からも、今を必死に生きるということがものすごく大事だと思っています。人生は今の瞬間の積み重ねであり、今という時間を懸命に生きることが大切です。そして、夢を忘れることなく、常に挑戦し、世界に羽ばたいてください。

（2012年5月策定）

国立大学法人大阪大学は、「物事の本質を究める学問と教育が大学の使命であり、この使命を果たすことで大学は社会に貢献していく」という理念のもと、「地域に生き世界に伸びる」をモットーに、大阪大学を学問と教育の世界的拠点とするとともに、高い倫理観を保持した優秀なグローバル人材を育成するという志を有している。

「国家100年の計は教育にあり」と言われているように、わが国の将来は、ひとえに人材育成にある。大阪大学は、何が物事の本質であるかを見極める能力を有し、各方面で指導的立場に立てるグローバル人材を世に送り出すという使命を担っている。また、社会に適切な変革をもたらすイノベーションの推進や心豊かで平和な社会の実現は、物事の本質を究める基礎研究の振興なくしてはありえない。社会が大学に求めているのは、このような知的創造活動としての基礎研究の推進であり、それに基づいた産学連携・社学連携である。大学でしかできない基礎研究や学問に基づいた教育を推進していくことにより、社会の発展と福祉に貢献するとともに、教育・研究のあり方について積極的に提言・実践していく。

個々の構成員が溌剌と自由に活動でき、多様性を有するすべての教育研究組織が協力し、かつ独自性を発揮することが大学発展の根本である。そのうえで、総長のリーダーシップのもと、執行部、事務機構、教育研究組織、それぞれの構成員全員が社会の期待に応えることができるように、積極的に大学改革を推進していく。これらを踏まえ、大阪大学は原点である適塾や精神的源流となっている懐徳堂の精神を後世に引き継ぎながら、世界屈指のグローバル大学として22世紀においても輝き続ける基盤を、以下の8つの方針に基づき、構成員全員の英知と力を合わせて構築していく。

未来戦略 8 箇条

- 科学政策や国際戦略の策定、分野横断的な研究領域の開拓、深い専門性と多様性を有するグローバル人材の輩出、基礎研究の推進、若手研究者の育成など、大学全体が取り組むべき戦略的課題に柔軟かつ機動的に対応するために「大阪大学未来戦略機構」を設置する。総長のリーダーシップが発揮できるように、機構長を総長とし、本機構を大阪大学における大学改革の柱と位置づける。

- 全学教育推進機構を核に、教育のグローバル化を強く推進する。学生の海外派遣・留学を支援する施策を充実させるとともに、地球規模での多様な人材により構成されるグローバルキャンパスの早期実現を目指す。

- グローバルキャンパス実現のための国際戦略を策定する。この過程で海外拠点のあり方を見直すとともに、より実質的な大学間交流を目指す。

- 個人の観点と組織の観点を共に活かし、中長期的な視点に立って全体像を見据えつつ、さらに総長や各部局長の考えに基づき、大阪大学の将来の発展につながるような基礎研究の推進や人材育成などに、限られた財源の有効活用が図れるよう、大学内の財源配分を再検討する。

- 施設の維持管理を将来にわたって計画的かつ持続的に大学の責任で実行していく。このために必要となる財源確保の方策を策定し実行する。また、大学が保有する施設や土地等を中長期的展望に立ち、処分を含めてより有効活用するための施策を策定する。

- 大阪大学の未来戦略に基づいて、同窓会組織とより緊密な連携を図るとともに、未来基金の恒常的な基金増加方策を計画し実行する。

- 大阪大学の基本姿勢を広く社会や国に発信し、社会により開かれた大学を目指す。この目的に沿った広報・社学連携活動を国内外の区別なく、さらに強化する。

- 健康でより快適なグローバルキャンパスを目指し、施設の充実のみならず、学びがいや働きがいを感じ、安全で平穏に学習や研究に没頭できる、心身ともに健康で快適な環境の維持に資する施策を立案し実行する。

▶2012年5月策定　大阪大学未来戦略(2012―2015)―22世紀に輝く― パンフレットより

大阪大学未来戦略機構の創設

大阪大学未来戦略機構の立ち上げ

●未来戦略機構[Institute for Academic Initiatives(IAI)]のグランドデザインを策定し、国内外の研究動向の調査・解析と、それに基づいた企画・提言を行える体制を構築する。

戦略企画室の設置

●横断的な教育戦略ならびに教育改革についての企画立案、グローバル化推進プログラムの策定を行う教育改革チームを組織する。

●国内外の研究動向・研究支援動向を把握し、本学として特徴ある研究や将来性のある研究者・研究分野の発展に資する未来戦略・企画を提案する研究企画チームを組織する。

●大学の有する教育・研究資源を的確に把握し、戦略的大学経営に資する様々なデータの収集、調査、分析、提供、提言を効率的・効果的に行うIR(機関研究)チームを組織する。

研究室部門の設置

●専任教員を配置し、新しい学問領域の開拓を行うとともに、大阪大学の未来戦略に対する指針を示す。

博士課程教育リーディングプログラム等の大学院教育の実施

●革新的大学院教育を推進し、国際的視野と独創力を持った博士人材を育成する。

最先端研究グループの育成支援

●本学で育成された独創的研究を国際的最先端研究へと発展させるため、部局横断型研究体制の構築を支援し、国際的研究拠点の創出を目指す。

本質を究め未来を創造する研究

研究支援体制の充実による基礎研究の推進

●相談員制度及びチャレンジ支援の体制を充実させる。

●時代を切り拓く基礎研究を長期的視点から支援する寄附講座の設立を目指す。

●在外研究やサバティカル制度を活用し、研究者に自己研鑽やリフレッシュの機会を提供する各部局の取り組みを支援する。

大阪大学の最先端研究に対する支援

●学際的・融合領域の研究を集中的に支援するため、最先端ときめき研究推進事業を実施する。

●リサーチ・アドミニストレーターを充実させ、最先端研究プロジェクト推進のための大型資金の獲得や研究環境の整備等を支援する。

研究推進環境の改善

●研究に専念する時間を確保するため、部局の意思決定プロセスの見直しを促す。

●データ管理体制の一層の一元化を図り、研究に投入できる時間の拡大・確保を目指す。

世界に通用する人を育む教育

教育目標の追求

●分野別に明確な学習成果目標を設定し、質の高い専門教育を実施するための教育改革を行う。

●学部から大学院まで一貫した全学横断教育を推進し、教養、国際性、デザイン力の3つの汎用的能力を涵養する。

教育の質の保証と教育改革の推進

●対話型や課題発見型授業等の能動的学習法の調査・企画を行うとともに、厳格な達成度評価システムを構築し、全学と部局の教育改革を推進する。

●学生相互の、また学生と教員のコミュニケーションをさらに活性化させる場を整備し、学生にとっての主体的な「学び」の環境を醸成する。

グローバル人材の育成

●外国語運用能力を高めるカリキュラムを充実させるとともに、英語コースの授業を日本人学生にも提供し、留学生と日本人学生が共に学ぶキャンパスを実現する。

●学部における留学生の比率を、できるだけ早期に10%に引き上げる。留学生に対する日本語教育を充実させるとともに、単位互換制度やダブルディグリー制度を整備する。

キャリア形成とインターンシップの推進

●社会のニーズを先取りした人材の円滑な流れを実現する全学支援制度を整備し、キャリア開発支援やキャリア形成のための教育を充実させる。

●国内外の各種インターンシップ等を通じた実践的教育を推進し、社会の現場を知り、ネットワークを広げる能力を持つ学生を養成する。

優秀な学生の獲得と学生支援の強化

●入試制度改革や新たな教育プログラム開発などにより、国内外の優れた人材がより多く大阪大学に集まる工夫を行う。

●就学支援や課外活動支援を強化し、教育条件の整備を図る。

世界が大阪大学を目指す国際戦略

学生・研究者の受入れと派遣の促進

●学生・研究者の受入れと派遣のプログラムの新規開発と既存プログラムの充実を図る。

●優秀な留学生獲得のため、より組織的かつ効率的な留学フェアを実施する。また、海外の高等学校を対象とした指定校制度の導入を検討する。

国内外の大学及びコンソーシアム等に関する連携戦略の実施

●海外の大学等との学術交流協定締結に関する基本方針の見直しを進め、協定に基づく実質的かつ効果的な学術交流及び共同研究を推進する。

●二国間交流、多国間交流ネットワークに基づく各種コンソーシアムへの参加と活動に関する明確な方針を定め、活動の実質化、効率化を図る。

海外同窓会組織の充実

●海外における交流支援のネットワークを構築するため、海外同窓会組織をさらに充実・強化する。

海外拠点の再構築

●地域の特性に応じたミッションを明確にし、海外拠点の設置形態について検討する。

豊かな社会を生みだす産学連携

産学官の連携の深化と拡充

●企業等との協働研究所や共同研究講座を通じた「インダストリー・オン・キャンパス」を深化させるとともに、これらを利用して産学連携での人材育成や挑戦的な研究への取り組みを進める。

●産と学、学と官の情報交換や人的交流を密にし、研究課題の発掘と設計を行い、新規プロジェクトなどの立ち上げを支援する。

●文理の分野を超えた産学連携の立ち上げを試みる。

持続的・自立的な産学連携活動のための組織の見直し

●契約及び知的財産の取り扱いや技術移転などに関わる事柄について、自立化を目指した戦略の検討を進める。

●テクノアライアンス棟に産学連携の運営機能を集中させるとともに、産学連携組織を見直す。また、事務系職員の資質の向上と育成のため、体系的なシステムの導入を検討する。

大学と人と地域が交流する社学連携

大学知を軸にした相互市民教育の展開

●研究者の研究成果公開活動(アウトリーチ活動)を支援し、その推進を通じて、大学知と大学の人的資産を広く社会に浸透させるよう継続的に取り組む。

●総合学術博物館、適塾記念センター、21世紀懐徳堂、同窓会組織、各部局が相互に連携を強化して、各種の講座やセミナーなどの催事を効率的に行う。

地域社会や他大学等との連携強化

●大学コンソーシアム等を核とした他大学との連携事業を企画・実行する。

●近隣自治体との連携協定に基づき、社会人教育・生涯学習に関わる種々の共催事業などを一層強化するとともに、相互保有施設の積極的活用に取り組み、多様な社学連携活動の場を提供する。

質と倫理を兼ね備えた大学病院

豊かな人間性を持った優れた医療人の育成

●高度専門職業人として、高い見識と技術、リサーチマインドを持った医療人を育成するための循環型医師キャリア形成システムの構築を推進する。

●看護・医療技術領域の医療専門職の育成を図るとともに、医療安全能力の向上に資するための実践的教育パッケージの開発を行う。

未来医療の開発・実践と地域医療への貢献

●未来医療センターと臨床試験部を発展的に統合・改組し、先端医療開発部(仮称)を設置して、創薬基盤を形成する拠点としての臨床研究体制の充実を図る。

●「『口の難病』から挑むライフ・イノベーション」事業を推進し、近未来歯科医療センターにおける先進歯科医療及び再生歯科医療の充実と臨床研究の拡大を図る。

●地域におけるがん診療体制の一層の連携強化を図るため、オンコロジーセンター棟を新設し、がん診療の機能を集約化する。

病院運営のための基盤強化

●院内の診療・運営体制の見直しを図るとともに、業務の効率化を促進する。

●患者サービスに資する体制の見直しを進め、患者の立場に立った安心・安全な医療の提供を推進する。

●防災対策及び災害医療についての検討を行い、院内外における連携体制の強化を図る。

▶2012年5月策定　大阪大学未来戦略(2012―2015)―22世紀に輝く― パンフレットより

教育と研究の基盤を支える大学運営

【 未来を見据えた財務運営 】

財源配分の見直し

- 基礎研究の促進を目指して、研究者への配分を含めた間接経費配分の見直しを行う。
- 病院の経営努力や産学連携の推進により大学の収入を確保するとともに、未来を見据えた競争力の維持・向上のために大学内の財源配分を見直し、大阪大学未来戦略の実現に充てる仕組みを構築する。
- 大学の未来戦略を具現化するために、総長裁量経費を基礎研究の推進、グローバル人材及び若手研究者の育成に重点的に配分する。

財務基盤の強化

- 国の財政事情による運営費交付金の削減などに対応しうる財務体質を強化するため、固定的経費の見直しを含む財務基盤の検証作業を徹底する。
- 未来基金への寄附の拡大を目指し、個人・法人向け活動に積極的に取り組む。

効率的な資産運用・活用

- より詳細な資金計画に基づく効率的な資金運用を進めるとともに、中長期的なビジョンに立った計画的な保有資産の有効活用を図る。

業務改革等の推進による経費節減

- ルーチン業務をアウトソースするなど、業務改革を推進する。
- 光熱水費などの契約や仕様を見直すとともに、新たな契約方式の試行など、経費節減のための積極的な取り組みを行う。

【 柔軟な組織・体制の整備 】

機動的な運営体制の構築

- 既存の室体制を廃止し、各理事は、総長のリーダーシップのもと理事補佐と共に、関係部署との更なる連携強化を図り、諸課題への対応策の企画立案能力と実行力を強化する。
- 執行部と部局長との間の意思疎通を定期的に図り、開かれた透明な大学運営を進める。

教育研究組織の見直し

- 部局が果たすべき役割や機能の必要性を戦略的に判断し、教育研究組織の改組、統廃合、新設(基本的にスクラップ・アンド・ビルド方式)等に柔軟に取り組む。
- 未来戦略機構を活用し、中長期的視野のもと本学独自の部局横断的な活動計画を策定するとともに、その実現に必要な組織整備を進める。

【 柔軟な人事制度の構築 】

人事雇用制度の柔軟化による優秀な若手教員・外国人教員・研究者・医療技術者の確保

- 任期付教職員に係る雇用制度の弾力化や特例教員制度の創設等、人事雇用制度の一層の弾力化を図る。
- 退職金割増制度の改善を図ることなどにより、人事の活性化及び退職後の人生設計の選択肢の多様化をより一層推進する。
- テニュアトラック制度の充実や大学留保ポストの活用等により、優秀な若手教員や女性教員の登用を促進する。
- 医療従事者の勤務の特殊性に対応する柔軟な人事給与制度の構築を引き続き推進する。

大学経営に必要な高い専門的能力を持つ職員の採用・育成

- 職員採用試験の多様化やスタッフ職等の活用により、多様な能力・個性を有する人材の雇用や高度の専門性を有する人材の登用をより一層促進する。
- 階層別研修の体系化や専門研修の充実、メンター等の育成・配置によるオン・ザ・ジョブトレーニングの充実等を推進し、職員全体の専門性の向上を図る。
- 勤務評価をより明確なものとするなど評価制度を充実させ、それに基づく昇任、昇給等を実施する。

多様な人材の活用

- 「大阪大学男女共同参画推進基本計画」を策定し、男女が共に働きやすく、学びやすい環境を整備する。
- 新たな障害者雇用促進の方策を実施し、能力を十分に発揮して働くことのできる環境の整備を積極的に推進する。

【 事務改革・業務改善の推進 】

柔軟かつ活力に満ちた組織の構築

- 教育・研究のサポートの強化、さらには社会の要請に適切に対応できるよう、柔軟で活力を持った事務体制を構築する。
- プロジェクトマネジメント・チーム(PMT)や未来戦略機構等において、将来を見据えて計画的に若手事務職員の育成を行う。
- 全教職員の協力、相互扶助による快適な職場を構築するため、意識改革、構成員間のコミュニケーションの向上及び情報共有の強化を図る。

業務運営の効率化の推進

- 本部事務機構と部局の構成員が一体となって、会議を含む不要業務の削減や効率化できる業務の徹底的な洗い出しを行う。
- これまでの事務改革などによって導入された制度やシステムを検証し、それらの改善や見直しを行う。

【 次期中期計画に向けた計画・評価 】

計画的な中期計画等の達成及び戦略的な次期中期計画等の策定

- 中期計画等の確実な達成を目指した年度計画を策定するとともに、中期計画等の進捗管理を強化し、効率的な評価の実現を目指す。
- 評価結果に基づく分析を踏まえ、本学の活動を戦略的かつ積極的にアピールすることのできる次期中期目標・中期計画の策定を行う。

適正かつ効率的な評価体制の推進

- 自己点検・評価、外部評価など各種評価の質の向上を支援するとともに、評価の結果を法人運営に活用する。
- 大学基礎データの充実、活用を図るとともに、大学基礎データの分析を行う体制を強化・再編する。

【 社会と大学をつなぐ双方向の広報 】

大学知の情報収集と国内外に向けた広報活動の推進

- 大阪大学の全構成員が共有できる「広報ポリシー」と「広報年間計画表」を作成し、効果的な広報の手続きについて分析・企画するとともに、社会に向けた大学知の集積・発信と提供(プレスリリース)を積極的に推進する。
- 公式WEBページ、ツイッター、ソーシャル・ネットワーキング・サービスの活用などウェブコンテンツを充実させるとともに、紙媒体等の全ての広報手段との連携を強化する。
- 国内外の優れた研究者・学生を獲得するため、大阪大学の研究者検索システムの改善を行う。
- 広報・社学連携オフィスやクリエイティブユニットなど、広報強化のため適切な支援体制を構築する。

【 情報環境の高度化 】

情報基盤の充実と効率化

- 学内の情報システムを共通基盤プラットフォームへ集約化することを推進し、セキュリティの向上やシステムの効率化を図ることにより維持管理経費の削減を行う。
- 大阪大学総合情報通信システム(ODINS)、全学IT認証基盤システム、学務情報システム、教員基礎データシステムなどの有効活用に関して事務改革とも連動して効率的な環境整備を行う。
- 電子ジャーナルをはじめとする学術情報基盤を整備し、より一層の効率的な活用を図る。

【 安全・快適なキャンパス環境の整備 】

学問と教育の世界的拠点にふさわしいキャンパスの整備

- 未来戦略機構の活動拠点を、吹田キャンパス及び豊中キャンパスに設置する。
- 最先端医療融合イノベーションセンター、生命動態システム科学研究拠点施設、文理融合型総合研究拠点施設などの整備を実施する。
- 建物の耐震化やライフラインの改善を図るとともに、災害時における地域住民の応急避難場所、地域の拠点病院としての観点からも必要な対策を講じ、安全・安心の確保に努める。

全学的な施設・環境マネジメントの推進

- 全学的な視点による既存施設の効率的な利用を促進するとともに、施設老朽化対策の制度化を図る。
- キャンパス低炭素化推進計画に基づき、省エネルギー及び温室効果ガスの削減に向けた取り組みを推進する。

【 リスク管理の維持と向上 】

快適で危機管理意識の高い教育研究・職場環境の確立

- 保健センター、学生支援ステーションを中心とするメンタルヘルスケア体制及びハラスメント防止体制の連携を強化し、全学的なセーフティネットを構築する。
- 安全衛生管理、危機管理に関する研修や体験型机上訓練等をFD(ファカルティ・ディベロップメント)、SD(スタッフ・ディベロップメント)等へ積極的に組み込む。

【 学生と教職員が健康で快適に過ごせるキャンパスの形成 】

学生及び教職員のフィジカルヘルスとメンタルヘルスの向上

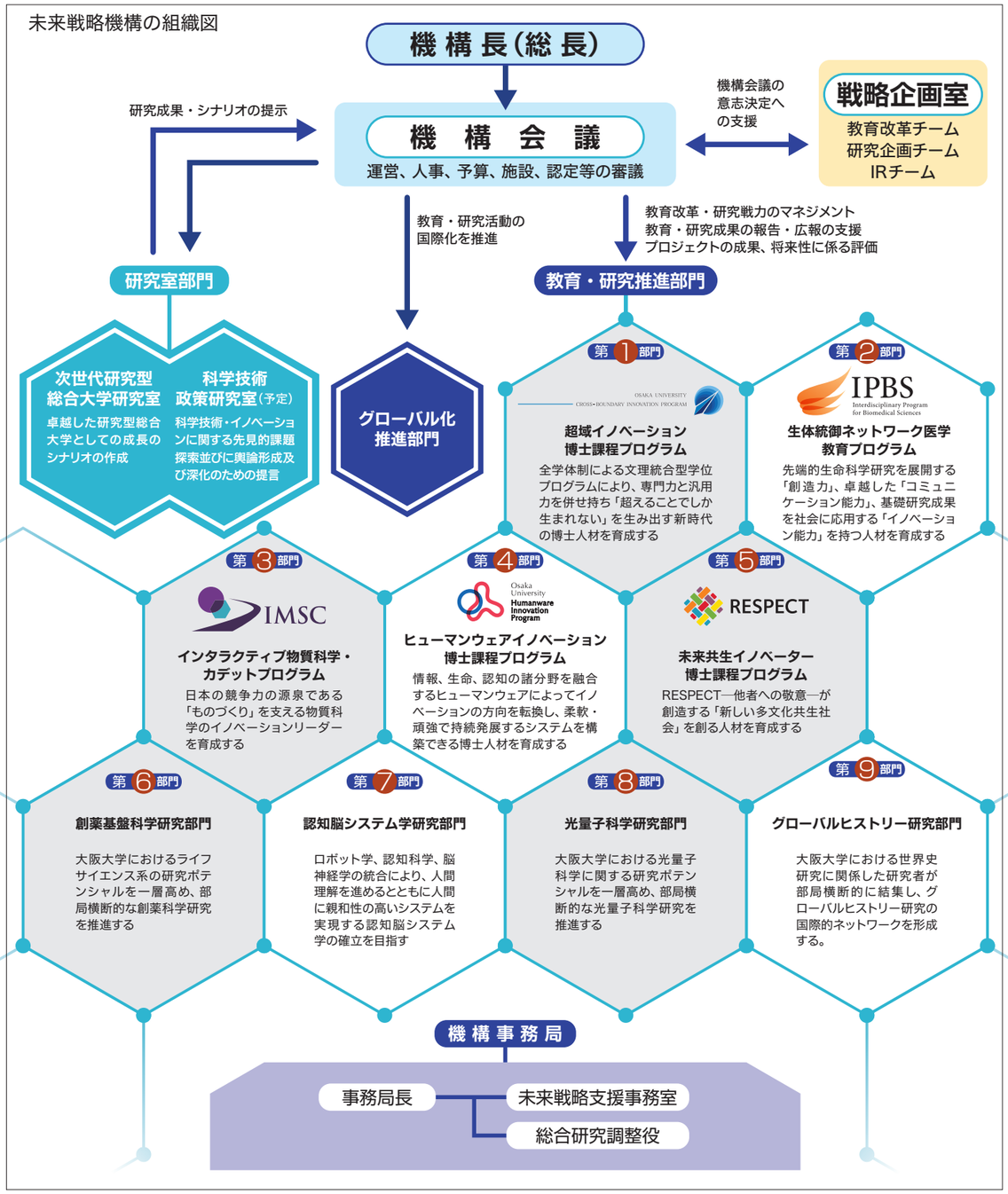
- フィジカルヘルス及びメンタルヘルスのリテラシー型健康教育を推進することにより、疾病や体調不良、メンタルヘルスの不調などに対して一次予防可能な対処能力の向上を図るとともに、教員へのFDを推進する。
- 学生及び教職員の健康診断受診率の向上を図り、フィジカルヘルス及びメンタルヘルスのサポートシステムを確立する。
- 青少年を含む学生及び教職員への受動喫煙防止を徹底するとともに、敷地内禁煙を目指す。

大阪大学未来戦略機構
Institute for Academic Initiatives

動画 大阪大学の決意 ～未来戦略機構の始動～(2013.6.1) youtu.be/_UILAKwKmMk

未来戦略機構の特徴は、部局縦割りの教育研究と管理運営を排し、部局や教員が連携協力して学際的・融合的な取り組みが機動的に推進できるよう、総長のトップマネジメントの下で大阪大学の特筆分野にさらに磨きをかけ、総力を挙げて大学システムを革新させる「大学の中の大学」プロジェクトです。

未来戦略機構の組織図



――未来戦略機構の役割――

▶2015年発行　世界トップ10に向けたグローバル化の強化推進と人材育成・獲得支援策 パンフレットより

世界トップ10に向けたグローバル化の強化推進と人材育成・獲得支援策

「適塾」から「世界適塾」へ
—学問による調和ある多様性の創造—

大阪大学総長

大阪大学は、緒方洪庵が1838年に開いた蘭学塾「適塾」を原点としています。適塾には、日本各地から志をもった多くの若者が集まり、福沢諭吉、長与専斎、大村益次郎、佐野常民など明治維新を切り拓き、今日の日本の礎を築いた多くの塾生を輩出しました。その後適塾の流れを汲む大阪医学校や大阪医科大学などを経て、1931年には医学部と理学部からなる大阪帝国大学が創立されました。そして翌々年には大阪工業大学が工学部として加わりました。“大阪にも帝国大学を”という大阪府市民の熱意と経・産・官挙げての努力が結実して実現しました。国立大学として学部学生数トップを誇る日本屈指の総合大学に成長した大阪大学には、適塾の進取の精神と帝国大学開学の理念が今も流れており、21世紀の現在、世界から人々が集まるGlobal University「世界適塾」を新しい目標として、2031年の創立100周年には世界トップ10の研究型総合大学になることを目指しています。

地球上には言語、人、文化、宗教、国家などの「多様性」が存在します。多様性は心豊かな人類社会の発展には不可欠です。一方、多様性が故に対立や戦争が生じます。人類の歴史は多様性による発展と戦争の歴史です。人類が経験したことのない次元でグローバル化が進む21世紀は、多様性がもたらす負の側面が益々強くなり多様性の爆発の世紀になる可能性すらあります。大学は言うまでもなく「学問の府」であり、この役割は過去、現在、未来不変ですが、21世紀の大学の大きな役割として学問による「調和ある多様性の創造」があると思います。学問は芸術やスポーツ、あるいは経済活動等と同様に人類共通言語です。学問は多様性がもたらす様々な障壁を乗り越えることができます。学問を介する人の交流を通じて異文化の理解や尊重が可能となります。

私たち大学人はこの学問による「調和ある多様性の創造」により、心豊かな人類の発展に貢献しなければなりません。その上で、「学問の府」として大学は基礎学問を追究するとともに、人口、食料、エネルギー、環境、感染症や自然災害などの様々な地球規模の問題やリスクに対する知を創造するとともに、次代を担う人材を育成していかなければなりません。

大阪大学は「世界適塾」として、学問による「調和ある多様性の創造」により心豊かな人類社会の発展に貢献していきます。

大阪大学は、創立100周年を迎える2031年に、研究型総合大学として世界のトップ10に入る事を目指し、以下の大きな柱に沿って大学改革を進めています。

1 グローバルに活躍する研究者の招へい、優秀な(若手)研究者を育成するために、研究費、給与、報奨制度といった面から研究環境を充実させ、学外からは「大阪大学へ行きたい」「大阪大学で研究したい」、学内では「大阪大学はやりがいがある」など、魅力ある大学にします。

2 国際社会で通用するグローバル人材を育成するために、大阪大学の学生の海外派遣や、海外からの留学生受入れを積極的に進めていきます。

3 総長のトップマネジメントと、部局長の裁量をうまく機能させ、個々の部局が自ら積極的に常にワンランク上を目指す活気ある取組みができるようマネジメントを強化します。

※これらの施策を推進するため、下記の財源等を獲得し活用しています。

財源名	採択額（単位：百万円）
運営費交付金【機能強化枠】（平成26～27年度）	340
運営費交付金【リーダーシップ枠】（平成26～27年度）	1,130
国立大学改革強化推進補助金（平成24～27年度）	1,580
研究大学強化促進事業（平成25～27年度）	890
スーパーグローバル大学創成支援（平成26～27年度）	660
リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備事業（平成24～27年度）	280
合計額	4,880

出資事業	出資額（単位：百万円）
官民イノベーションプログラム	20,000

卓越した外部人材の招致

大阪大学特別教授制度

目的 本学は、卓越した業績を有し、先導的な役割を担う教授に対し、大阪大学特別教授の称号を授与し、その貢献を讃えるとともに、その活動をサポートすることにより、国際的競争力のある世界的拠点となることを目指すため

称号授与者数：13名　平成26年7月までに以下の13名に特別教授の称号を授与

審良 静男	免疫学フロンティア研究センター・教授
功績：「自然免疫に関する教育研究業績」	
石黒 浩	大学院基礎工学研究科・教授
功績：「人と関わるロボットの研究開発に関する教育研究業績」	
大竹 文雄	社会経済研究所・教授
功績：「労働経済学、公共経済学に関する教育研究業績」	
河田 聡	大学院工学研究科・教授
功績：「ナノフォトニクスに関する教育研究業績」	
北岡 良雄	大学院基礎工学研究科・教授
功績：「物性物理学に関する教育研究業績」	
坂口 志文	免疫学フロンティア研究センター・教授
功績：「制御性T細胞による免疫応答制御に関する教育研究業績」	
難波 啓一	大学院生命機能研究科・教授
功績：「生体超分子の立体構造と機能の解明に関する教育研究業績」	
西尾 章治郎	大学院情報科学研究科・教授
功績：「情報科学に関する教育研究業績」	
濱田 博司	大学院生命機能研究科・教授
功績：「発生生物学に関する教育研究業績」	
原田 明	大学院理学研究科・教授
功績：「高分子化学に関する教育研究業績」	
福住 俊一	大学院工学研究科・教授
功績：「機能物質化学に関する教育研究業績」	
三浦 雅博	大学院工学研究科・教授
功績：「有機合成化学に関する教育研究業績」	
吉森 保	大学院生命機能研究科・教授
功績：「細胞生物学、特にオートファジーに関する教育研究業績」	

※職名は授与当時のもの

外国人教員等採用促進プログラム

目的 学部・大学院における研究・教育のグローバル化を推進するため

概要 部局が優れた業績をあげている外国人研究者等を本学専任教員として雇用する場合に研究教育整備費を交付

採用者数：6名　（国籍：スペイン、インド、スイス、日本）

グローバル化推進教授招へいプログラム

目的 教員の多様化並びに国際化、学部・大学院学生教育のグローバル化の推進を支援するため

概要 国際的に評価されている外国の研究型大学のPh.Dを取得し、世界トップレベルの優れた業績をあげている研究者を本学教授として新たに雇用する場合に教育研究経費を交付

国際的に卓越した研究者に対する年俸制導入

目的 人事制度を柔軟化し、国際的に卓越した外国人教員を雇用するため

概要 業績連動型の任期を付さない年俸制を導入

氏名	前任校	所属部局
Faenov Anatoly	ロシア科学アカデミー	未来戦略機構
●研究分野　パワーレーザーによる高エネルギー密度科学		
Coban Ishii Cevayir	ジョンスホプキンス大学	未来戦略機構
●研究分野　マラリア免疫学		
Smith Nicholas Isaac（予定）	大阪大学免疫学フロンティア研究センター	未来戦略機構
●研究分野　免疫学		
Diez Ruiz Diego Manuel（予定）	大阪大学免疫学フロンティア研究センター	未来戦略機構
●研究分野　免疫学		
Krozewski Gerold Michael（予定）	ザ・フリーステイト大学	未来戦略機構
●研究分野　グローバルヒストリー		

クロス・アポイントメント制度

目的 教育研究・産学連携活動等を推進するため

概要 本学と別の機関の双方に身分を有し、双方で業務を行う制度を導入

平成26年度　協定締結数：31機関

機関名	国
ケベック大学モントリオール校	カナダ
ナント中央理工科大学	フランス
プリマス大学	イギリス
ムハンマド5世大学	モロッコ
アーヘン工科大学	ドイツ
インスブルック大学	オーストリア
インド工科大学	インド
ジェームズクック大学	オーストラリア
ギーセン大学	ドイツ
サスカチェワン大学	カナダ
ユーリッヒ研究所	ドイツ
ヨーロッパ日本研究所	スウェーデン
フィンランド国際問題研究所	フィンランド
ヘブライ大学	イスラエル
ノルウェー科学技術大学	ノルウェー
南開大学	中国
国立東華大学	台湾
グローニンゲン大学	オランダ
香港大学	香港
RMIT大学	オーストラリア
ダルムシュタット工科大学	ドイツ
TRIUMF	カナダ
ウィニペグ大学	カナダ
インハ大学	韓国
ドゥブナ合同原子核研究所	ロシア
ベトナム科学技術アカデミー	ベトナム
マッセー大学	ニュージーランド
ブリュッセル自由大学	ベルギー
欧州X線自由電子レーザー施設	ドイツ
東京工業大学	日本
理化学研究所	日本

平成27年度　協定締結数：18機関

機関名	国
カリフォルニア州立大学	アメリカ
インハ大学	韓国
ナント中央理工科大学	フランス
ムハンマド5世大学	モロッコ
ケンタッキー大学	アメリカ
香港大学	香港
エルスタ スケンダール大学	スウェーデン
テキサスA&M大学	アメリカ
フリードリヒ・シラー大学イェーナ	ドイツ
中央大学校	韓国
カリフォルニア大学アーバイン校	アメリカ
カリフォルニア大学バークレー校	アメリカ
ウェスタンシドニー大学	オーストラリア
理化学研究所	日本
新エネルギー・産業技術開発機構	日本
高エネルギー加速器研究機構	日本
産業技術総合研究所	日本
京都大学	日本

外国人教員雇用支援事業

目的 グローバルに活躍する研究者の招へいや、優秀な(若手)研究者の育成のため

概要 各部局における常勤外国人教員の雇用促進を支援

平成26年度 8名　平成27年度 17名

グローバル化の強化推進

研究成果の国際的発信支援プログラム

目的 若手研究者・女性研究者を対象に、海外の学術誌への英語論文の投稿を支援することにより、研究成果の国際的発信力を一層高め、本学の研究力の強化を促進するため

概要 大型教育研究プロジェクト支援室のリサーチ・アドミニストレーター（URA）による個々の研究者に適した学術英文校正等の支援

平成26年度 支援件数：14件　平成27年度 支援件数：9件

①大阪大学国際合同会議（シンポジウム）助成

②大阪大学部局主催国際シンポジウム等開催支援

目的 ①海外研究機関との国際合同会議等を支援し、国際共同研究等の活動につなげ、本学の更なる国際化と研究力の向上を促進するため
②本学の学術研究成果や研究者の活動を海外に発信し、海外での本学プレゼンスを向上させる部局の組織的な活動を促進するため

概要 渡航費・滞在費、予稿集、会場費等の国際会議（シンポジウム）実施に係る経費を支援

①大阪大学国際合同会議（シンポジウム）助成

平成25年度 助成件数：10件　平成26年度 助成件数：23件

平成27年度 助成件数：5件

②大阪大学部局主催国際シンポジウム等開催支援

平成26年度 支援件数：7件　平成27年度 支援件数：6件

UC/UCEAP大阪オフィスの誘致

目的 学生交流、研究者交流、共同研究等を通じた国際化の促進のため

概要 本学におけるカリフォルニア大学のオフィス（UC/UCEAP大阪オフィス）を誘致（平成26年12月開所）

国際共同研究促進プログラム

目的 最先端の研究を展開している外国人研究者と本学の研究者との共同研究を支援することにより、本学のダイナミックなグローバル化を担う国際共同研究室（国際ジョイントラボ）の設立を促進するため

概要 来日研究者本人の渡航費・滞在費や、ホスト側から相手先研究室への教員、研究員、学生の派遣旅費、ポスドクの雇用経費などを支援

拠点件数：34件

協力機関数：41機関

※平成27年4月1日現在

採択年度	研究代表者	所属・職	協力機関
平成25年度	浅田　稔	工学研究科・教授	カリフォルニア工科大学（アメリカ）
	井上　克郎	情報科学研究科・教授	ヴィクトリア大学（カナダ）
	柏木　正	工学研究科・教授	ナント中央理工科大学（フランス）
	栗栖　源嗣	蛋白質研究所・教授	ルール大学ボーフム（ドイツ）
	兒玉　了祐	工学研究科・教授	フランス国立科学研究センターエコールポリテクニーク（フランス）
	篠原　彰	蛋白質研究所・教授	フリードリヒ・ミーシャー研究所（スイス）
	芹澤　成弘	社会経済研究所・教授	インド統計大学（インド）
	長峯　健太郎	理学研究科・教授	ケンタッキー大学（アメリカ）
	西野　邦彦	産業科学研究所・教授	香港大学（香港）
	畑中　吉治	核物理研究センター・教授	カナダ国立素粒子原子核物理研究所
	岩谷　良則	医学系研究科・教授	ヘルシンキ大学（フィンランド）
	藤田　一郎	生命機能研究科・教授	ユーリッヒ総合研究機構／アーヘン工科大学（ドイツ）
	真島　和志	基礎工学研究科・教授	スイス連邦工科大学チューリッヒ校（スイス）
	村上　秀明	歯学研究科・准教授	コペンハーゲン大学（デンマーク）
平成26年度	苧阪　満里子	人間科学研究科・教授	カリフォルニア州立大学サンバーナーディーノ校（アメリカ）、エルスタ・シェンダール大学（スウェーデン）、ローザンヌ大学（スイス）
	檜垣　立哉	人間科学研究科・教授	パリ第10（ナンテール）大学（フランス）
	加藤　和人	医学系研究科・教授	オックスフォード大学（イギリス）
	河田　聡	工学研究科・教授	モロッコ先端科学イノベーション研究機関（モロッコ）
	杉田　米行	言語文化研究科・教授	フィンランド国際問題研究所（フィンランド）、ジョージメイソン大学（アメリカ）、ノースウェスタン大学（アメリカ）、ヨーロッパ日本研究所（スウェーデン）、ノルウェー科学技術大学（ノルウェー）、ヘブライ大学（イスラエル）
	伊川　正人	微生物病研究所・教授	ベイラー医科大学（アメリカ）
平成27年度	鄭　聖汝	文学研究科・講師	ライス大学（アメリカ）
	友部　謙一	経済学研究科・教授	復旦大学（中国）、カリフォルニア大学アーヴァイン校（アメリカ）
	松野　健治	理学研究科・教授	マンチェスター大学（イギリス）
	村田　道雄	理学研究科・教授	オーボアカデミ大学（フィンランド）
	坂田　泰史	医学系研究科・教授	キングス・カレッジ・ロンドン（イギリス）
	岡田　欣晃	薬学研究科・准教授	ハーバード大学医学大学院/ベスイスラエルメディカルセンター（アメリカ）
	藤原　康文	工学研究科・教授	アムステルダム大学（オランダ）
	夛田　博一	基礎工学研究科・教授	ソウル大学校（韓国）
	宮崎　文夫	基礎工学研究科・教授	マサチューセッツ工科大学（アメリカ）
	倉橋　隆	生命機能研究科・教授	カリフォルニア大学デービス校（アメリカ）
	菅沼　克昭	産業科学研究所・教授	北京工業大学（中国）
	八木　康史	産業科学研究所・教授	カーネギーメロン大学（アメリカ）
	民井　淳	核物理研究センター・准教授	ダルムシュタット工科大学（ドイツ）
	斗内　政吉	レーザーエネルギー学研究センター・教授	ライス大学（アメリカ）

学生の海外派遣、受入れ支援

目的 教育の国際化に向けた取組を加速するため

概要 留学、海外研修等に積極的に参加できるよう学生に経済的支援

目標値 2020年までの目標値を設定

・海外に送り出す本学学生… 4%→8%

・海外からやってくる留学生 … 留学生全体 8%→15%
　学部生（正規及び短期留学生） 4%→10%
　大学院生（正規及び短期留学生） 15%→25%

	平成24年度	平成25年度	平成26年度
海外派遣学生数	1,374名	1,325名	1,494名
外国人留学生数	1,924名	1,985名	2,094名

若手研究者の海外派遣、受入れ支援

目的 若手研究者による国際共同研究の機会を増加させることにより優れた研究成果を創出し、本学の研究力強化を図るため

概要 本学の若手研究者による、今後の展開が期待できる海外派遣・海外からの研究者受入れ計画に対し、渡航費・滞在費を支援

	平成25年度	平成26年度	平成27年度
派遣者数	12名	9名	5名
受入者数	19名	3名	0名

部局マネジメントの充実

部局長裁量未来戦略経費の配分

事務(部)長裁量未来戦略経費の配分

目的　部局の優れたマネジメントを全学的に応援し、大学全体に相乗効果が生まれることを目指すため

概要　本学の未来戦略実現のため、積極的なマネジメントを行い、優れた成果をあげた部局や事務部等に対して、裁量経費を配分

部局長裁量未来戦略経費の配分

平成25年度
採択件数：7件

●採択部局
文学研究科、人間科学研究科、医学系研究科、薬学研究科、国際公共政策研究科、産業科学研究所、社会経済研究所

平成26年度
採択件数：6件

●採択部局
文学研究科、人間科学研究科、経済学研究科、医学部附属病院、外国語学部、国際教育交流センター

事務(部)長裁量未来戦略経費の配分

平成25年度
採択件数：6件

●採択部局
文学研究科、工学研究科、基礎工学研究科、言語文化研究科・外国語学部箕面事務室、産業科学研究所、蛋白質研究所

平成26年度
採択件数：1件

●採択部局
医学部附属病院

内部人材の更なるパワーアップ

学内財源配分の見直し等

目的　基礎研究の推進や人材育成など、本学全体の将来の発展に有効活用することを目指すとともに、「基礎研究→応用研究→社会への還元→基礎研究」の未来志向のサイクルを確立するため

概要　間接経費、寄附金、産学官連携推進活動経費及び附属病院経費といった財源の配分を再構築

- ▶間接経費を獲得した研究者に、獲得額の20%相当額が配分できるようにする
  (配分比を、[本部：部局] 50：50
  →[本部：部局・教員] 40：60に変更)
- ▶寄附金の留保を上乗せ(本部を5%に)
- ▶共同研究費の留保を上乗せ(本部を5%、部局を5%に)
- ▶附属病院(医病・歯病)経費の1%を本部に留保
- ▶施設老朽化対策費として、学内の全ての建物について保有面積1㎡あたり年間500円を本部に留保

挑戦する学生の支援

目的　高い意識と意欲を持った学生の教育研究活動をサポートすることで、全学生の教育研究能力の向上を促進

項目名	概要	件数
大阪大学未来基金 教養教育優秀賞	教養・専門教育で優秀な学業成績を収めた学生を表彰	50人※
大阪大学未来基金 専門教育優秀賞		82人
課外研究奨励事業	学部学生の研究マインド醸成のため、独創的かつ意欲的な正課外の研究を行うグループに資金を援助	60件
課外活動総長賞	学生の課外活動の充実と更なる活発化を目的として、特に優れた活動を行った学生団体等を表彰	18件
海外研修プログラム助成金	学生を海外の大学等に派遣し、研修やインターンの参加機会を与える海外研修プログラムを支援	267人※
交換留学奨学金(派遣)	海外の大学間又は部局間協定校での交換留学を支援	3人※
研究留学助成金	大学院生の海外の大学・研究機関での短期研究留学等を支援	23人※
海外グループ研修助成金	学生の企画力・実行力向上のため、学生グループ自らの企画による海外での交流・研修活動を支援	6件

(平成26年度～27年度通算)　※印は平成26年度の数値

チャレンジ支援プログラム

目的　大型の競争的資金へのチャレンジを支援するため

概要　科研費の「基盤研究C」「若手研究B」に応募している研究者の上位研究種目への挑戦を支援

大阪大学特別教授制度(再掲)

国際的に卓越した研究者に対する年俸制導入(再掲)

クロス・アポイントメント制度(再掲)

研究者に対する報奨制度の拡充

目的　科学研究費補助金等の競争的資金による研究の活性化を図るため

概要　科学研究費補助金等の競争的資金を新たに獲得した研究者や、多額の間接経費を獲得した研究者を報奨するため、新たに大阪大学総長顕彰・総長奨励賞により表彰し、報奨金を支給

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
総長顕彰	29名	162名	179名	142名
総長奨励賞	36名	173名	301名	362名

大阪大学未来知創造プログラム

目的　本学の将来を支える多様な研究を育み、創造性に富み、チャレンジングで独創的なアイデアと未来を拓く人材を輩出するため

概要　異なる研究分野の若手研究者の連携による共同研究に対し研究費を支援

平成26年度
採択件数：12件

研究代表者	所属	研究課題名
橋本 順光	文学研究科	日タイ文化交流史の研究―山田長政から柳澤健まで―
中川 威	人間科学研究科	超高齢期における虚弱と適応：生物心理社会的アプローチ
松村 真宏	経済学研究科	シカケデザインワークショップの開発
菊田 順一	医学系研究科	医工情報学の連携による蛍光生体イメージング技術の開発と細胞遊走ダイナミクスの統合的解明
久保 盾貴	医学系研究科	傷あとを残さない医療を目指して
波多 賢二	歯学研究科	変形性関節症に対する新規治療法開発の分子基盤の構築
村上 旬平	歯学部附属病院	歯科医療現場における障害のある子どもとその親への包括的支援プログラムの開発
中澤 敬信	薬学研究科	活動する患者由来神経細胞を用いた統合失調症の分子病態研究
黒崎 健	工学研究科	ナノ構造シリコン高効率熱電変換材料の開発
永井 正也	基礎工学研究科	真空紫外超短光緒パルスを用いた光電子分光装置の開発とその分析機器への展開
満留 敬人	基礎工学研究科	二酸化炭素から基礎化学品を作る革新的グリーン技術の開発
藤田 英明	免疫学フロンティア研究センター	細胞シート内の単一細胞蛍光観察による細胞の力学応答メカニズムの解明

大阪大学未来研究イニシアティブ・グループ支援事業

目的　本学ならではの基礎研究の推進や、国家的課題解決に向けた研究にイニシアティブを発揮するため

概要　部局横断的な提案や新たな研究分野の創出の芽を育てる提案に対し研究費を支援

平成25年度
採択件数：11件

研究代表者	所属	グループ名
田中 仁	法学研究科	21世紀課題群と中国
深瀬 浩一	理学研究科	インテリジェント生体制御分子の創製と新規医薬、医療診断への展開
豊田 岐聡	理学研究科	MULTUMで切り拓くオンサイトマススペクトロメトリー
藤原 康文	工学研究科	グリーンナノマテリアル"ものづくり"イニシアティブ
芦田 昌明	基礎工学研究科	20オクターブ分光による多階層物質ダイナミクス研究拠点
吉田 博	基礎工学研究科	計算機ナノマテリアルデザイン新元素戦略
三宅 淳	基礎工学研究科	メコン川流域ベトナム南部における地域適合型の包括的な環境再生ソリューションモデルの形成(発展途上国の環境問題を総合的に支援するための技術統合グループの形成を目指して)
夛田 博一	基礎工学研究科	分子技術イニシアティブ
井元 信之	基礎工学研究科	量子インターフェース研究企画グループ
吉田 陽一	産業科学研究所	大阪大学ナノサイエンス・ナノテクノロジーアライアンス
大屋 幸輔	金融・保険教育研究センター	リスク解析・資本市場研究グループ

平成26年度
採択件数：2件

研究代表者	所属	グループ名
橋本 幸士	理学研究科	理論研究の統合と相互応用の開拓
鈴木 貴	基礎工学研究科	数理腫瘍学研究グループ

世界適塾

GLOBAL UNIVERSITY
WORLD TEKIJUKU

2014年9月26日、文部科学省の平成26年度の「スーパーグローバル大学創成支援」の事業に、大阪大学が申請した「GLOBAL UNIVERSITY『世界適塾』」構想が採択されました。

学問による調和ある多様性の創造

動画　大阪大学の成長戦略（2014.2.12）　youtu.be/OfuLVr5ISEs
「世界適塾」構想に関する学内説明会（2014.10.14）　youtu.be/5HYi4F6V38U

大阪大学が目指す「世界適塾」とは、大阪大学の原点である「適塾」の精神を受け継ぎ、21世紀において地球規模の課題解決に意欲ある学生や研究者が世界から集い学ぶ場＝プラットフォームを構想するものです。

かつて、緒方洪庵の『人のため、世のため、道のため』という無私の精神と倫理観の下、日本全国から志の高い若者が学問のために「適塾」に集まり、切磋琢磨しながら、勉学に取り組んだように、「世界適塾構想」では、様々な要因が複雑に絡み合っている地球規模の社会的問題を解決するとともに、最先端の科学や技術の発展を推進し、人間性豊かな社会の創造に大きく貢献するグローバル社会のトップリーダー、トップレベルの研究者、高度専門技術者を育成します。

“世界適塾”とは?

世界中から高いレベルの教育研究に励む学生・教員・研究者が集い学ぶ
「次世代教育プラットフォーム」

- 「物事の本質を見極める」高いレベルの学問を追求し、専門性を究める。
- 専門分野を超えた能動的な「知の統合学修」を行う。
- 知識・技能・経験・立場が異なる人々の相互理解と協働による「コラボレーティブ・イノベーション」を推進。

こうした学問の場を通じ、グローバル社会の期待に応えるべく、従来の常識を変えるような研究、新たな社会的価値の発見、社会を変える革新的プロダクトの創造を目指す。

▶2015年1月発行　阪大NOW 143号 掲載　平野俊夫総長　平成27年年頭挨拶 より

22世紀に輝く「世界適塾」へ

第3期中期目標期間を見据えて

動画 youtu.be/wR4jRBEva58

平野俊夫総長 平成27年 年頭挨拶

皆様、明けましておめでとうございます。

昨年の年頭挨拶では、2014年を「世界適塾」元年とし、2031年に大阪大学が創立100周年を迎えた時、「世界適塾」として世界でトップ10に入る研究型総合大学になるという夢を語りました。さらに第1回世界適塾構想会議総会を7月に開催し、この総会のもとに基本構想などのワーキンググループが組織され世界適塾構想実現に向けての議論が進んでいます。第2回世界適塾構想会議総会を1月21日に開催する予定です。「世界適塾」の理念は学問による「調和ある多様性の創造」により心豊かな人類社会の発展に貢献することです。世界には言語、人、習慣、文化や宗教などの多様性が存在します。この多様性は革新的なイノベーションの創出や心豊かな人類社会の営みにとって不可欠です。一方多様性は負の側面として様々な障壁や紛争をもたらします。人類の歴史は多様性による発展と多様性がもたらす対立や戦争の歴史でもあります。人類歴史の中で過去に例をみない次元でグローバル化が進む現在の国際社会では、多様性のもたらす負の側面がますます強くなり、様々な対立が世界に蔓延しつつあります。グローバル化が臨界点までに達すると考えられる21世紀は多様性の爆発の世紀になる可能性すらあります。21世紀のグローバル化社会においては多様性を維持しながら、多様性が生み出す障壁を乗り越えることが人類の発展にとり不可欠だと思います。

今の私の思いを俳句にするとこうなります。

去年今年世世を継ぐ夢空翔る

調和ある多様性の創造

大学は「学問の府」です。教育や研究活動により社会に貢献するという大学の役割は過去、現在、未来において不変ですが、21世紀の大学には更なる役割があるのではないかと思います。それは学問による「調和ある多様性の創造」によりグローバル社会に大きく貢献することだと思います。学問は芸術、スポーツや経済活動等と同じく人類共通言語です。これら人類共通言語は様々な障壁を乗り越える大きな力を有します。学問を介する人材交流により、多様性の維持とそれが生み出す障壁の克服という、相反することの両立が可能となります。学問を介する世界規模での人材交流を今まで以上に推進する必要性がここにあります。大阪大学は世界適塾として、心豊かで平和な社会を実現するために自らの力を磨き上げ、学問を介して世界に貢献していかなければなりません。そのためにも学問レベルをあげて「世界トップ10」に入るような大学にならなければなりません。

大学の力の源泉は人や部局の多様性であり、研究や教育の多様性です。個の力の最大化を成し遂げることが大学発展の原動力です。しかしながら、学問の変遷やその多様性の増大に加えて、少子高齢化や国立大学法人運営費交付金の削減など、大学を取り巻く環境は大変厳しいものがあり、大学全体の力の最大化も図る必要があります。国立大学の法人化以降、国から大阪大学に交付された一般運営費交付金は、統合前の大阪外国語大学分を含めて、平成16年度の420億円から、平成26年度の384億円と36億円減少しました。これを平成26年度の部局配分額で例えますと、理学・医学・工学研究科の3部局への配分を合計した額になります。そして、第3期中期目標期間が始まる平成28年度からは、運営費交付金の配分方式が大学の存亡すらも左右する程に競争的になることが予想されています。昨年末の12月17日に内閣総理大臣主宰の産業競争力会議のワーキンググループにおいて、第3期中期計画を見据えた大学改革の基本的な考え方が、下村文部科学大臣より具体性と現実味をもって明示されました。その内容は昨年末に各部局長に資料を配布しました。また既に政府公式ホームページなどを通じて周知されています※1。注目すべきは、大学を3類型に分類したうえで、運営費交付金の3～4割を競争的に配分する計画です。さらにごく少数の大学を絞り込み特定研究大学（仮称）に指定する構想も盛り込まれています。本学が今後進むべき基本的方向性を考えるにあたり、極めて重要な決断を迫られる内容が多く含まれています。すなわち、今年1年は単なる1年ではなく、大阪大学の今後10年あるいは100年の道筋を決める大変重要で特別な1年であります。しかしながら、このような変化の激しい状況を千載一遇のチャンスと捉えることもできます。決して短期的な視野に立つのではなく、今こそ中長期的な視野に立ち、わたしたち構成員全員が阪大の将来を真摯に考え、如何にすれば大学全体の力の最大化を図ることができるかを真剣に考え、譲るべきは譲り、お互いが協力しあい、英知と力をあわせ、個の力の最大化と大学全体の力の最大化を志向することにより、文字通り大阪大学の夢が実現される好機とも考えることができます。そのためにもわたしたち大学構成員全員が夢や価値観を共有し、一人一人の英知と力を結集する必要があります。

※1　http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/wg/innovation/dai4/siryou.html

昨年を振り返り今年を思う

昨年は創立100周年を見据えて大学のあるべき姿を考える意味で世界適塾構想会議を発足しました。そして総会の下に基本構想、キャンパス構想、病院構想、基金、第3期中期目標・中期計画といった分科会を設置して、様々な構想を検討していただいているところです。

平成24年に大阪大学未来戦略（2012-2015）を策定し、様々な取り組みを行ってきました。このタイミングで、政府は、学問分野のプロジェクト支援ではなく、大学全体の教育研究機能強化の取り組みに対する支援を重視する政策を全面的に打ち出しました。そういった方向性を先取りする形で本学は、平成24年度に「国立大学改革強化推進補助金」を獲得し、平成23年度に立ち上げた未来戦略機構による部局横断的な教育・研究マネジメントに積極的に取り組んできました。平成25年度には「研究大学強化促進事業補助金」を獲得し、国際ジョイントラボを創設するなどの研究力強化に取り組んでいます。さらに、平成26年度には「スーパーグローバル大学創成支援」を獲得し、「世界適塾」構想の実現のために必要なグローバル化、教育改革、マネジメント強化等の推進体制の整備に取り組んでいます。そして、年俸制やクロス・アポイントメント制度導入による人事・給与システムの一層の弾力化などの本学の取組姿勢に対して、「「学長のリーダーシップの発揮」を更に高めるための特別措置枠」として特別運営費交付金が追加配分されました。

こういった補助金を獲得したことで、大阪大学未来戦略機構も順調に発展し、現在5つの教育部門と4つの研究部門が部局横断的な教育研究活動を実施しています。また、教育研究活動を分析・検証する機能と、戦略的提言機能を強化するため、機構内の戦略企画室にIRチームを設置し、IRを総合的に行う体制を構築中です。さらに、平成25年に開始しました国際共同研究促進プログラムによる国際ジョイントラボも現在13カ国からの著名な研究者が参画した22のラボが活動をしています。またクロス・アポイントメント制度も順調に経過し、昨年末時点で外国人9名を含む12名がこの制度により国内外から大阪大学の教育研究活動に参加しています。

昨年は新棟建設や耐震改修工事も順調に経過しました。すなわち、最先端医療イノベーション棟、文理融合型研究棟、緊急時対応および学生支援施設である多目的倉庫、サイバーメディアITコア棟、生命システム棟や総合図書館自動書庫棟が完成し、超高圧電子顕微鏡新棟もほぼ完成しました。また、大規模改修としては、国際交流会館吹田分館、吹田留学生会館、豊中弓道場、法経講義棟、核物理研究センター本館、社会経済研究所A棟、工学研究科M1棟、総合図書館本館や総合図書館書庫棟、そして適塾といった施設の改修が完成しました。さらには、3キャンパスでのライフライン整備を年次計画に基づき実施しました。また、虎の門には東京オフィス、理化学研究所播磨事業所には大阪大学未来戦略光科学連携センターが開設されました。

そして、後ほど紹介しますように今年もいくつもの建物が新設あるいは改修されます。このように世界適塾に向かって、教育研究環境は順調に整備されつつあります。

本学学生の活躍も目立ちました。文部科学省が主催する事業、「サイエンスインカレ」では

▶2015年1月発行　阪大NOW 143号 掲載　平野俊夫総長　平成27年年頭挨拶 より

2年連続で全国最多の5組が受賞しました。また、「トビタテ!留学JAPAN」では女性7人が選ばれ、元気な「阪大なでしこたち」と話題になりました。ショセキカプロジェクトによる学生手作りの本「ドーナツを穴だけ残して食べる方法」はベストセラーになりました。大学院生の糸谷君はプロ将棋の世界で竜王という頂点に立ちました。このような阪大生の活躍は、大阪大学の元気さ、未来の明るさを象徴しているようで、今年もいろんな分野で学生たちには是非チャレンジし、夢を叶えてほしいと期待しています。

また、忘れてはならないのが男性・女性といった性別にかかわらず、能力や個性を最大限発揮できる大学づくりの必要性です。すべての構成員の多様性は不可欠であり、大阪大学を男性・女性かかわらず優秀な人材の宝庫とするために、昨年10月に男女共同参画担当の副学長を任命しました。今年をその本格始動の年とするために、是非、皆様方の御協力をお願いします。

では、平成27年からどのようなことを具体的に実行しようと考えているのかについてお話したいと思います。

教育改革

世界に通用する人材を育成するために各学部・研究科で定めた教育目標およびディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに沿った新カリキュラムを作成し、平成29年度より開始する予定です。また、海外との学生交流を盛んにするとともに、集中型・参加型の授業によって理解をより深められるよう、クォーター制（3学期制）を導入する予定です。さらに、部局ごとに定めたアドミッション・ポリシーに相応しい優秀な人材を獲得するために、グローバルアドミッションズオフィス（GAO）を中心として高等学校における課題研究などを評価に取り入れる世界適塾入試の準備を行います。これらの新カリキュラム、世界適塾入試、クォーター制は部局長会議や教育改革推進会議などでご議論いただき、平成29年度実施を目指して、東島理事を中心に各種委員会において具体的な検討をお願いしているところです。皆様方には移行にあたり大変なご苦労をお願いすることになりますが、世界

適塾を目指すためには重要な改革ですので、世界的な視野に立ち是非ともよろしくご協力のほどお願いいたします。

学部の正規留学生を増やすために、海外在住私費外国人留学生特別入試を平成28年度より実施します。この試験に合格すると10月から3月まで大阪大学において集中的に日本語の授業を受け、4月からは他の学生と同じように日本語で授業を受けます。大学院の正規留学生を増やすために、CAREN（Center of Asian Research and Education Network）の英語コースを中心にダブル・ディグリーやジョイント・ディグリー制度を拡大します。

日本人学生の海外留学を増やすために、実践英語力強化講座を提供するとともに、海外留学の経済的支援を行います。また、学部英語コースであるインターナショナルカレッジの英語による教養教育を日本人学生にも開放し、留学生と日本人学生が交流する機会を提供します。さらに、昨年12月に誘致したカリフォルニア大学大阪オフィス（UC/UCEAP大阪オフィス）などを活用して双方向の留学や教員の交流を促進します。またカリフォルニア大学の助言を得て大阪大学サマースクール開設への準備を開始します。

教育改革を迅速に行うために、昨年、各部局の教育担当副研究科長からなる教育改革推進会議を設けましたが、これに合わせて教育関係の組織を整理再編して全学学修イノベーション機構を設置し、学部・大学院の教育改革を一体的に行う予定にしています。

また、海外に向けて大阪大学の授業のインターネット配信をedXのプラットフォーム上で今春から開始する予定です。

大阪大学の学生に早い段階で海外体験させるために、昨年は総長裁量経費で300人を超える学生の海外派遣を支援しました。各部局におかれましても積極的に海外派遣プログラムを開発していただくようお願いします。さらに、外国語学部を持つ唯一の研究型総合大学である大阪大学でしか育てられないような人材育成プログラムを開始し、外国語学部における24種の言語と他の10学部の専門性を身につけた240種類の人材を育てることをめざします。まずは、外国語学部の学生が文学部・人間科学部・法学部・経済学部の4学部の科目を履修できる、マルチリンガル・エキスパート養成プログラムを平成27年に開始する予定で準備を進めています。

また、未来戦略機構で支援してきた認知脳システム学研究部門などの異分野創発新学術領域や阪大の誇る先進学術領域を牽引する教員をコアとした、世界に羽ばたく飛び抜けた次世代研究者を育てるための卓越大学院である世界適塾大学院（仮称：新学術創造研究科）の平成29年4月設置を目指して、昨年12月に新研究科設置検討委員会を設置しました。この委員会の下に副学長を部会長とする基本構想部会を設置し全学的な検討を行っていきます。全学的なご支援、ご協力をお願い申し上げます。

研究推進

明日の大阪大学を支える若手研究者から現在の大阪大学を牽引している研究者まで、本年も包括的に支援していきたいと考えています。

特に、若手研究者の支援策として、キャリアアップ支援プログラムの充実を検討していきます。39歳以下の若手100名を目標として、研究費の面から支援するプログラムで、科学研究費補助金に惜しくも採択されなかった教員に対して、1年間大学独自財源で支援する計画です。研究の多様性を確保するとともに、少しでも多くの研究の芽を育てたいと考えています。

未来戦略機構の研究推進部門には創薬、認知脳や光科学などの3部門に加えて、昨年10月に、「グローバルヒストリー研究部門」を立ち上げました。大阪大学をグローバルヒストリー研究の国際的ネットワークの中核に位置づけ、大阪からの国際的な情報発信と人材交流を推進していきたいと思います。引き続き、未来戦略機構の研究部門の充実に努めていきます。

研究環境のグローバル化の中核として国際共同研究促進プログラムにより開設された国際ジョイントラボを近い将来100研究室に増やすことを目指し、プログラムを推進していきます。大阪大学のキャンパスで、海外の研究者と共に最先端の研究をすることは、研究者のみならず学生諸君にとっても、草の根からのグローバル化ならびに研究の発展につながるものと期待しています。特別教授制度、評価連動型年俸制、クロス・アポイントメント制度等、本学が推進している柔軟な人事給与制度との組み合せにより、各部局では、このプログラムを積極的にかつ有効に利用していただければと思います。

産学連携・情報化推進

法人化と同時に大学の実質的な産学連携もスタートしました。10年を過ぎた今、オープンイノベーションを目的とする新たなステージになっており、共同研究講座・協働研究所制度や知財戦略などの在り方もこの変化に対応する必要があります。

平成25年にスタートしたCOI事業は、20年後の社会のニーズ予想をしたうえで、その課題を解決するためのイノベーションが要求されています。加えてリーダーは外部から起用するという新規なプロジェクトとなっています。人間力の向上をテーマに、多数の企業と異なる分野の研究者が協力する形で進めています。

今年は、産業競争力強化法の改正にもとづく「官民イノベーションプログラム」が本格的にスタートします。大阪大学に割り当てられた総額200億円の資金をもとに10年間活動します。その中心として、昨年末に大阪大学ベンチャーキャピタル株式会社を、100%出資子会社として立ち上げました。国立大学にとって初めての出資事業であり、大学の技術・知恵を基盤として、民間とも協力しながらベンチャーファンドを立ち上げ、新しい産業を生み出すという大きな社会的使命を持っています。大阪大学のイノベーションマインドを高める絶好の機会とも捉えています。多くの教職員の方々の提案・協力を期待しています。

教育・研究・大学運営を支援するための、情報通信ネットワークシステムが、今年から大幅な再構築の時期に入ります。サービスの高度化と同時に、無駄なく効率的・統一的に構築を進める必要があります。関連部署の密な相互協力で進めていきたいと考えています。

国際戦略

「国際交流から国際戦略への転換」を図るべく、「国際戦略推進機構」を創設し、新たに策定する国際戦略に基づき、全学的な取組みを着実に推進します。

昨年4月には海外拠点を見直し、「北米センター」、「欧州センター」、「ASEANセンター」、「東アジアセンター」を地域の中心として位置づけました。また、学内においては、「グローバルキャンパスの早期実現」を推進するための一環として、豊中キャンパスにカリフォルニア大学（UC/UCEAP）のオフィスを昨年末に新しく開設しました。

これらの新たな基盤となる施設を活用するとともに、多国間・二国間国際ネットワークや2013年度から開始した国際ジョイントラボや本学が既に締結している多数の大学間交流協定や部局間交流協定を有機的に連携させ、「世界適塾」の確立を進めていきます。具体的には、環太平洋大学協会（APRU）、東アジア研究型大学協会（AEARU）、日英大学連携（RENKEI）、日独6大学コンソーシアム（HeKKSaGOn）などの多国間・二国間ネットワークによる学長会議やワークショップの開催やプロジェクトを企画、実施していきます。

特に、APRUについては、“University as an Agent for Global Transformation”として、21世紀における大学のミッションを再考し、大学の役割を考えるとともに、日本における高等教育について理解を深める機会を提供すべく、45大学の学長や関係者が参加する年次学長会議を6月に本学がホストとして大阪で開催し主導的な役割を果たします。

柔軟な人事・給与制度の構築

優秀な人材は大学にとって最も重要な資産であり、本学では人事に関するシステム・運用の柔軟化を積極的に進めてきました。

昨年は、国際的に優れた研究者等を対象とした評価連動型年俸制やクロス・アポイントメント制度を新たに導入しました。さらに年俸制に関しては、主に新規採用教員を念頭に置いた新たな制度をこの4月採用者から適用し、研究者の流動化など世界の趨勢に適時・適切に対応していきます。

また、全国に先駆けて導入したクロス・アポイントメント制度については、各部局の理解も進み、特に外国人教員への適用に大きな研究上のメリットが認められます。今後とも様々な活用方策・支援策を検討し抜本的に拡充する予定です。

このほか、来年度から教員系・事務系に次ぐ第三の職種としてURA（リサーチ・アドミニストレーター）を制度化し、専門的な調査成果を用いて本学の教育研究活動の基盤をより強固にします。

このように近く予定しているものも含め人事に係る第一段階の改革施策は概ね提示しましたが、まだ工夫・改善の余地はあると考えます。各部局におかれては、こうした制度を積極的に活用して優秀な人材の獲得・育成に取り組んでいただくとともに、人事や組織運営に関する建設的なアイデアを積極的に提案くださるようお願いします。

財務面の検証と新たな財源確保

平成28年度から始まる第3期中期目標期間においては、一般運営費交付金の3割から4割が競争的に配分される方向で検討が進んでいます。大阪大学のみならず全国の国立大学は今まで以上に競争的環境にさらされます。このような運営費交付金の変化に対応できるように、昨年ワーキンググループを設置して対応案を策定いたしました。部局長の皆様にも対応案に賛同いただき、当面の平成27年度の学内予算の配分方法を変更させていただく運びとなりましたが、今年1年かけて第3期中期目標期間中の学内予算配分の抜本的なあり方を皆様と共に検討し、来る大競争時代に備えたいと考えています。

大学の教育・研究のための財源を確保するためには、大学構成員の一人一人が科学研究費補助金などの外部資金を獲得していくことがこれまで以上に重要となります。大学執行部でも、国立大学改革強化推進事業費、研究大学強化促進事業費、学長のリーダー

▶2015年1月発行　阪大NOW 143号 掲載　平野俊夫総長　平成27年年頭挨拶 より

シップ特別経費やスーパーグローバル大学創成支援事業などの新規の競争的資金を獲得してきました。これら新たに獲得した財源により、世界トップ10に向けた部局マネジメント及び人材育成・獲得支援策等、世界適塾構想実現のための様々な支援策を実行してきました。今後も執行部としては、世界適塾構想実現のために、競争的外部財源の獲得に全力を挙げていきます。

そのうえで、大学独自の財源の確保が不可欠です。つまり、大阪大学未来基金の充実です。一昨年、世界トップ10の夢の実現のために、「創立100周年ゆめ募金」をスタートしました。昨年、基金の受入額は30億円を超えましたが、2031年までに大阪大学未来基金を100億円以上にすることが目標です。また、阪大関係者の人の輪を広げるために、昨年新たに卒業生室を設置しました。卒業生室は、本学を卒業・修了した方々と生涯を通して関係を維持し、交流を深め、共に発展していくための施策を企画、立案し、推進していきます。大阪大学を卒業してよかったと卒業生に実感してもらえるようにしたいと思っています。

広報戦略と社学連携

大阪大学ブランドの確立のため、原点である「適塾」と「世界適塾」をイメージづける「ブランディング戦略」を積極的に進めていきます。大阪大学のプラスイメージを国内外に示し、知名度を獲得するため、大学ホームページを引き続き充実させ、インターネットによる広報活動を強化していきます。また、HandaiGlobal（メールマガジン）による本学の活動や魅力、NatureやScienceによる研究成果のPRなど、広報活動を強化していきます。

さらに、世界各国で活躍する大阪大学卒業生などへの称号付与や阪大卒の帰国留学生とのつながりを大事にしながら阪大海外ネットワークの構築を継続していきます。

国内においても阪大ブランド力のアップを進めます。東京オフィスを活用した東京方面での広報、大学説明会やシンポジウムの開催、広告や記事提供などでの新聞社や企業等とのタイアップを行っていきます。国内卒業生ネットワークの構築などを積極的に推進していきます。

本学は、「地域に生き世界に伸びる」をモットーとしており、積極的な社会とのかかわりとして教育実践や研究活動に係る成果を公開講座、講演会、シンポジウムなどを通じて一般市民の方々に届けています。これらの活動をさらに発展させるため、アウトリーチ活動を推進し、社会からの理解と信頼を得るため、本学構成員のアウトリーチマインドを涵養し、継続的なアウトリーチ活動を実施し、充実していきます。また豊中市、箕面市、吹田市、大阪市や大阪府などの地元自治体との連携を推進し地域社会へ貢献していきます。また中之島センターと適塾との連携を強化させ、大阪での大阪大学のプレゼンスをより高めていきます。

事務組織改革

教育・国際に係る学内体制の整備に併せ、本部事務機構の企画機能と連動した部局事務体制を整備し、教育・国際面の改革施策を全学的に滞りなく行い得るようにします。また、今後の改革を担い得る若手人材を確保するため、採用ポリシーを明確にし、本学を心から愛し、かつ、国際対応等の専門的知識技能を備えた人材を採用します。それとともに、人事配置や能力開発にあたっても改革の実施を担い得る資質能力の修得を重視していきます。

これらに加え、各部局の未来戦略達成のための工夫を凝らした取り組みに対する報奨制度の強化や事務（部）長未来戦略裁量経費制度の改善を進めていきます。

なお、英語表記による学内通知を一昨年10月から開始し、今後さらにその拡大に努めていく予定です。

環境整備

他の国立大学に先立って、計画性のある施設老朽化対策制度を平成24年度から実施し、平成26年度は22部局34件の事業を行っています。27年度もこの制度をフルに活用し、計画性を持った快適なキャンパスのための施設維持を行っていきます。

大阪大学のキャンパスでは前述しましたように、随所で新規教育研究棟や耐震工事などの施設工事のための土煙が立ち上っており、大阪大学における耐震化工事は本年3月までに全体の95%が完了予定です。そして、工学研究科M3棟が本年1月に、情報系基礎研究・福利厚生複合新棟が5月に、医学部附属病院オンコロジーセンター棟が6月に、それぞれ完成の予定です。一方、3月には工学研究科A12棟・プラズマ実験棟・U5棟、理学研究科E棟、サイバーメディアセンター本館、および薬学研究科1号館といった大規模改修がそれぞれ完成予定です。

このように、本学の教育・研究環境は飛躍的に改善されてきましたが、今年は、外国語学部のさらなる整備策の具体化にも取り組みたいと考えています。

さらに、学寮・教職員宿舎の計画的整備の一環として、世界適塾構想実現のシンボルともいうべき留学生・日本人学生・教職員混住型の学寮「世界適塾ビレッジ」の整備に着手します。同ビレッジは、単なる居住空間の提供にとどまらず、世界に活躍するグローバル人材育成の拠点と位置付けます。このプロジェクトでは、平成27年度からの第1期計画で、学寮297戸、教職員宿舎200戸、看護師宿舎200戸を整備し、最終的には、学寮2000戸、教職員宿舎600戸、看護師宿舎200戸を計画しています。

大学キャンパス内での受動喫煙をなくすため、平成24年に「喫煙対策ワーキンググループ」を設置し、そこで策定されたロードマップに従い、キャンパスにおける屋外の喫煙場所は順次削減されています。昨年には3つのキャンパスに卒煙ブースを設置するとともに、今年の4月にはすべての屋外喫煙場所はなくなる予定で、平成29年4月からのキャンパス内全面禁煙の実施に向かって進んでいます。

また、学内保育施設3箇所に加え、来年度には待望の病児・病後児を受け入れる保育室を開設する予定であり、教職員の皆様が安心して働ける環境作りを進めていきます。

リスク管理

心身ともに健康で快適な環境の維持のため、引き続き学内の安全衛生対策、ハラスメント事案に対する対応に取り組んでいきます。

昨年6月に改正労働安全衛生法が成立し、本年12月からはストレスチェックが義務化されることにより、来年度からは教職員の皆様のストレスチェックも実施する予定にしています。より早期にメンタルストレス対策を講じることができるような取り組みを行い、メンタルヘルス対策の充実・強化に取り組んでいきます。

また、公的研究費の適正なる取り扱いならびに研究者倫理の徹底、中でも公的研究費の適正なる取り扱いについての教育の徹底に取り組んでいきたいと考えています。昨年4月より、研究費の適正な取り扱いの徹底を図るため、コンプライアンス推進責任者を任命し、組織としての責任体制を整え、研究者として守るべき規範の再確認、ならびに本部、部局、研究者個人のそれぞれの責任の明確化に向けて努力してきました。本年は、全学の協力体制のもとに、新たな不正事案が発生しないように皆様とともに努力したいと考えています。

研究における不正行為の防止に対する体制も本年中に整える予定にしています。実施に際しましては、皆様のご協力をお願いします。

教職員の皆様には、大学人としての見識を疑われることのないよう厳しく自らを律すると の固い決意をしていただきますように重ねてお願いします。大学としても、不祥事に対しては厳正に対応していく所存です。

そして最後に

平成23年8月26日に総長に就任して以来、本日まで部局長をはじめ、教職員や学生の皆様方との対話をあらゆる機会を捉えて行なってきました。また大学執行部による部局訪問を行い、研究活動等を説明していただくとともに意見交換をしてきました。今年も引き続き皆様方との対話を積極的に行うとともに、皆様方の意見を可能な限り大学運営に活かしていきたいと考えています。

冒頭でも述べましたが、平成28年度にスタートする激変の第3期中期目標期間を前にして、平成27年は阪大の将来を決める大変重要な特別の1年になります。今年1年間は、将来に対する大きな決断を行うとともに、様々な案件を適切にかつ迅速に処理しなければなりません。執行部としましては第3期中期目標期間をスムーズにスタートできるように、あらゆる努力を惜しまない覚悟で臨んでいく所存です。皆様方の引き続きのご理解、ご尽力、ご協力の程よろしくお願いします。

創立100周年を迎える2031年までに、大阪大学が「世界適塾」として、世界でトップ10に入る研究型総合大学になる。そして、学問による「調和ある多様性の創造」により心豊かな人類社会の発展に貢献する。このような夢と理念を皆様と共有し、この夢と理念の実現のために皆様と一緒に平成27年も目の前の山を一つ一つ登りきりたいと思います。

初日の出阪大の夢今昇る

最後に、皆様方のご健康とご活躍をお祈りして、私の新年の挨拶に代えさせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

平成27年1月5日
大阪大学総長　平野俊夫

「世界適塾ビレッジ」の整備

留学生を含むあらゆる学生、教職員が生活・交流する宿舎

学生の生活環境がグローバルに変貌し、人と人とのインタラクションが生まれる

大阪大学の教育・研究を世界に展開していく中で、留学生受入れや海外派遣の増加を推進するためには、留学生の受入れ環境の向上や日本人学生の海外派遣の素地づくりとして、生活環境における学生間の闊達な国際交流は一つの要となります。

「世界適塾ビレッジ」構想は、日本人学生と留学生、外国人研究者、教職員が混住し、居住環境が一になることで日常的な異文化交流が活発になり、人と人とのグローバルなインタラクションが生まれることを狙いとしています。

その第I期事業として、吹田市津雲台に700戸規模の学寮及び教職員宿舎を建設し、平成31年度より運用を開始する予定です。

この事業では、長期間にわたって安定的に運営していくために、PFI方式により民間資金を活用しながら実現に向かって取り組んでいきます。民間施設を誘致することにより、利用者の負担額の軽減にもつながります。

■第Ⅰ期事業
2015年7月30日実施方針公表
（700戸規模）
○場　　所 吹田市津雲台
○敷地面積 約24,000㎡
○戸数
学寮（留学生・日本人学生混住）
300戸程度
教職員宿舎（独身用）
320戸程度
教職員宿舎（単身用）
40戸程度
教職員宿舎（家族用）
40戸程度
◆学寮については、キッチン・リビングを約9名で共有する共同生活を想定
◆学寮・教職員宿舎を1カ所に整備し、交流スペースを外部や1階等に配置
◆民間付帯施設を誘致し、利用者負担額の軽減につなげる

国立大学初！

大阪大学ベンチャーキャピタル株式会社（OUVC）設立、認可

大阪大学の新たなチャレンジとして行った、大阪大学ベンチャーキャピタル株式会社が設立されました。これは、国立大学が子会社として設立するベンチャーキャピタルを国から認可され、そのベンチャーキャピタルを通じて、大学の研究成果の活用を図る大学発ベンチャー等を支援する仕組みです。大学の研究成果の活用促進を通じた新しい社会的価値の創出が期待されています。

OUVC
INITIATE INNOVATIONS

ＯＵＶＣ１号ファンドの投資対象

ライフイノベーション、グリーンイノベーション、プラットフォームテクノロジーなどの分野で、以下のベンチャーに投資します。

①大阪大学の研究成果を活用したスタートアップ・アーリーステージベンチャー

⇒ハンズオン支援を前提に、長期にわたり複数回に分けてマイルストーン投資を行い、早い段階で民間VCが協調投資できる水準を目指します。

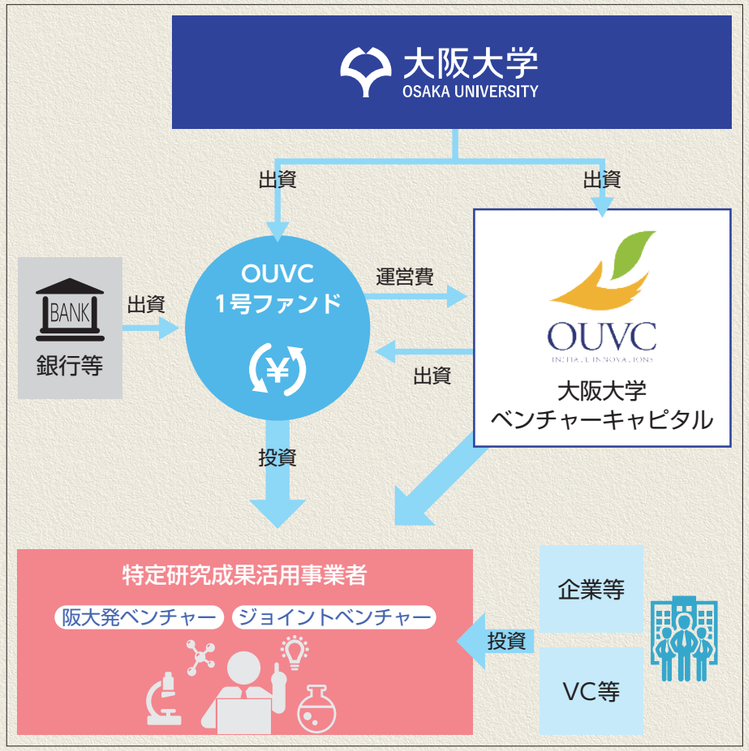
②大阪大学と企業との共同研究から生まれる、ジョイントベンチャー

⇒大学の研究・開発力と企業の開発力、経営力、販売力などのリソースをフルに活用します。

③既存の大阪大学発ベンチャー

⇒投資先および他の出資者から要請・同意がある場合には積極的に支援します。

今後、OUVCでは、投資活動の円滑な推進に向け、投資プロフェッショナルの増強等の体制整備や、大阪大学の関連各部局ならびに民間事業者との連携強化に努め、研究成果の実用化促進に向けた取組を加速します。



「世界適塾」の新拠点——2021年のオープンを目指し 箕面 新キャンパスプロジェクト 始動

「世界適塾」構想に向けた大きな柱

2007年に大阪外国語大学と統合して以来、箕面キャンパスの問題は大阪大学にとって最大の解決すべき課題でありました。現在、大阪大学は豊中、吹田、箕面の3つのキャンパスに分散しており、スクールバスを走らせるなどして学生の授業への影響、負担の軽減を図っています。また、箕面キャンパスの建物の老朽化と利活用方策などが喫緊の課題となっており、総長就任にあたってこの問題を引き継ぎ、この4年間様々な問題解決策を考えてまいりました。しかし、財政的な問題もあり解決は容易ではありませんでした。

このような状況の中で、昨年、箕面市から2020年度の「北大阪急行線」延伸に伴う「箕面船場駅前整備構想」の核として、箕面船場駅の駅前に箕面キャンパスを移転する案が提示されました。最初お聞きした時は長年の懸案が一挙に解決する夢のある話と思い、大阪大学として予備的検討をさせていただきたいとお返事申し上げました。その後、箕面市と大阪大学との間で詳細な検討を続けてまいりました。

今回の「箕面新キャンパス」整備は、単なる外国語学部の移転ではなく、大阪大学が進めている世界に開かれた大学、世界に貢献する大学、「世界適塾」構想の柱の一つとなる大きなプロジェクトと位置付けており、大阪大学外国語学部を誘致する構想について箕面市と連携して進めることとしました。

新キャンパスは豊中、吹田キャンパスの中間に位置する箕面船場駅前に「都市型キャンパス」として整備を計画するものであり、「地域とのコミュニティの形成、連携」「箕面市との施設の相互利用」等の価値が期待できます。豊中、吹田、中之島センター、そして適塾などの大阪大学の主要施設と、大阪市内、新幹線や大阪空港とも20-30分の距離であり、いわば「T字型ライン」に立つアクセスのよさは大きなメリットです。新キャンパスは、将来「世界適塾」としての大阪大学のヘッドクオーターとしての機能を果たすことが期待されます。

このように箕面市と大阪大学の双方にとって立地条件のよさ、将来の発展を見込める場所であり、箕面船場駅前への移転は未来を見据えた夢のある案と考え、本日、基本合意に至りました。そして、2016年4月の正式合意に向けた具体の協議を始めることとしました。大阪大学として積極的にこの移転プロジェクトを推進し、「世界適塾」の要となるプロジェクトとして大阪大学創立90周年を迎える2021年の新キャンパスオープンを目指したいと考えています。

2015年6月17日
大阪大学総長
平野俊夫

▶2015年6月17日 報道発表資料より

大阪大学箕面キャンパスの移転について

大阪大学と箕面市は、大阪大学の教育研究の発展及び学習環境の向上と、箕面市の活気あるまちづくりを実現するため、大阪大学箕面キャンパス(箕面市粟生間谷東地区)を北大阪急行線延伸に伴い整備される「(仮称)箕面船場駅」東隣(土地区画整理事業予定地内)に移転することについて、本日覚書を交換しました。

また、大阪大学箕面キャンパス移転後の跡地については、箕面市が保有し、大阪大学と連携しつつ、スポーツ施設の整備など有効活用を検討します。

今後、さらなる具体案の検討を進め、平成28年4月の合意書締結をめざします。

1 キャンパス移転による効果

新駅周辺へのキャンパス移転により、大阪大学と箕面市が共に飛躍・発展する起爆剤となります。

(1)大阪大学の効果

◇大学のグローバル化を推進するための活動拠点となります。
◇周辺の箕面市の施設とも連携し、社会に開かれた大学として、社会・地域貢献機能の強化を行います。

(2)箕面船場のまちづくりへの効果

◇学術研究という“文化”そのものがまちの魅力となると同時に、新キャンパス周辺に大学発ベンチャー企業を集積するなど、新たな可能性が広がります。
◇閉じられたキャンパス内ではなく、街なかで常に数百～数千人の学生・教員が活動することで、商業や市民活動の大きな活力となります。

2 新キャンパスのポテンシャルと現キャンパスの跡地活用

(1)大阪大学箕面新キャンパスのポテンシャル

◇大阪大学は世界トップ10をめざしており、箕面キャンパスの移転は、「世界適塾」構想の柱となるプロジェクトとなります。
◇箕面新キャンパスは、大阪大学の全てのキャンパスをT字に結ぶ結節点となり、有機的なキャンパス間連携を実現します。
◇大阪大学初めての都市型キャンパスとして、駅前の地域に溶け込んだ新しい魅力あるキャンパスになります。

(2)現キャンパスの跡地活用

◇現キャンパス移転後の跡地については、市が保有し、大阪大学と連携しつつ、スポーツ施設(総合運動場等)の整備を含め、有効な活用を検討します。

箕面市について

箕面市は、「子育てしやすさ日本一」を標榜し、教育分野の施策に注力するとともに、市の悲願であった大阪都心にダイレクトアクセスが可能となる北大阪急行線延伸の実現により、都市の魅力を高め、住み心地の良さを実感できるまちを目指しています。

北大阪急行線延伸による箕面船場地域のポテンシャル

北大阪急行線延伸プロジェクトでは、大阪の大動脈である地下鉄御堂筋線・北大阪急行線(現在は千里中央まで)を北に向かって2.5km延伸します。

延伸により箕面船場地域は、抜群のアクセス性により高いポテンシャルを実現します。

原点から未来へ

適塾を原点に、懐徳堂の精神も引き継ぐ―― 大阪大学の沿革

大阪外国語学校
上八校舎門標

1921(大正10)年
大阪外国語学校

1949(昭和24)年
大阪外国語大学

2007(平成19)年
統合
外国語学部

1838
(天保9)年
適　塾

1838年に緒方洪庵が現在の大阪・北浜に開設した蘭学塾。西洋の進んだ医学、病理学などの学問を教える一方、当時流行した天然痘やコレラなどの治療にあたるとともに、医療の普及と向上に努めた。

1869(明治2)年
大阪仮病院

1915(大正4)年
大阪医科大学

1916(大正5)年
塩見
理化学研究所

1931(昭和6)年
理学部

1931(昭和6)年
医学部

1931
(昭和6)年
大阪帝国大学

1933(昭和8)年
工学部

1934(昭和9)年
微生物病
研究所

1939(昭和14)年
産業科学
研究所

1949
(昭和24)年
大阪大学

1949(昭和24)年
文学部

1949(昭和24)年
法経学部
1953(昭和28)年
法学部と経済学部に分離

1948(昭和23)年
法文学部

2004
(平成16)年
国立大学法人
大阪大学

2031年
創立100周年

世界
トップ10の
大学に

1896(明治29)年
大阪工業学校

1724(享保9)年
懐 徳 堂

1921(大正10)年
大阪高等学校

大阪高等学校　当時の校舎

1926(大正15)年
浪速高等学校

浪速高等学校
(現大阪大学会館)

●研究・教育組織の拡充

1951 (昭和26)年　歯学部
1955 (昭和30)年　薬学部
1958 (昭和33)年　蛋白質研究所
1961 (昭和36)年　基礎工学部
1966 (昭和41)年　社会経済研究所
1972 (昭和47)年　人間科学部
1972 (昭和47)年　溶接工学研究所
※1996(平成8)年、接合科学研究所に改称
1989 (平成 元)年　言語文化研究科
1994 (平成 6)年　国際公共政策研究科
2002 (平成14)年　情報科学研究科
2002 (平成14)年　生命機能研究科
2004 (平成16)年　高等司法研究科
2009 (平成21)年　連合小児発達学研究科

脈々と継承される理念

大阪帝国大学の創設

適塾の流れを汲む府立大阪医科大学を母体に、1931年に医学部と理学部からなる大阪帝国大学として設立された。「大阪にも帝国大学を」と、大阪の政官、経済界がこぞって国に強く働きかけ、市民や有志も設立のための寄付や支援を行い、設立に至ったという歴史をもつ。「地元大阪と市民の力によってつくられた大学」という特色を有している。初代総長の長岡半太郎は東大、京大をも凌ぐ大学を目指し、新進気鋭の俊英らを全国から集めた。のちに理学部に講師として迎えられた湯川秀樹もその一人。

長岡半太郎初代総長の像
(吹田キャンパス)

糟粕ヲ嘗ムル勿レ
初代総長　長岡 半太郎(1931年)

科学と技術の融合により真の文化を創造する
第6代総長　正田 建次郎(1954年)

地域に生き世界に伸びる
第11代総長　山村 雄一(1979年)

大阪大学 歴代総長

初代総長 長岡 半太郎 1931(昭和6)年
第2代総長 楠本 長三郎 1934(昭和9)年
第3代総長 真島 利行 1943(昭和18)年
第4代総長 八木 秀次 1946(昭和21)年
第5代総長 今村 荒男 1946(昭和21)年
第6代総長 正田 建次郎 1954(昭和29)年
第7代総長 赤堀 四郎 1960(昭和35)年
第8代総長 岡田 實 1966(昭和41)年
第9代総長 釜洞 醇太郎 1969(昭和44)年
第10代総長 若槻 哲雄 1975(昭和50)年
第11代総長 山村 雄一 1979(昭和54)年
第12代総長 熊谷 信昭 1985(昭和60)年
第13代総長 金森 順次郎 1991(平成3)年
第14代総長 岸本 忠三 1997(平成9)年
第15代総長 宮原 秀夫 2003(平成15)年
第16代総長 鷲田 清一 2007(平成19)年
第17代総長 平野 俊夫 2011(平成23)年

適塾から大阪大学へ

教育

適塾の教育

▶塾生の熱き志
自由な学問的気風
能動的な学び

▶基礎（=オランダ語）を固め
知識と視野を拡げる

大阪大学の教育

▶「物事の本質を見極める力」を身に付ける

大阪大学は、「物事の本質を見極める力」をもち、国際社会における複雑で困難な課題に果敢に挑み、解決へと導くグローバル・リーダーや、これまでに無いものを創造し、未来を切り拓く人の育成に全力で取り組んでいます。

物事の本質を見極め世界に羽ばたく

▶能動的な学びにより、「高度な専門性」を基盤に
それを社会で活かすための
「広い視野」と「豊かな教養」を育む

大阪大学は、各分野の専門教育により「高度な専門性」を育むことを基盤としながら、学部から大学院に至るまでの幅広い教養教育を通じて、「複眼的な視点」と「俯瞰的な視点」を養います。

学生の学びにおいては、自ら課題を設定し解決に向けて主体的に考える、能動的な学習態度を重視し、問題解決型学習、体験型学習、グループワーク、ディスカッション等の「アクティブラーニング」を積極的に展開しています。

また、世界へと視野を拡げ、異文化を理解し世界の人々と対話できる「国際性」を養うため、学生に海外留学への積極的な挑戦を促すとともに、学内においても留学生と日本人学生が互いに切磋琢磨できる環境づくりに力を注いでいます。

研究

適塾門下生の特性

▶進取の気風と多様性

▶自由闊達な精神
=
探究心の赴くままに

大阪大学の研究

▶適塾から受け継ぐ先見性と自由闊達な精神により、
時代を先取る独創的な学問・研究が行われています

創立前史の大坂

■緒方洪庵の広めた種痘とコレラ対策

大阪種痘館分苗免状

虎狼痢治準

■近世後期の大坂では、天文学や医学など
自然科学的な学問が発展
- 麻田剛立（1734 —1799）
- 懐徳堂の門人である中井履軒（1732 —1817）
- 洪庵の師である中天游（1783 —1835）など

■薬の町・道修町

OSAKA UNIVERSITY

適塾から紡がれる進取の気風と自由闊達な精神

大阪帝国大学時代

■大阪の医療を支える

中之島時代の風景

■感染症研究の推進
- 微生物病研究所（1934）──ウイルス、ワクチン等の研究

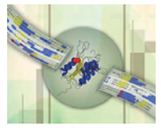
■蛋白質研究の発展（戦後、栄養学的観点から）

■量子力学分野を牽引
- 初代総長　長岡 半太郎（土星型原子モデルの提唱）

■産業を支える実学重視の気風も
- 産業科学研究所（1939）
- 「産学連携の祖」浅田 常三郎 教授

大阪大学、そして未来へ

■細胞融合の研究
■先端医療（再生・移植医療等）
■免疫学



■創薬

■材料科学
■基礎工学部（1961・日本初）
■認知脳システム学（ロボティクス）

©JST ERATO Asada Project

■近代経済学
■人間科学部（1972・日本初）
■行動経済学／神経経済学
■光量子科学

適塾
特別対談

若者たちの「がむしゃらさ、全力投球」が新しい時代を拓く

▶2014年9月発行　大阪大学ニューズレター65号 掲載
適塾特別対談　安藤忠雄／平野俊夫 より

平野俊夫　大阪大学総長

安藤忠雄　建築家

緒方洪庵が1838年に大阪・北浜に開いた「適塾」。その私塾から、福沢諭吉・大村益次郎・橋本左内など、「明治」を切り開いた有能な若者が育った。適塾が今の日本の基礎を作ったと言っても過言ではなく、我が国六番目の帝国大学として1931年に創設された大阪大学の原点でもあった。
今回は、大阪を基盤に世界で活躍する建築家・安藤忠雄さんと平野俊夫総長が、大阪や関西の未来、世界適塾をめざす大阪大学の今後、若い人に伝えたいことなどを語り合った。

「独立自尊」の精神

平野　安藤先生は、幾度か適塾を訪れてくださっていると伺いました。私塾としての適塾、そして緒方洪庵にどのような印象を持っておられますか。

安藤　私は大阪生まれの大阪育ち。関一（せきはじめ/第7代大阪市長）が造った東西44㍍・南北約4㌔の御堂筋や、岡田信一郎の原案により建てられた中之島の中央公会堂などを見て、「大阪はすごい」と誇りに思っていました。この適塾も大阪人の誇りですね。江戸末期の期待と不安の入り交じった緊張感が、福沢諭吉などの若者を生み出したのでしょう。福沢諭吉の「独立自尊」の精神のように、自分で考えて自分なりに行動するという自立心を持った若者が時代を切り開いたのだと思います。

平野　それに対して、今の若い人たちをどう思われますか。

安藤　適塾の時代は、多くの人たちが新しい時代に対する好奇心を持ち、自分に何ができるかを考え続けていました。今も科学の世界を例にとれば、素粒子などのミクロの世界と宇宙などのマクロの世界の探求が同時進行するなど、好奇心のある人にとっては非常に面白い時代。江戸末期のような不安や緊張感は欠けていますが、次の時代を切り開くため、若い人たちは自分が何をするべきなのか考えないといけないと思います。

均一化された若者、思い切った転換を

平野　今の若い人たちも年金や医療など、将来や社会に対する不安は抱えていますね。

安藤　とても現実的な不安ですよね。私の場合は、大学教育や建築の専門教育を受けられなかったことで自分の将来に不安があり、常に自分の立ち位置を見据えながら走らないといけないと考えてきました。若い人が不安を突破するには、まずは一心不乱に、倒れてもいいくらいの覚悟で勉強するしかないと思います。また、地球人口が70億人を超えた時代を生き抜くために必要なのは「創造する力」ですが、その創造力に対する緊張感が薄いように思います。一流大学に入ると将来は安定し順調にいくと、思っている傾向があるのではないですか。

▶2014年9月発行　大阪大学ニューズレター65号 掲載　適塾特別対談　安藤忠雄／平野俊夫 より

大阪人には自由な発想と壮大な構想力そして「胆力」があった

●安藤忠雄（あんどう ただお）
1941年大阪生まれ。独学で建築を学び、69年安藤忠雄建築研究所を設立。イエール大、コロンビア大、ハーバード大の客員教授を歴任。97年東京大学教授に就任し、現在は東京大学名誉教授。代表作は「住吉の長屋」「六甲の集合住宅」「光の教会」「淡路夢舞台」「FABRICA（ベネトンアートスクール）」「アルマーニ・テアトロ」「ピューリッツァー美術館」「フォートワース現代美術館」「ホンブロイッヒ/ランゲン美術館」など。79年に「住吉の長屋」で日本建築学会賞、89年フランス建築アカデミーゴールドメダル、95年プリツカー賞、97年王立英国建築家協会（RIBA）ゴールドメダル、2003年文化功労者、10年文化勲章など多数。

平野　緒方洪庵について司馬遼太郎は「多くの若い有能な人を育てたことが大きな功績だ」と著書に記しています。安藤先生も建築の世界で多くの若い人を育てておられますが、若い時には何が大切だと考えておられますか。

安藤　今の日本社会は固まっています。学歴社会で大企業社会、そして東京一極集中。さらに偏差値教育の影響などもあり、若い人たちの価値観は均一化されています。それを突破して新しい時代を拓くには、我々の時代よりハンディキャップがある。また生きることに対する一番のエネルギーは「自由」なのに、安定した将来の生活のために「不自由」を選んでいます。そして全てがダウンサイジングの時代に入っているのに、親も未だに日本の右肩上がりの時代のイメージに捕らわれています。思い切った方向転換が必要ですね。もう一つは、社会を読む力の前に「自分自身の能力を読む力」が重要だと思います。社会に対して自分が何をできるか。適塾で学んだ若者たちは「夢」を持っていました。夢は、建築家や芸術家だけではなく、医学者や教育者、サラリーマンも持つべきものだと思います。

自分の専門で勝負、全力で走れ

平野　非常に均一化された日本社会では、一つの固定観念から脱することが難しいということですね。安藤先生は若い時に世界へ飛び出しておられます。当時の海外経験に照らして、内向きとされる今の日本社会や若者を、どう感じていらっしゃいますか。

安藤　私は建築に関して、勉強の仕方から自分で学ばなければなりませんでした。大阪・奈良・京都などにも優れた建造物はありますが、まずは世界を見たほうが良いのではないかと考えました。シベリア鉄道でヨーロッパに行き、貨客船でアフリカのケープタウンからマダガスカル島へ、さらにはインド洋をムンバイまで渡りました。赤道直下で見た星は言葉にならないほどきれいで、地球は本当に広いと感じました。それが、広い地球における自分の立ち位置を考える機会になったと思います。またその後、大阪の著名な財界人に強くサポートしていただく幸運に恵まれました。大切なのは、そのようなチャンスが来た時、いかにうまくキャッチするか。自分の専門分野について徹底的に勉強しておくことです。私には学歴はありませんでしたが、建築の話をすれば財界の人たちに納得してもらえたので、専門を徹底的にやればいいのだと感じました。特に印象に残っているのは、佐治敬三さん（元サントリー会長）とご一緒されていた小説家・開高健さんの言葉「全力で走れ。それしか君の生きる道はない」です。「全力で走れば摩擦も起きるが、解決する力を持っていれば、その走っている姿は青春だ」とも言われました。

人間力磨き、本気で闘う

平野　「全力で走れ」、いい言葉ですね。恐れを知らないのは若者の特性。私も医学部を卒業して国家試験を受けたわずか1年後に、免疫学を学ぶためアメリカに行きました。これをやりたいと思えば、やれる場所に飛び込んでいく。すると、今まで見たこともないような何かに出合えます。日本の均一社会に籠もっていてはダメ。世界は多様性に富んでいます。言葉や文化・宗教などの多様性は、人間が心豊かに生活し発展するために必須ですが、一方でコミュニケーションの障害ともなり、対立や紛争が生まれます。そのネガティブな側面を乗り越える力を持っているのが学問。建築や芸術・スポーツなどと同じ人類共通言語ですから、言葉が通じなくてもコミュニケーションを持てます。学問を介して地球上に調和ある多様性を創造することも、大学の重要な役割だと思っています。安藤先生は常に多様な文化に接しておられ、異文化を乗り越えるため大変なこともあったかと思いますが、いかがですか。

安藤　あらゆる民族を越えて対話できるものは「心」しかなくて、その根底には世界中の人が求めている「自由」があります。しかし、今の日本人は安定に憧れて不自由に甘んじ、自由がないため、「心」による国際的な対話ができていません。また地球人としてどのように生きるかという自分の立ち位置を考えているかどうか。私は建築の仕事を通じて、常に自分の立ち位置を確立しながら国際的な仕事をしたいと思ってきました。英語は話せませんが心で理解し合い、お互いの夢を建築という形にしてきました。まずは心、つまり人間を磨くこと。大学生には人間力を磨くための十分な時間があります。学生時代に本気で勉強などと闘わなかった人間は、生涯闘うことはないと思います。

平野　「今闘わなくて、いつ闘うのか」ですよね。それは20歳でも60歳でも同じです。また先ほどから立ち位置が大事と言っておられますが、安藤先生の立ち位置ともいえる大阪に対する思いを教えていただけますか。

安藤　御堂筋の拡張工事などを見てもわかるように、大阪人というのは自由な発想と壮大な構想力を持っていたと思います。そして自分に訪れたチャンスを受け止めるためには「胆力」が必要。大阪で私塾を開いた緒方洪庵にも、新しい時代に自分が何をしないといけないかを考えて全力で走るという相当な胆力があったと思います。

可能性は自分の中にある 自分で突破を

平野　東京一極集中に対する関西の強みとして、狭いエリアに大阪・京都・奈良・神戸があり、多様な文化・歴史を持っていることだと思います。そして大阪は、懐徳堂や適塾があったように昔から好奇心が旺盛で、私塾を支える風土をもちます。また、関西には多様で面白い大学が多くあり、未来に対するポテンシャルも大きい。弱点は、大学間で連携がヘタなこと。大学も企業も連携することによって、関西がリーダーシップを取っていく一つのキーポイントにつながる気がします。

安藤　地球レベルで自分たちがやろうとしていることは何か。それをしっかり踏まえた連携をしたうえで、競争もしないといけない。日本の教育のあり方を徹底的に考え直すべき時期だと思います。それに適塾では、みんなが夢を持ち、蘭学の本1冊で勉強していたわけでしょう。福沢諭吉のような独立自尊の精神のない学生、成績の良くない学生は卒業させない、といったシステムも本気で考えたほうがいいと思いますが（笑）。

平野　私は学生に「夢は叶えるためにある」と言っています。実現が難しいからこそ夢なのですが、夢を別世界の話と思うと永遠に夢です。夢に向かって目の前のことを着実にやることが重要です。安藤先生、最後に大阪大学や阪大生、若い人にメッセージをお願いします。

安藤　可能性は自分の中にあります。自分自身で探してほしい。自分の可能性を追求すると社会ではぶつかることが多いですが、適塾の時代のように、それを突破していってほしい。面白い人生というのは、自分が納得できる人生だと思います。また国力というものは、経済力だけではありません。今の日本にはない「世界から尊敬される力」が、学問の世界から出てきてほしいですね。

平野　若い人は夢を持って「今」という時間に全力投球し、夢を叶えるために目の前の山を一つ一つ登りきってほしい。我々も大阪大学の適塾から世界適塾へ、そして世界トップ10の大学をめざすという夢を叶えたいと思います。今日はありがとうございました。

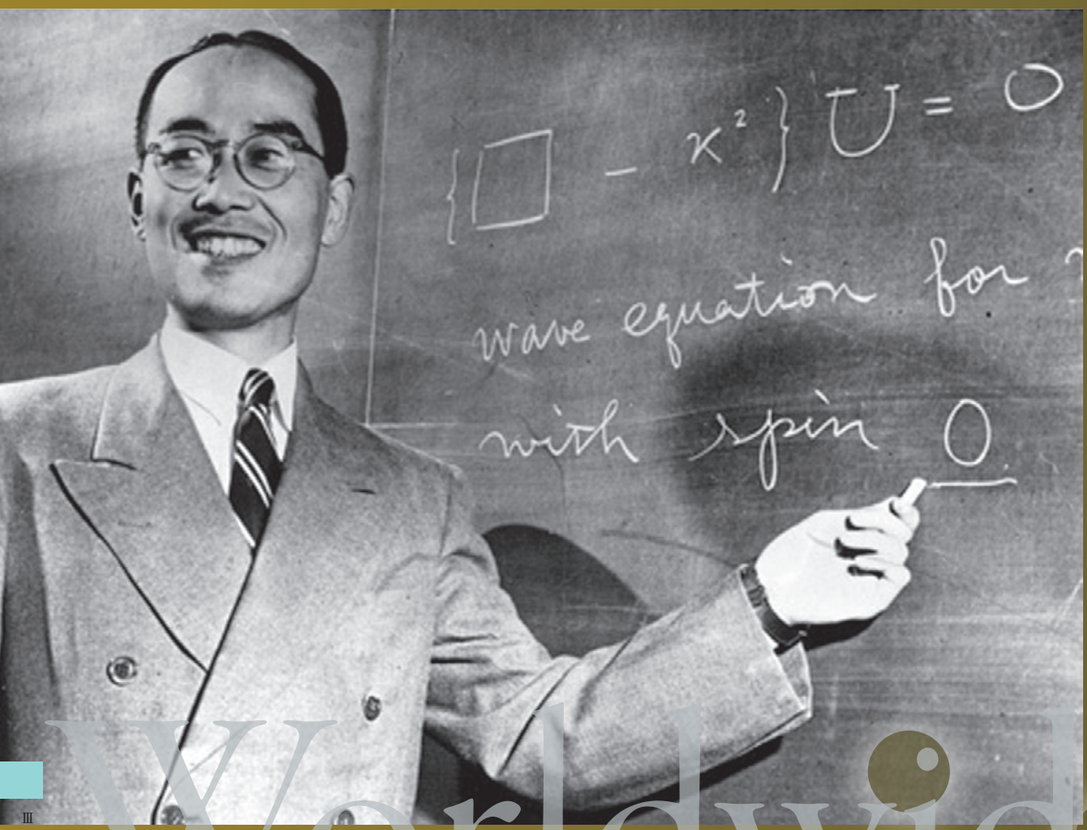
日本の均一社会に籠もっていてはダメ
世界は多様性に富んでいます

平野俊夫

刀傷の残る柱

学生時代に本気で勉強などと闘わなかった人間は生涯闘うことはないと思います

安藤忠雄



1949年 コロンビア大学にて（提供：京都大学基礎物理学研究所）

Worldwide

大阪大学が育てた 湯川秀樹の中間子論

1949年日本人で初めてノーベル賞を受賞した湯川秀樹の中間子論の論文は、創設間もない大阪帝国大学理学部湯川研究室で生まれました。中間子のひらめき⇒理論構築⇒学会発表がわずか1ヶ月半という驚異的なスピードでした。当時27歳という若さでありながら、研究への集中力は、すさまじいものがあったと言います。初代総長の長岡半太郎は、理学部の創設にあたって日本中から新進気鋭の研究者を集め、湯川もその中の一人でした。長岡の建学精神「勿嘗糟粕（常に独創的であれ）」の言葉どおり、湯川は大阪大学での研究を見事にやり遂げ、大きく花開いたということになります。

1934年　大阪帝国大学理学部本館（中之島）

湯川秀樹　略歴

1907年	1月23日 東京に生まれる
1929年	京都帝国大学理学部物理学科卒業
1932年	京都帝国大学理学部講師
1933年	大阪帝国大学理学部講師（兼任）
1934年	大阪帝国大学理学部講師（専任） 中間子論に関する論文発表
1936年	大阪帝国大学理学部助教授
1938年	大阪帝国大学より理学博士の学位を取得
1939年	京都帝国大学理学部教授
1943年	文化勲章受章
1948年	プリンストン高等研究所に招かれ渡米
1949年	コロンビア大学客員教授 ノーベル物理学賞受賞
1950年	大阪大学名誉教授
1953年	大阪大学湯川記念室発足 京都大学基礎物理学研究所を新設、所長
1970年	京都大学を定年退官
1981年	9月8日 永眠

国際賞

Nobel Prize

湯川 秀樹

●受賞対象研究、研究分野等
物理学賞『中間子の存在を理論的に予言』

●受賞年　1949

Lasker Award

花房 秀三郎

●受賞対象研究、研究分野等
基礎医学研究賞『RNA 腫瘍ウイルスによる発癌機構およびウイルスゲノム内に存在する癌遺伝子の役割に関する研究』

●受賞年　1982

Gairdner International Award

審良 静男

●受賞対象研究、研究分野等
自然免疫の中核を担うたんぱく質の発見

●受賞年　2011

坂口 志文

●受賞対象研究、研究分野等
制御性T細胞の発見と免疫における役割の解明、ならびに自己免疫疾患と癌の治療の応用

●受賞年　2015

Awards

ノーベル賞（1名）
ラスカー賞（1名）
ガードナー国際賞（2名）
ウルフ賞（2名）
クラフォード賞（2名）
日本国際賞（2名）

Wolf Prize

早石　修

●受賞対象研究、研究分野等
医学部門『酸素添加酵素（オキシゲナーゼ）の発見とその構造・生化学的重要性の解析』

●受賞年　1986

佐藤 幹夫

●受賞対象研究、研究分野等
数学部門『代数解析学の創始、「超函数と超局所函数の理論、ホロノミック量子場理論、ソリトン方程式の統一理論を含む代数解析学の創造」』

●受賞年　2002-2003

Crafoord Prize

岸本 忠三／平野 俊夫

●受賞対象研究、研究分野等
インターロイキンの発見、それらの特性決定と炎症性疾患における役割の探求

●受賞年　2009

Japan Prize

岸本 忠三／平野 俊夫

●受賞対象研究、研究分野等
生命科学・医学分野
「インターロイキン6の発見から疾患治療への応用」への貢献に対して

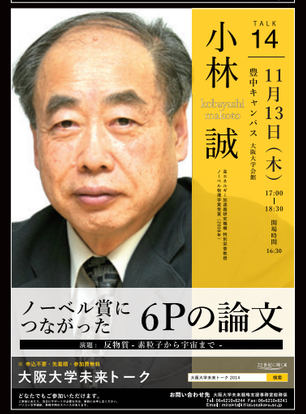
●受賞年　2011

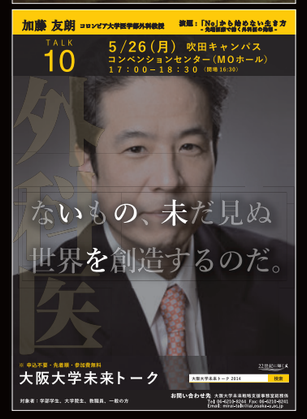
▶「大阪大学 未来トーク」第1回(2013年4月)～第20回(2015年7月)告知ポスターより

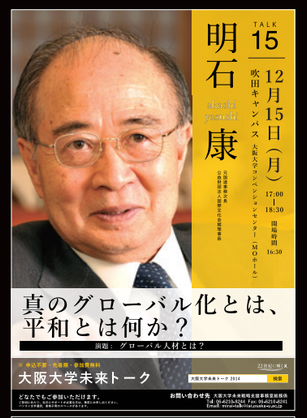
大阪大学
未来
トーク

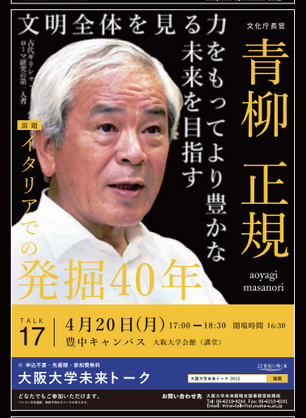
大阪大学は「未来戦略」を推進していきます。それを実践するための足掛かりとして、様々な分野で活躍中の著名な方に、学内外の方を対象に各界の最先端の情勢を講演していただく「大阪大学未来トーク」を2013年4月から実施しています。

動画 大阪大学未来トーク 01「この一瞬に挑む
—Steps to the true essence of things—」平野俊夫(2013.4.30)
youtu.be/LonFfLvD-IQ



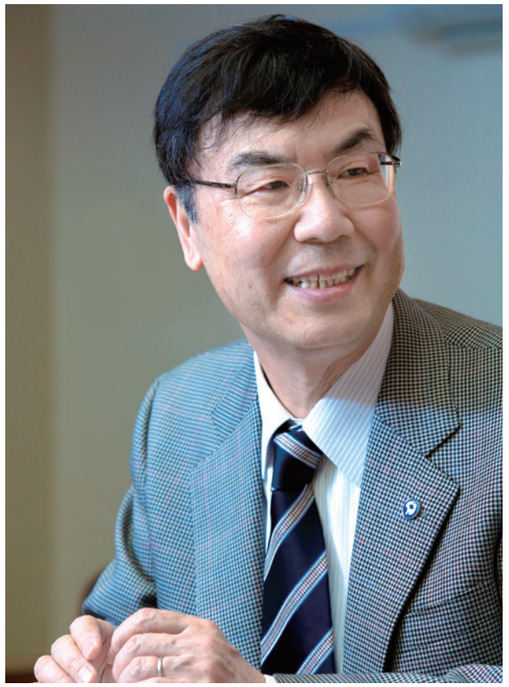






▶2015年6月発行　大阪大学ニューズレター68号 掲載
阪大免疫研究 受賞スペシャル鼎談 より

世界に冠たる大阪大学の「免疫学」



■坂口志文（さかぐち しもん）
1976年京都大学医学部卒業。81年同医学部附属病院医員。83年同医学博士を取得。83年米国ジョンズ・ホプキンス大学客員研究員。87年米国スタンフォード大学客員研究員。89年米国スクリプス研究所免疫学部助教授。91年カリフォルニア大学サンディエゴ校助教授。92年新技術事業団「さきがけ21計画」専任研究員。94年東京都老人総合研究所免疫病理部門長。99年京都大学再生医科学研究所教授。07年同再生医科学研究所長。11年から大阪大学免疫学フロンティア研究センター教授・副拠点長。研究テーマは「免疫応答の制御と治療への応用」。

■審良静男（あきら しずお）
1977年大阪大学医学部卒業。84年同医学研究科博士課程修了。85年カリフォルニア大学バークレー校博士研究員。87年大阪大学細胞工学センター助手（免疫研究部門）。96年兵庫医科大学教授。99年大阪大学微生物病研究所教授。07年から免疫学フロンティア研究センター教授・拠点長。研究テーマは「自然免疫による病原体認識機構と、その活性化メカニズム」。米国トムソンサイエンティフィックの「世界で最も注目された研究者ランキング」で、2004年度に第8位、05年度・06年度に第1位、07年度に第4位と連続でランクインした。

免疫学フロンティア研究センター教授・拠点長
審良静男 *Shizuo Akira*
免疫学フロンティア研究センター教授・副拠点長
坂口志文 *Shimon Sakaguchi*
大阪大学総長
平野俊夫 *Toshio Hirano*

坂口志文特別教授の ガードナー国際賞受賞を追い風に、WPI-IFReCの次なるステージへ——

大阪大学の免疫学は長い歴史と伝統を持ち、世界トップレベルの最先端研究を行ってきた。その基礎から応用に至る貢献を裏付けるように、免疫学フロンティア研究センター（WPI-IFReC）・坂口志文特別教授（実験免疫学）の「ガードナー国際賞（2015年）」受賞が決定。同賞はカナダのガードナー財団が医学の分野で世界的な発見や貢献をした研究者に贈るもので、ノーベル賞の登竜門ともされている。

2011年には同センター拠点長の審良静男特別教授（自然免疫学）が受賞しており、大阪大学では2人目の快挙となった。受賞を記念して、同じ免疫学者である平野俊夫総長が二人と、免疫研究の足跡や、阪大の免疫学の展望などについて語り合った。

WPI Osaka University iFReC

免疫反応の負の制御に取り組み 制御性T細胞を発見

平野　坂口先生、ガードナー国際賞の受賞決定、おめでとうございます。総長としても免疫学者の一人としてもうれしく、阪大そして日本にとっても大変名誉なことです。

坂口　権威ある科学賞をいただき本当にうれしく思っています。私は長年、免疫の制御について基礎的な研究をしてきました。今回の受賞は、免疫をコントロールする制御性T細胞の発見と、免疫における役割の解明、そして自己免疫疾患とガンの治療への応用が評価されたもので、阪大の皆さんのご支援を非常にありがたく思っております。

gairdner LES PRIX CANADA GAIRDNER AWARDS
2015年3月24日のガードナー国際賞受賞記者発表

平野　同じ受賞者として、審良先生は今回の受賞をどのように受け止めておられますか。

審良　オリジナリティーのある研究だと認められたわけで、日本の免疫学研究のレベルの高さを改めて世界に知らしめたと思います。

平野　では、お二人の研究の概略をご説明いただけますか。

坂口　医学分野では免疫力を強めることが課題とされてきましたが、私は逆に、免疫反応の負の制御、つまり免疫反応が起こらないようにするメカニズムの研究を続けてきました。「制御性T細胞」の機能の解明により免疫反応をコントロールできれば、免疫系の過剰反応による関節リウマチや膠原病といった自己免疫病やアレルギーなどの治療や予防につながり、臓器移植の拒絶反応を抑えることにも応用できます。また免疫反応が起きてほしいがん細胞に対しては、免疫の抑制を解除することで免疫反応を高め、がんを拒絶させることができます。

平野　どのような経緯で制御性T細胞を発見されたのですか。

坂口　かつて免疫抑制の働きに関しては、サプレッサーT細胞というものの存在が考えられていました。獲得免疫機能を持つある種のT細胞が抑制的に免疫反応を終了させるという理論で、1970年代後半に盛んに研究されていました。しかし、当時、世界的潮流となっていたサプレッサーT細胞の考えで自己免疫疾患を説明しようとすると必ずしもフィットせず、サプレッサーT細胞の細胞としての実体も見つからず、研究は1980年代始めに急速にしぼんでいきました。

平野　同じカテゴリーで研究されていた坂口先生にとっては大変な逆境となりましたね。

坂口　何らかの制御性T細胞が存在しないと免疫反応を説明できないため、研究を続けて

▶2015年6月発行　大阪大学ニューズレター68号 掲載　阪大免疫研究 受賞スペシャル鼎談 より

いましたが、論文を発表しても、まだこんな研究をしている人間がいるのかという反応でした。しかし当時アメリカで最も待遇の良かった8年間のフェローシップ（研究費付）を獲得でき、生き残ることができました。制御性T細胞の存在を決定づけたのは、80年代に行った実験です。正常なマウスからある種のT細胞のグループを取り除くと自己免疫病が起きました。それは自己免疫病を起こすT細胞が正常な個体中にいること、取り除いたT細胞グループに含まれるT細胞が何らかの抑制機能を持っていたことを示唆しており、制御性T細胞がようやく日の目を見ることになりました。そして90年代半ばに、それを明示するマーカーとしてCD25分子を、2003年に転写因子Foxp3を発見したことで制御性T細胞の研究が一気に盛んになりました。

平野　坂口先生は自分の見つけた現象を正しいと信じ、一つの研究を辛抱強く続けて成果を出されました。その粘り強さは研究者のお手本だと思います。審良先生は獲得免疫の分野から自然免疫に進まれたのですね。

自然免疫の理論を根本から覆す 新たなメカニズムを発見

審良　当時の免疫学の主流だった獲得免疫のメカニズム解明から、免疫細胞が出すサイトカイン（細胞間の情報伝達物質）の研究、そして自然免疫へとテーマを変えていきました。兵庫医科大学に移ったという環境の変化により、自分だけの研究テーマを見つけたいと考えたからです。そして様々な分子に対するノックアウトマウスを多数作り、遺伝子の働きを徹底的に調べた結果、自然免疫は従来考えられていたように、侵入者を無差別に攻撃するのではなく、細胞膜にある何種類ものTLR（Toll-like receptor）という受容体がセンサーとして作動し、細菌やウィルスの種類に応じて働いていることがわかりました。

平野　従来の免疫理論を根本から覆す研究成果となりましたね。

審良　ある偶然が大発見のきっかけでした。大学院生がリポ多糖（グラム陰性菌の壁成分で、敗血症ショックの原因となる物質）を、MyD88という分子をノックアウトしたマウスに注射する実験を行っていたのですが、正常なマウスはショック状態になり死んでしまうのに、そのノックアウトマウスは死にませんでした。これはMyD88にいたるシグナル伝達経路の上流に、リポ多糖に反応してショック状態の引き金を引く受容体が存在することを示していました。真剣に取り組む価値があると考え、思いついたのがヒトでの存在が確認されたばかりのTLRでした。そしてリポ多糖を認識するのがTLR4であることを突き止めました。またその後、各TLRのノックアウトマウスとMyD88のノックアウトマウスを使い、ほとんどのTLRのリガンド（特定のレセプターに特異的に結合する物質）を解明することができました。

平野　審良先生の場合、セレンディピティ（思わぬものを発見する能力）というか、基礎研究などで思わぬ結果が出た時に、それを見逃さなかったことが成功のキーポイントと言えますか?

審良　これまでいつも考えてきたのは、何か独自のテーマに取り組みたいということです。今でも面白い結果が出た方向に動いていくことが私のストラテジー。数年ごとにテーマが変わっています。

研究者は楽天的であることが大事 ポジティブシンキングが好循環を生む

平野　物事の本質を突き詰めようとするスタンスは共通しているのですが、お二人の研究姿勢は対照的で面白いですね。研究姿勢を支えている信念や逆境を乗り越えられるモチベーションは何ですか。

坂口　生物学の現象の背景にある、より一般性の高い原理、説明力の高い考え方を見つけ出していくことに価値があると思っています。頑固にやってきたように思われるかもしれませんが、それぞれの時代に登場したドミナント（最有力）な考え方をとつきあわせてみて、それでも自分の考えが正しかろうとして自分の路線を貫いてきたということです。

審良　面白いデータが出てくれば興奮しますし、人が知らないことを見つけ出し、それが評価されるのは研究者として大きな喜びです。また研究にはしんどい部分もあるのですが忘れてしまう。ポジティブに考えると良いサイクルが生まれますから、研究者にとってオプティミスティックであることは大事だと思います。

平野　研究者は物事をポジティブに受け取っていくような性格でないとしんどい。研究は失敗の連続ですから、客観的な解析による反省は大事ですが、ペシミスティックな性格の人は研究センスがあっても潰れてしまいますね。さて、お二人の信念や苦労話をうかがってきましたが、今後の研究目標を教えていただけますか。

坂口　時代のテクノロジーを取り入れながら、免疫応答を制御する研究を前に進めていきたい。また免疫学はヒトの病気に近い学問ですから、マウスで見つけた事象や考え方をヒトに持っていけます。さまざまな免疫疾患などの予防・治療をめざし、新しい道を切り開いていきたいですね。

審良　医学部出身なので、やはり最終的には医療につながる研究をしたいと思っています。最近は線維症やガンなどのメディカル分野にターゲットをしぼった基礎研究にシフトしていて、企業ともコラボレーションしています。

世界の免疫学者に認知されたIFReC 拠点として次世代の若手研究者を育成

平野　お二人は阪大の免疫学フロンティア研究センター（IFReC）の拠点長（審良）・副拠点長（坂口）を務めておられます。阪大の免疫学の今後、若手研究者の育成などについて抱負を聞かせてください。

審良　IFReCはすでに、世界の免疫学者に認知されています。米国ハーバード大学やスタンフォード大学と同様に、日本にも免疫学の拠点がないと世界との競争に勝てません。学問は多様な分野のテクノロジーを使うことで融合していきますから、免疫学がドミナントになることは全ての学問の発展にもつながります。また良い環境から優れた若手が生まれますから、IFReCを維持し、考え方や実験のスタイルが伝わることで、必ず次代を担う若手研究者が現れてくると信じています。

坂口　免疫学はどのような病気にも関係していますから、学問として大きく広がりつつあります。その研究拠点としてのIFReCが日本に存在することで、免疫学をさらに高めていける可能性があります。そしてノーベル賞受賞者を生むような流れが各大学にあるように、IFReCからも優れた若手研究者が出現すると思います。

平野　そのような環境や組織をどこまで維持できるかが、その大学の底力。お二人と共に知恵を出し合いIFReCを発展させていきたいと思います。最後に先輩研究者として、若い人へのメッセージをお願いします。

坂口　興味がある事象を粘り強く掘っていくと、その基盤にある基礎的な概念など、必ず他とつながる部分に行き当たります。その意味で自分の興味を大事にして欲しいと思います。

審良　好きなことをして花を咲かせたい、そういう気持ちで日々を送ることが大事だと思います。人生は一度しかないと開き直って生きていくと、運は向こうから近づいてきます。

平野　研究者であろうと、政治家・企業家・芸術家であろうと、今を真剣に生きることが大事。今の積み重ねが人生だと思います。今日はお忙しいなか、ありがとうございました。

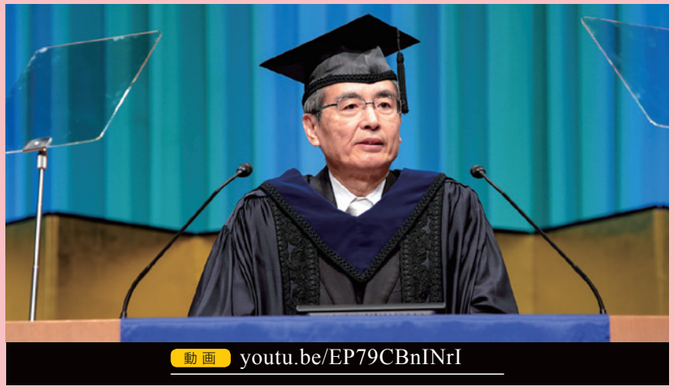
ガードナー国際賞の受賞を追い風に
——平野総長 対話をおえて——

ガードナー国際賞を受賞された審良先生と坂口先生は、大阪大学の免疫学の現在を牽引しておられます。また、大阪大学は創立100周年を迎える2031年に世界トップ10の研究型総合大学になることを目指し、世界から若い人が集まって研究し、再び世界に飛び立って人類の発展に貢献するという「世界適塾」構想を掲げています。総合大学として学問の多様性はもちろん、認知脳科学や光量子科学などの学問分野の強化も必要ですが、阪大の強みである免疫学は、世界適塾の実現に向けた大きな柱の一つになると思っています。その意味で今回の坂口先生のガードナー国際賞受賞は、世界における大阪大学の免疫学のプレゼンスを高めていく絶好の追い風になると、総長として大いに期待しています。

▶2015年6月発行　大阪大学ニューズレター68号 掲載　平成26年度卒業式・大学院学位記授与式 総長式辞 より

平成26年度卒業式・大学院学位記授与式──総長式辞

「多様性爆発の世紀に生きる」



阪大で学んだ誇りを胸に5,979人が巣立つ

平成26年度卒業式・大学院学位記授与式が3月25日(水)、大阪城ホールで行われ、11学部3314人、大学院16研究科2665人がそれぞれ卒業・修了しました。ホール前の広場には、開式前から出席者が集まり、写真を撮り合うなど和やかな談笑の輪が広がっていました。平野俊夫総長も学生の中に入り、一緒に記念写真を撮ったり、餞の言葉をかけるなど新しい門出を祝福しました。

式では、平野総長から各学部・研究科代表者へ学位記が、また特に優秀な学部卒業生に楠本賞が授与されました。「多様性爆発の世紀」にあって「共に生きる心こそが大事」との平野総長の式辞に続き、法学部卒業生で、医療・介護事業の経営コンサルタント会社「メディヴァ」代表取締役社長の大石佳能子さんが記念講話。大石さんは、マッキンゼー・アンド・カンパニー役員を経て自社を設立、2014年にハーバードビジネススクール・オブ・ジャパンのビジネス・ステーツウーマン・アワードを受賞したキャリア・ウーマン。30年余り前、女性が責任ある仕事に就くのが難しかった時代に阪大を卒業して社会に出てから、一歩一歩前向きに可能性を広げ歩んできた経歴を披露。夢を叶えるプロセスを「無人島にまちを作る」ことに例えて話をしました。まちを作るためには、マインドセット(考え方)、技、仲間の3つが必要であり、「障壁があれば発想の転換で道を拓き、あきらめないことを大切に」と後輩たちへアドバイス。

文学部を卒業した中井歩美さんは「友人や先生ら多くの人との出会いに恵まれた4年間でした。兵庫県加古川市から通い続けたのも思い出。春からは社会福祉法人で働きます」と話し、郷里の島根で教職に就くという友人の堀江玲美さんと共に笑顔を見せていました。基礎工学研究科を修了した高橋勇人さんは「学業以外でも友人との交流や旅行など思い出の多い6年を過ごすことができました。就職先では周りにくらいついていけるよう頑張りたい」。また、スーツ姿がほとんどの男子学生の中で、学生帽に袴という明治時代の学生風の装いで出席した文学部の鵜川祥平さんは「学生生活は、いろいろな体験ができたぜいたくな時間でした。4月からは海運会社に勤めます。へこむこともあるだろうけれど、スポンジのように吸収したい」と抱負を語っていました。

はじめに

本日、大阪大学から新たな一歩を踏み出さんとされている学部卒業生の皆さん、大学院修士・博士課程修了生の皆さん、そして専門職博士課程修了生の皆さん、ご卒業、修了おめでとうございます。卒業式・学位記授与式に

あたり、これまで大阪大学で学び、努力と研鑽を積み重ねられた皆さんに対して、大阪大学総長として心からお祝いし、讃えたいと思います。

また、この日まで長きにわたって皆さんを支えてこられましたご両親、ご家族の方々に対しまして心よりお喜び申し上げますとともに、深く敬意を表したく存じます。

皆さんは本日晴れて学士や修士そして博士の学位を取得され、一人一人が、これから進むべき道に夢と希望を膨らませておられることと思います。皆さんは大阪大学で授業や研究、あるいはクラブ活動や社会活動などを通じ様々な経験を積まれました。いずれの分野に進もうとも世界中の国・地域で、大阪大学で養われた知識と能力を生かし、その分野のリーダーになって我が国の将来は勿論のこと、人類社会の発展と福祉の向上に貢献してほしいと思います。大阪大学で学ばれた皆さんには、21世紀のグローバル社会で活躍できるリーダーとしての資質と能力が備わっていることを誇りに思い、品格と責任を持って社会に進んでいただきたいと思います。

多様性による発展と対立の歴史

まず最初に、皆さんがこれから活躍する社会はどのような状況にあるのかに関して話をしたいと思います。今、私たちは「多様性の爆発の世紀」にいるのではないかと思います。

20万年位前にアフリカを起源としてホモ・サピエンスが誕生して以来、人類は数万年の歳月をかけてユーラシア(アジア、ヨーロッパ)、オーストラリア、アメリカ大陸へと移動、拡散していき、この間にコイサン、コーカサイド、モンゴロイド、アボリジニの4つの人種が生まれて今日に至っています。そして、1万年から数千年前にメソポタミア文明、エジプト文明、インダス文明、中国文明、マヤ文明等の様々な文明が各地に開花しました。これらの文明は地理的な関係に依存して緩やかな関係を保つこともありましたが、それぞれが独自に生まれ、周辺地域を巻き込みながらお互いが影響し合い変貌をとげていきました。その過程でユダヤ教、キリスト教、イスラム教、仏教やヒンズー教など様々な宗教が生まれるとともに、言語や文化などの多様性が生まれてきました。4つの人種はさらに細分化され様々な諸民族が今地球上には暮らしています。これらの様々な多様性を有する人類は長い歴史のなかでお互いが影響し合い、かつ対立を引き起こし、時には戦争すら引き起こしてきました。このような多様性の対立は単に従属や支配関係のみに終わることなく、時として火薬のような武器等の科学技術の発展も誘導してきました。また多様性が交わることで人類社会に様々な革新的な変革がもたらされました。さらに多様性は人類社会に心の豊かさをもたらしました。このように人類の長い歴史は多様性がもたらす発展と多様性ゆえに生じる対立や戦争の歴史であったと言うことができると思います。

人類の歴史におけるグローバル化の波

20万年から数万年前の間に生じたホモ・サピエンスの緩やかな大陸間移動と5大陸への拡散を、グローバル化の第1の波とすると、第2の波は、紀元前1万年から西暦12世紀ごろまでの1万年余りの間に生じた各地域での農耕文明の開花とその周辺への拡大です。この間に、言語、人、習慣、文明や宗教など今日の人類社会に存在するあらゆる多様性の基本が生まれました。そして第3のグローバル化の波は13世紀から17世紀の400年間におこりました。中央アジアそして一部ヨーロッパを含むユーラシア大陸に及ぶ世界帝国を築いた広大なモンゴル帝国の出現により広域圏での陸上交通のみならず、アジアからアフリカ東海岸に至る大航海時代の幕が開きました。そして16世紀にはポルトガルやスペインなどによりユーラシア(アジア、ヨーロッパ)、アフリカ、オーストラリア、アメリカ大陸が7つの海洋で結ばれました。第4の波は、18世紀末から始まった産業革命に端を発するイギリスを中心とする植民地主義、その後のヨーロッパ諸国の帝国主義やアメリカの台頭、その結果としての2度の世界大戦と共産主義の出現や大戦後の東西冷戦構造への道筋です。この間、主役はイギリスからソ連やアメリカと変遷こそすれ、20世紀末のソ連やベルリンの壁崩壊に象徴される冷戦の終結で決着をみました。そして現代、20世紀末から始まった第5波のグローバル化、それは20世紀に花開いた相対性理論や量子力学に基づいた科学・技術の急激な発展により人類が経験したことのない地球の極端なまでの狭小化が引き起こす波です。

グローバル化の第5波

交通手段は人類の歴史のなかで、産業革命までは穏やかに発展を遂げてきました。20万年前はアフリカから北アメリカに人類が移動するのに何万年という時間がかかりました。その後人類は数千年前に馬などの動物による移動手段を獲得しました。そして船という海上移動手段を手に入れただけではなく、1世紀には中国で羅針盤が発明され海を迷うことなく航海する手段を手に入れました。また人力や動物の力から風力や水力等の自然エネルギーを使用する手段を開発してきましたが、18世紀から19世紀にかけての蒸気機関、内燃機関、発動機や発電機の発明により、人類は自然に依存しないエネルギーを効率的に生み出すことに成功しました。それによって、現在我々が移動手段として利用している自動車、鉄道、飛行機が開発され、素早く自由に移動することが可能になりました。例えば飛行機の普及によって、徒歩で長い時間をかけて大陸を横断していた我々人類は、今やわずか半日で大陸を横断することができます。更に開発中の超音速旅客機が実現すれば東京とニューヨーク間は3時間の距離に縮まります。人工衛星ではわずか1時間ほどで地球を1周することができます。

一方、のろしや伝書鳩などに頼っていた情報伝達も電信や無線の発明を経て、今ではインターネットにより瞬時に情報が世界中に伝わるようになりました。さらに、「モノのインターネット(Internet of Things, IoT)」の時代が始まりつつあります。世界がインターネットにより1つになろうとしています。

移動手段や情報伝達手段の発達により緩やかではあれ、確実に狭くなってきた地球は、この100年の間に過去の20万年間に生じた変化に比べて、遥か次元を超えて狭くなりつつあります。人類はその歴史のなかで幾度となく大きなグローバル化の波に襲われてきましたが、今人類が直面しているグローバル化の波は過去のそれとは全く中身が違うものです。すなわち人類の生活の基盤としている地球そのものが劇的に狭くなることを伴うものです。その意味で、人類は今まで経験したことがない性格のグローバル化の波の中に巻き込まれていると考えることができます。すなわち新人類が20万年前に誕生して以来最大の大変革期の真っ只中に私たちは生きているのです。

▶2015年6月発行　大阪大学ニューズレター68号 掲載　平成26年度卒業式・大学院学位記授与式 総長式辞 より

21世紀は多様性爆発の世紀

では21世紀のグローバル社会においてはなにが起こるのか、この点をよくよく考える必要があります。移動手段や情報伝達手段の発展に加えて、急激に進む人口の増加があります。永らく数億人であった世界の人口が、19世紀に10億人を突破し、その後急激に増加し、現在70億人、そして2050年には90億人を超えると推定されています。このように、移動手段や情報伝達手段のみならず、人口増加の観点からも地球は飛躍的に狭くなりつつあります。長らく比較的広大な地球に存在していた多様性は今第5のグローバル化の波のなかで、人口増加も加わり狭い時間空間に凝縮されようとしています。多様性の凝縮の問題に加えて、急激な人口の増加や技術革新は食料問題、エネルギーや環境問題、さらには感染症問題や生物多様性の危機など、様々な要因が複雑に絡んだ地球規模の深刻な問題を投げかけています。

言語、人、習慣、文化、宗教や政治形態などの多様性は革新的なイノベーションの創出や心豊かな人類社会の営みにとって不可欠です。一方多様性は負の側面として様々な障壁や紛争をもたらしてきました。まさに人類の歴史は多様性による発展と対立の歴史であると言われる所以です。人類歴史の中で過去に例をみない次元でグローバル化が進む現在の国際社会では、狭い時間空間に凝縮された多様性がもたらす負の側面が飛躍的に強くなり、様々な対立や紛争が世界に蔓延しつつあると思います。21世紀は「多様性の爆発の世紀」になる可能性すらあります。温度が連続的に変化し、ある時点で固体から液体へ、さらに気体へと全く異なる次元へと非連続的に物質が変化する、そのような大きな変革期を人類は迎えているのではないかと思います。21世紀のグローバル化社会においては多様性を維持しながら、多様性が生み出す障壁を乗り越えることが人類の生存にとり不可欠だと思います。

「調和ある多様性」の重要性

21世紀のグローバル社会に生きるためには、多様性を理解し、尊重し、維持することであり、かつ多様性を積極的に取り込みイノベーションの創造に役立てることだと思います。すなわち、「調和ある多様性の創造」によってのみ、グローバル社会の平和維持や、経済や社会活動に対するイノベーションを起こすことができると思います。さらに、このことにより人類社会のさらなる発展があると思います。

皆さんが学んだ大阪大学は学問の府です。大阪大学では物事の本質を見極める研究を行うとともに、何が物事の本質であるかを見極める能力を有した人間を育成する努力を行ってきました。大学は「学問の府」であり、教育や研究活動により社会に貢献するという役割は過去、現在、未来において不変です。そのうえで、21世紀の大学には更なる役割があります。それは学問による「調和ある多様性の創造」によりグローバル社会に大きく貢献することです。学問は芸術、スポーツや経済活動等と同じく人類共通言語です。これら人類共通言語は様々な障壁を乗り越える大きな力を有しています。学問を介する人材交流により、多様性の維持とそれが生み出す障壁の克服という、相反することの両立が可能となります。学問を介する世界規模での人材交流により異文化の相互理解や尊重を今まで以上に推進する必要性がここにあります。大学はこのように、学問による「調和ある多様性の創造」によりグローバル社会に大きく貢献しなければなりません。大阪大学で学問を学んだ皆さんは、21世紀のグローバル社会で大きな役割を担うことになります。

己を知り、己を磨く

では、調和ある多様性を創造するにはどのような心構えが必要でしょうか?

私は多様性を認め、尊重すること、すなわち異文化の相互理解と相互尊重が重要と考えます。そのためには相手の心、相手の立場に自分を投影して物事を判断する、論語にあります言葉「恕」の心、すなわち、「寛容の心」が必要です。また、他と自己との共存・共生が必要です。

この「共に生きる」心こそが第5波という大きな波に飲み込まれつつある21世紀のグローバル社会を生きるには欠かすことができない要素だと思います。様々な文化や宗教を異にする人類が共存共栄していくためには、その事実を理解し、それを尊重する、そして共生する。グローバル社会における基本的な心です。この根底にはまず己を知り、自国を愛し、そして自国の文化を理解し、かつ尊重することが必要です。自分自身を、自国を愛することができなくて、それらを誇りに思うことができなくて、どうして他人や他国を理解し尊重することができるでしょうか?そのためにも己を知り、己を磨かなければなりません。

さて、どのような組織や個人でも、過去の歴史や生い立ちに由来し、経験はDNAとして受け継がれています。皆さんが未来を語るときには決してそれらを無視できません。本日を契機に、皆さんは「大阪大学で学んだ」という共通の歴史を有することになりました。大阪大学卒業生であるということは、社会から「選ばれた人」として見られ期待もされますが同時に、社会に対する責任も有します。「己を知る」ためにはまず大阪大学を知る必要があります。では、皆さんが学んだ大阪大学とは一体どのような大学でしょうか。大阪大学を卒業されるにあたり、皆さんの未来を形成する重要な一部になる大阪大学を今一度考えてみたいと思います。

大阪大学の原点：「適塾」

「大阪にも帝国大学を」という地元大阪府民の熱意と、本日の卒業式で成績優秀な学生に贈られる「楠本賞」という名前で今も残っている大阪府立医科大学長でのちに第二代総長を務めた楠本長三郎先生や大阪府知事の柴田善三郎氏ら関係者の努力により、1931年、医学部と理学部の2学部からなる「大阪帝国大学」が、長岡半太郎初代総長の下、我が国第6番目の帝国大学として誕生しました。

江戸時代末期の1838年、緒方洪庵が「新知識をもって世の中の人を救う」ことを目的に私塾として設立した「適塾」の自由な学問的気風と先見性は、大阪府立医科大学を経て、大阪帝国大学医学部と理学部へと繋がります。1933年には大阪工業学校が工学部として加わりました。戦後、新たに法文学部が加わった際に、江戸時代後期、大坂町人が町人のために漢学や国学などを伝習した「懐徳堂」の蔵書類が、懐徳堂文庫として本学に寄贈され、大坂の町に息づいた独創的な学問と思想・文化を受け継ぐに至りました。1949年に新制大学としてスタートした際には、法文学部を文学部と法経学部に改組し、現在の総合大学としての骨格が整いました。その後、本学は、「地域に生き世界に伸びる」をモットーに、2004年の国立大学法人化、2007年の大阪外国語大学との統合を経ながら、我が国を代表する総合大学として現在の姿になりました。

大阪大学の原点でもある適塾について、もう少しお話しします。適塾には全国から1000名以上の塾生が集まり、日夜勉学に励みました。その中には塾頭を務め、後に慶応義塾大学を創設した福沢諭吉、安政の大獄で25歳の若い命を落とした橋本左内、日本赤十字社の前身の博愛社を創設した佐野常民、近代衛生行政を確立した長与専斎、明治政府で近代的な軍隊制度を創った大村益次郎、外交で列強各国と対峙し活躍した大鳥圭介、さらには1877年に設立された東京大学医学部の初代綜理を務めた池田謙斎など、様々な分野で維新前後のリーダーとして活躍した人々が適塾で育ちました。適塾が明治初期における我が国の近代化に大きな役割を果たしたのです。

皆さんが学び、本日卒業する大阪大学には、緒方洪庵の「人のため、世のため、道のため」という精神、そこで学んだ若者たちの偉大なる志、大坂町人の学問への情熱、そして大阪府民の熱意が脈々と受け継がれているのです。人類の未来は、若い皆さん一人一人の双肩にかかっています。社会が皆さんに求めているところは、様々な分野で責任あるリーダーとして社会に対する責務を果たすことです。あるいは、大阪大学で養われた知的創造活動の更なる飛躍です。人類が多様性の壁を乗り越えて心豊かな発展を遂げることができるように世界に羽ばたいてください。このようなことは大阪大学で研鑽を積み重ねた皆さんだからこそ成し得ることです。

「適塾」から「世界適塾」へ

2031年には、大阪大学は創立100周年を迎えます。大阪大学の夢は創立100周年を迎える時には、「世界適塾」として世界トップ10の研究型総合大学になることです。その理念は学問による「調和ある多様性の創造」により心豊かな人類社会の発展に貢献することです。

閉塞と混乱の江戸末期、適塾で学んだ先輩方が、我が国に新たな時代の風を吹き込んだように、皆さんにも、大きな「志」と「夢」を持って、21世紀のグローバル社会で活躍していただきたいと思います。「大阪大学で学んだ」ということを誇りに思っていただくとともに、大阪大学を卒業したことを忘れることなく、これからの皆さん自身の夢の実現のためにも目の前の山を登りきってほしいと思います。

夢は実現することが困難だから夢と呼ばれます。現実と夢があまりにもかけ離れているが故に、人は夢を決して手に入れることができない遥か彼方の出来事だとあきらめてしまいます。しかし、夢を忘れることなく、夢に向かう努力を一歩一歩していると、いつの日か夢が近づき、やがて現実のものとなります。

「夢は叶えるためにこそある」

どうか、そう信じてこれからの長い人生を歩んでいってください。

最後になりましたが、皆さん一人一人が今日の良き日にこの大阪大学から新たな一歩を踏み出し、これからの長い生涯、健康で幸運に恵まれ、悔いのない人生を送られることを祈ります。

本日はご卒業、修了、誠におめでとうございます。

平成27年3月25日
大阪大学総長　平野俊夫

2015 Graduation Ceremony and Graduate School Commencement Ceremony
Living in the Century of an Explosion in Diversity

First of all,

Please permit me to extend my sincere congratulations to each and every one of you who completed your studies at your respective schools and are embarking on a new life. As the president of Osaka University, I'd like to heartily congratulate you on your efforts. I also would like to express my admiration for your parents who supported your achievement of these goals.

Today you're graduating from Osaka University with an advanced degree. You must be filled with expectations for what lies ahead. You have gained experience in classes, laboratories, clubs, and social activities at Osaka University. My hope is that whatever goal you aim for you will become reliable leaders in that field and make use in the world the knowledge and skills you've cultivated at Osaka University. I hope you will contribute to the future of Japan as well as the development of human society and improved welfare. I hope you believe you have the quality and ability to be active in the world as leaders. I also hope you will move in society with grace and responsibility.

The history of development borne of diversity and of conflicts caused by diversity

First, I'd like to talk about what future will be waiting for you. I think now we're in the "Century of an Explosion in Diversity." Since the birth of Homo sapiens in Africa some 200,000 years ago, humans have moved and spread into Europe, Asia, Australia, and American continents over tens of thousands of years. During that time, 4 human species, the Khoisan, Caucasoid, Mongoloid, and Aborigine, were born.

Between 10,000 and a few thousand years ago, civilization emerging in locations such as Mesopotamia, Egypt, the Indus Valley, China, and Maya flourished. There were years when these civilizations maintained a peaceful relationship with each other for geographical reasons. They were born independently, but transformed while involving surrounding areas and affecting each other.

In that process, a variety of religions such as Judaism, Christianity, Islam, Buddhism, and Hinduism were born with a growing diversity in language and culture. The four human species were fragmented and currently a variety of races live on the earth. Possessing a range of diversity, these people affected each other during the long history of mankind, causing conflicts, even wars in some cases. Such diversity-related conflicts were not just in a subservient-dominant relationship, but developed science and technology such as gunpowder and weapons.

Exchange of people of diverse backgrounds also led to innovative changes in human society. Diversity also brought about spiritual richness to human society. Certainly the long history of mankind is the history of development borne of diversity and of conflicts and wars caused by diversity.

The wave of globalization in the history of mankind

If we define the slow migration between continents by Homo sapiens and their diffusion to the five continents as the first wave, the birth of agrarian civilization and its spread to the surrounding area during the period between 10,000 year B.C. and the 12th century will constitute the second wave. During that period, the foundation of diversity in language, race, custom, culture, and religion in current human society was made.

The third wave of globalization took place during the 400 years between the 13th century and 17th century. The emergence of the Mongol Empire, which built a world empire including Central Asia and part of Europe, brought about regional-scale land traffic, opening the Age of Exploration which stretched from Asia to the east side of Africa. In the 16th century, Portugal, Spain and other countries connected the continents of Eurasia, Africa, Australia, and America by the seven seas.

The fourth wave is a series of events including the colonialism which started from the industrial revolution at the end of the 18th century in England, imperialism in Europe, the emergence of the U.S., resulting two world wars, socialism, and the Cold War after World War II. During that time the world major player shifted from the UK to the U.S. The wave of globalization terminated with the end of Cold War, symbolized by the breakup of the whole Soviet Union and the collapse of the Berlin Wall at the end of the 20th century.

Today, the fifth wave of globalization which started at the end of the 20th century is the wave caused by the unprecedented extreme narrowing of the earth caused by the rapid development of science and technology based on the relativity theory and quantum mechanics that flourished in the 20th century.

The 5th wave of globalization

In the history of mankind, traffic means developed slowly until the industrial revolution. 200,000 years ago, it took tens of thousands years for humans to migrate from Africa to North America. Tens of thousands of years ago, humans obtained means of migration by animals such as horses.

Later they obtained not only maritime transport means such as ships, but also compasses invented in China in the 1st century, which made it possible for people to navigate waters without getting lost. People developed means for using manpower, animal power, as well as natural energy such as wind and water. Thanks to steam engines, internal-combustion engines, motors, and generators invented in the 18th and 19th centuries, people succeeded in efficiently generating energy not dependent on nature.

By using such technologies, means of transportation such as cars, railways, and airplanes were produced, which made it possible for people to travel quickly. People crossed the continents on foot over time, but now, the growing use of airplanes has made it possible for people to cross it in just half a day. If the supersonic airliners under development are achieved, it will take only three hours to travel from Tokyo to New York. Artificial satellites can circle the globe in just an hour.

People used smoke signals and carrier pigeons as communication means; however, through the invention of telegram and radio, now information gets around the world in a flash via the Internet. Furthermore, the Age of Internet of Things (IoT) is about to begin. The world is going to be united through the Internet.

Through the development of means of transportation and conveying information, the earth has been narrowed slowly but surely in the last 100 years. Compared with changes that happened in the past 200,000 years, today, the earth is narrowing at a speed beyond time and space. Humans have been swamped by the wave of globalization several times, but the wave of globalization human beings are facing right now are different from that in the past. In other words, the foundation of our life, the earth itself, has drastically become small. In that sense, we are swallowed up by an unprecedented wave of globalization. That is, we are in the middle of the greatest revolutionary era since the birth of new human beings 200,000 years ago.

The 21st century, the century of an explosion in diversity

We need to consider what will take place in our 21st century globalized society. In addition to the development of means of transportation and conveying information, there is an issue of rapidly-growing population. The world population remained in hundreds of millions for a long time. The population exceeded 1 billion in the 19th century and then rapidly increased, standing at 7 billion now. It is expected that it will grow beyond 9 billion in 2050.

In this way, not only in terms of means of transportation and conveying information, but also in terms of population growth, the earth is surely becoming smaller and smaller. Combined with the increased population, diversity which existed on the relatively wide earth for a long time, in the midst of this 5th wave of globalization, is going to be epitomized in a narrowed time and space. In addition to this condensed diversity, rapid population growth and technological innovation have raised intricately-intertwined global problems such as food problems, energy crisis, environmental problems, infectious diseases, and biodiversity.

Diversity -- differences in language, race, customs, culture, and religion, and political form -- is essential for creating groundbreaking innovation and a spiritually affluent human society; however, diversity has also brought about negative results such as obstacles and conflicts. That's why it is said that the history of humanity is also the history of development borne of diversity and of conflicts caused by diversity.

In today's increasingly globalized world, unprecedented in size in human history, the negative side of diversity epitomized in narrow space and time has grown even stronger and various conflicts are taking place throughout the world. There is even a possibility that the 21st century will become the "Century of an Explosion in Diversity." I think that humans are in a phase of major change in the same way continuous change in temperature turns a solid into liquid, into gas, and then into a totally different sphere, non-continuously. In the 21st century globalized society, overcoming barriers caused by diversity will become essential for humanity's survival.

Importance of Harmonious Diversity

In order to live in a global society, understanding, respecting, and maintaining diversity is important. It is also necessary to positively support diversity and use it for the creation of innovation. I believe only the "creation of harmonious diversity" can maintain peace in a global society and create innovation in economic and social activities and that this will lead to the further development of human society.

The Osaka University where you have studied is a center of scholarship. Osaka University has conducted research to ascertain the true essence of things and has made efforts to cultivate personnel who will possess the ability to find the essence of what is true in multiple fields. A university is a center of scholarship. The role of a university, to contribute to society through education and research, never changes; however, I think universities in the 21st century will have an additional role -- making a great contribution to a more globalized society by creating "harmonious diversity through scholarship."

Scholarship, along with sports and economic activities, is a kind of language common to all humankind. These languages common to all humankind have the power to overcome barriers. Exchange among humans by means of scholarship makes it possible to achieve the maintenance of diversity, and, at the same time, to overcome barriers caused by it. That's why we must further promote person-to-person exchange via scholarship on a world scale. In this way, universities can contribute to the globalization of society through the "creation of harmonious diversity." As graduates of Osaka University, you will play a great role in global society.

Know yourself and cultivate your power

How should we prepare ourselves to create harmonious diversity? I think it's important to recognize and respect diversity, in other words, to have mutual understanding and mutual respect for different cultures. To this end, we need to understand other people's ways of looking at things and feelings. As Analects of Confucius said, we must be open-minded. Thus, both the "foreign" and "self" components need to coexist in time and place.

I think being able to live together harmoniously with others is essential for people who will be active in our 21st century globalized society which is being swallowed up by the 5th big wave. For nations and people with different cultures and religions to live in harmony and prosper, it's critical to understand diversity, respect others and harmoniously live together in society. This is a necessary frame of mind for people living in a global society.

To this end, it's necessary that they know themselves, love their country, and understand and respect their own culture. If one cannot love one's self and one's nation and not be proud of such, how can such a person understand and respect other people and other nations? For that purpose, it's necessary that people know themselves and cultivate their power.

For any organization and human being, the present condition of the organization or the human comes from their roots. Their experiences are handed over as a kind of DNA. When speaking of the future, you cannot neglect them. All of you share a common history that you studied at Osaka University. Being graduates of Osaka University, you will be viewed as persons selected from society and you will have the responsibility to give back to society accordingly.

To know yourselves, you need to know Osaka University. So, what is the Osaka University where you have studied? On this day of your graduation, let's think about the Osaka University that has become and will remain an important part of your life.

The root of Osaka University: Tekijuku

Thanks to the enthusiastic support of the citizens of Osaka, then president of Osaka Prefectural Medical University and the second president of Osaka University, KUSUMOTO Chozaburo (you may recognize his name from the Kusumoto Awards that are given to outstanding students in this graduation ceremony), then governor of Osaka Prefecture SHIBATA Zenzaburo, and other university personnel, Osaka Imperial University was founded in 1931 with two schools, Medicine and Science. It was the 6th imperial university and its first president was NAGAOKA Hantaro.

However, our university's roots actually reach back to Tekijuku, a private "place of learning" founded in 1838 by the doctor and scholar of Western sciences OGATA Koan who worked to save people with then state-of-theart knowledge. Tekijuku's open academic culture and forward-looking spirit gave birth to Osaka Prefectural Medical School and, eventually, to the Schools of Medicine and Science at Osaka Imperial University. In 1933, Osaka Industrial University merged with Osaka Imperial University, becoming the School of Engineering.

When the School of Law, Economics, and Letters was established following the end of World War II, collections of books regarding traditional Chinese and Japanese learning possessed by Kaitokudo, a place of learning of Chinese and Japanese studies for merchants and founded by merchants in Osaka in the late Edo Period, were passed on to Osaka University. These book collections were symbolic of the original scholarship and the "Osaka spirit" that our university inherited with these tomes.

With the introduction of the new education system in 1949, the School of Law, Economics, and Letters was divided into the School of Letters and the School of Law and Economics, setting up a structure for our current comprehensive university. Osaka University continues to grow under the motto "Live Locally, Grow Globally." After going through transitions such as the legal status change to that of a national university corporation in 2004 and the merger with Osaka University of Foreign Studies in 2007, Osaka University now represents our country as a genuine comprehensive university.

Let me explain about Tekijuku, one of the roots of Osaka University. More than 1,000 students came to Tekijuku from all over Japan and studied day and night. The students included FUKUZAWA Yukichi who served as a school chief and founded Keio University in his later days, HASHIMOTO Sanai who was killed at the age of 25 in the Ansei Purge, SANO Tsunetami who found Hakuaisha, the predecessor of the Japan Red Cross, NAGAYO Sensai who built the foundation of Japanese medical care system and public health system, OMURA Masujiro who created a modern military system for the Meiji government, OTORI Keisuke who diplomatically confronted the Western powers, and IKEDA Kensai who served as the first dean of the Faculty of Medicine at The University of Tokyo built in 1877. Thus, Tekijuku produced persons who were active as leaders in various fields before and after the Meiji Restoration. Tekijuku played a major role in the modernization of Japan in the early Meiji Period.

In the Osaka University where you have studied, Tekijuku's spirit of "responsible ethics, concern for people, for society," the aspirations of young people who have studied here, the Osaka merchants' passion for scholarship and their eagerness to build an imperial university in Osaka, these have been handed down to you from the earlier generations. Our future depends on you young people. Society asks you to fulfill your responsibilities as leaders in a variety of fields, and for the further promotion of inquiring minds as a part of intellectual creative activities nurtured at Osaka University. I hope you will fly high in the world so that human beings can develop spiritually rich society by overcoming barriers in diversity. You who have studied and conducted research at Osaka University can achieve this goal.

From "Tekijuku" to the "World Tekijuku"

Osaka University will celebrate the 100th anniversary of its founding in 2031. Osaka University's greatest aspiration is to become one of the world's top 10 research universities by our 100th anniversary in 2031, to become a "World Tekijuku." The principle is to make a contribution to the development of a spiritually affluent human society.

Just as our predecessors who studied at Tekijuku brought new perspectives to Japan during a period of stagnation and turmoil at the end of Edo Period, I want you to have a great aspiration and dream and be active in the 21st century globalized society. I hope you will be proud to have studied at Osaka University and keep in mind that you graduated from this University and you will reach the tops of mountains in your own way so that you can make your dreams come true.

Achieving dreams is difficult. That's why they are called dreams. A dream is far from reality and cannot be achieved easily. So it's only too easy to think that achieving a dream is impossible and, thus, give up. However, if we hold on to our dreams and continue to make every effort to achieve them, one day, someday, those dreams just might come true.

Dreams are meant to be achieved.

Please hold to this throughout your long lives.

Allow me to close by wishing you all good fortune. May each of you live a long life filled with health and happiness. My sincerest congratulations to you all!

March 25, 2015
Toshio HIRANO
President of Osaka University

平成27年度入学式──総長告辞

「歴史的大変革期を生きる」

大いなる夢と希望をもった6,415人が阪大へ

穏やかな春の日差しに恵まれた4月2日(木)、大阪城公園周辺は満開の桜を愛でる人たちでにぎわい、その一角にある大阪城ホールで平成27年度入学式が行われました。式には、新入生や家族、大学関係者らが出席し、学部生3489人、大学院生2926人の新阪大生の入学・進学を歓迎しました。

学部入学生を代表して人間科学部の長山広太郎さんが「適塾の自由闊達な精神をもって勉学に励みたい」と宣誓。長山さんは「大学では学問を第一に、またアルバイトなども経験して内面的に成長したい。将来は世界へ出て地域開発などの仕事に就きグローバルに活動するのが希望です」と話していました。また、学生席の最前列に座った工学部の渡部ありささんは「始まりが大事なので早めに来ました。初めての一人暮らしなど不安もありますが、ちゃんと勉強しサークル活動なども楽しみたい」と、新生活への期待に笑顔を輝かせていました。

平野俊夫総長は告辞の中で、3月末まで放映されたNHK朝の連続テレビ小説「マッサン」の主人公のモデルとなった竹鶴政孝さんが大阪大学工学部の前身大阪高等工業学校の卒業生だったことを紹介。「マッサンは日本人が世界一のウイスキーを創るという大きな夢を実現させた。皆さんも目の前の山を一つ一つ登りきることにより、自分の夢を実現するための第一歩を大阪大学で踏み出してください」と話しました。

大阪大学に入学ならびに進学されました皆さん、おめでとうございます。また、ご臨席いただきましたご家族の皆さま、関係者の方々に心よりお祝い申し上げます。

あらゆる可能性を秘めた前途洋々たる皆さんは、本日、大阪大学の一員として、あらたな人生を踏み出すその第一歩を迎えられました。大阪大学総長としてこの上もない喜びであり、大阪大学は心から皆さんを歓迎いたします。

適塾から大阪大学へ、そして世界適塾へ

はじめに、皆さんがこれから過ごす大阪大学について、少しお話をいたします。大阪大学は、1931年に我が国第6番目の帝国大学として創立された大学ですが、設立の準備金や当座の運営資金を大阪の有志が出資して開設されたという歴史的経緯を持つ大学です。その大阪大学の原点は、江戸時代末期の1838年に緒方洪庵が開いた「適塾」に見いだせます。外国語学部の前身である大阪外国語学校出身の、すなわち皆さんの大先輩である司馬遼太郎が小説『花神』の冒頭で、適塾を大阪大学の「前身」、緒方洪庵を「校祖」と表現しています。

適塾には全国から1000名以上の塾生が集まり、日夜勉学に励みました。その中には塾頭を務め、後に慶応義塾大学を創設した福沢諭吉、彼の後に塾頭を務め、我が国の医療制度、公衆衛生制度の基礎を築いた長与専斎、安政の大獄で25歳の若い命を落とした橋本左内、日本赤十字社の前身の博愛社を創設した佐野常民、明治政府で近代的な軍隊制度を創った大村益次郎、外交で列強各国と対峙し活躍した大鳥圭介、さらには1877年に設立された東京大学医学部の初代綜理を務めた池田謙斎など、様々な分野でリーダーとして活躍した人々が適塾で育ちました。大阪大学医学専門部の卒業生で、ブラックジャック、鉄腕アトムなどで有名な漫画家の手塚治虫が自らのルーツを描いた「陽だまりの樹」という作品があります。このなかで描かれている手塚良庵は手塚治虫の曾祖父で、緒方洪庵の弟子として福沢諭吉らとともに学んだ蘭方医です。彼らは「人のため、世のため、道のため」という緒方洪庵の精神にもとづき、明治初期における我が国の近代化に大きな役割を果たしたのです。適塾は、医学を伝習する場所として開設されましたが、医者を目指していた者だけが集まったのではありません。長与専斎は「元来適塾は医科の塾とはいへ、其実蘭書解読の研究所にて、諸生には医師に限らず、兵学家もあり、砲術家もあり、本草家も舎密家も凡そ当時蘭学を志す程の人は皆この塾に入りて、其支度をなす…」と回顧しています。このように、舎密すなわちケミカルの分野など、蘭学を介して様々な西洋の学問にも塾生は興味を持っていました。

このように適塾の自由闊達な学問的気風と先見性の下で学んだ若い有志が、明治維新という我が国の新しい時代を切り開く大きな原動力になり、その適塾の精神は1869年に設立された大阪仮病院に継承され、大阪医学校や大阪府立医科大学を経て、1931年に医学部と理学部の2学部からなる我が国6番目の帝国大学となる大阪帝国大学へと繋がります。その後1933年には、1896年に設立された大阪工業学校が工学部として加わりました。戦後、新たに法文学部が加わった際に、江戸時代後期、大坂町人が町人のために漢学と国学などを伝習した「懐徳堂」の蔵書類が、懐徳堂文庫として本学に寄贈され、大坂の町に息づいた独創的な学問と思想・文化を受け継ぐに至りました。

1949年に新制国立大阪大学として再スタートした際には、法文学部を文学部と法経学部に改組し、現在の総合大学としての骨格が整いました。その後、法経学部は、法学部と経済学部に改組され、歯学部、薬学部、基礎工学部や人間科学部などを新設し、2004年の国立大学法人化を経て、2007年には、1921年に設立された大阪外国語大学との統合により、現在、11学部、16研究科、5附置研究所を擁する我が国屈指の研究型総合大学に成長しました。1931年の本学開学当時、医学部と理学部あわせて86名だった新入生数は、80年を経て、学部学生の定員では国立大学の第一位の規模となり、学部学生と大学院学生合わせて6400名に及ぶ皆さんが毎年入学されるまでに発展しました。また大阪大学の現役の学生は様々な分野で大活躍しています。例えば、昨年は文学研究科哲学の修士2年生の糸谷哲郎さんがプロ将棋の最高峰である竜王を獲得しました。また現役の阪大生が世界で13人目、女性としては世界初のレゴマスターを獲得、学生落語日本一や全国学生環境活動コンテスト2年連続グランプリを獲得するなど大活躍しています。さらにエコノミスト誌が昨年発表した企業の人事部の評価ランキングで阪大生は日本1位に輝きました。

このように、177年前に設立された「適塾」を原点として、「懐徳堂」の精神を受け継ぎ、大阪府民の熱意に支えられた本学は、「地域に生き世界に伸びる」をモットーに、我が国を代表する国立総合大学として、世界に向かってたゆみなく発展を遂げるとともに、数多くの優れた研究者、教育者、文化人、そして政財界など各界の指導者や卓越した人材を世に輩出してきました。今から16年後の2031年には大阪大学は創立100周年を迎えます。その時、大阪大学は、「世界適塾」として世界でトップ10に入る研究型総合大学になることを目指しています。適塾には日本各地から志ある若者が集まり、適塾で学んだ新しい知識や技量を携え、再び全国に散らばり明治維新の新しい時代を切り開きました。「世界適塾」には、世界中から向学心溢れる人たちが大阪大学の学問と研究を目指して集まり、学問や研究を究め、やがて大阪大学から世界中に羽ばたいていきます。「世界適塾」の理念は学問による「調和ある多様性の創造」により心豊かな人類社会の発展に貢献することです。

学問による「調和ある多様性の創造」

20万年位前にアフリカを起源としてホモ・サピエンスが誕生して以来、人類は数万年の歳月をかけてユーラシア、オーストラリア、アメリカ大陸へと移動、拡散していきました。そして、1万年から数千年前にメソポタミア文明、エジプト文明、インダス文明、中国文明、マヤ文明等の様々な文明が各地に開花しました。その過程で様々な宗教が生まれるとともに、言語や文化などの多様性が生まれてきました。これらの様々な多様性を有する人類は長い歴史のなかでお互いが影響し合い、かつ対立を引き起こし、時には戦争すら引き起こしてきました。また多様性が交わることで人類社会に様々な革新的な変革がもたらされました。さらに多様性は人類社会に心の豊かさをもたらしました。このように人類の長い歴史は多様性がもたらす発展と多様性ゆえに生じる対立や戦争の歴史であったと言うことができると思います。そして今、20世紀に花開いた科学・技術の急激な発展により人類は大きなグローバル化の波に飲み込まれています。例えば飛行機の普及によってわずか半日で大陸を横断することができます。またインターネットにより瞬時に情報が世界中に伝わるようになりました。移動手段や情報伝達手段の発展に加えて、急激に進む人口の増加があります。現在70億人、そして2050年には90億人を超えると推定されています。このように、移動手段や情報伝達手段のみならず、人口増加の観点からも地球は飛躍的に狭くなりつつあります。長らく比較的広大な地球に存在していた多様性は今狭い時間空間に凝縮されようとしています。多様性の凝縮により21世紀は多様性の爆発の世紀になる可能性すらあります。加えて急激な人口の増加や技術革新は食料問題、エネルギーや環境問題、さらには感染症問題や生物多様性の危機など、様々な要因が複雑に絡んだ地球規模の深刻な問題を投げかけていま

▶2015年6月発行　大阪大学ニューズレター68号 掲載　平成27年度入学式 総長告辞 より

す。このように、今、人類はかつて経験したことがない、地球規模の歴史的大変革期に直面しています。我々大学人はこのような地球規模の様々な問題を解決していく道を探求して行かなければなりません。これは21世紀のグローバル社会に生きている皆様や我々大学人の責務です。

さらに21世紀の大学に求められているもう一つの大きな責務があると思います。それは学問による「調和ある多様性の創造」です。グローバル社会では、言語・人・文化・宗教・政治などの多様性が存在します。これらの多様性は人類社会の発展の原動力であるとともに、人類社会を豊かにしてきました。その一方、時として様々な障壁となり紛争や戦争すら引き起こす基になります。大学には人類に

普遍的な共通言語である「学問」が存在します。学問は芸術、スポーツや経済活動などと並んで、人類共通の言語であり、多様性がもたらす様々な障壁を乗り越える大きな力を有しています。学問をすることにより、皆さんは言語や文化や宗教を異にする世界中の様々な人々と友達になり、人の輪を世界中に際限なく広げることができます。そして、多様な背景を持つ世界中の人と学問を介して得られた永遠に続く「絆」は、経験と人的交流を持って拡散し、世界中に「調和ある多様性」をもたらすことが可能です。これこそが、21世紀の大学の大きな役割です。

糟粕を嘗る勿れ

初代総長で、我が国における原子物理学の父であり、土星型の原子模型を提唱した長岡半太郎先生は次のような言葉を残しております。

「糟粕を嘗る勿れ」

長岡総長はこの言葉を直筆の額として本学に残しており、現在、それは総長室に掲げられています。糟粕とは酒の搾りかすで、滋養すなわちスピリッツをとりきった不要物、精神のない遺物などを意味します。「糟粕を嘗る勿れ」とは、すなわち「先人の精神を汲み取らず、形だけをまねるようなことはするな」という意味です。この精神のもとに、湯川秀樹先生は大阪大学理学部で中間子理論を完成されました。この研究により先生は大阪大学理学博士の学位を取得されるとともに、日本人として初めてのノーベル賞を受賞されました。湯川先生の愛用の黒板は理学部にあり、学生らが自由に使用して意見交換会などに活発に使われています。

これこそが適塾から現在につながる大阪大学で、皆さんに体得してほしいと願う学問の姿勢です。大阪大学は、皆さんが常に先進的で独創的な研究ができる環境を提供します。しかし、その機会は皆さん自らが求めなければなりません。常に独創的であるためには、「物事の本質を見極める」姿勢が必要になります。漫然と過ごすだけでは見逃してしまう疑問、不条理、変化、そのようなものに皆さん自身が気づく感受性を養わなければなりません。たとえば、皆さんが大学で行う様々なクラブ活動、NPO法人活動への参加、夏季休暇を利用した海外研修など、大学のキャンパスや周辺にその機会は溢れています。大学院生の皆さんにとっては、実験やフィールド調査等を介して、より具体的に目の前の自然現象や社会現象に潜む物事の本質を追究する機会が溢れています。その機会を決して逃さないことです。その機会をものにできるか否かは皆さん一人一人の感性、好奇心、観察力、考察力、粘り強さと、そこから芽生える「ひらめき」にかかっています。今までのように先生が一つ一つ物事を教えてくれる訳ではありません。教員も真の答えを求めて日夜研究しているのが大学です。ただ机に座って授業を受けていればそれで物事の本質がわかる訳ではありません。また、物事の本質が皆さんのもとに向こうから微笑んで近づいてくる訳ではありません。それは、自ら求め、心の準備ができている人にのみ、ある日、ある時、突然訪れるのです。

胡蝶の夢

荘子の中に次のような一節があります。(「荘子」、岸田陽子訳、徳間文庫より)

「昔荘周夢に胡蝶となる。栩栩然として胡蝶なり。自ら愉みて志に適えるかな。周たるを知らざるなり。俄然として覚むればすなわちきょきょ然として周なり。知らず、周の夢に胡蝶となるか、胡蝶の夢に周となるかを」

夢の胡蝶が今の自分を夢見ているのか、それとも今の自分が夢で蝶になっているのか?さらに、荘子は、何が真実かという問いかけに対して、この世の中には絶対的に真実といえることはない。ものの見方を変えれば、例えば己を「これ」と呼び、他を「かれ」と呼ぶ、しかし「かれ」からは己も「かれ」、「かれ」も「これ」である。このように物の見方は、立場をかえればなにが正しく、なにが誤りであるとは言い難い。この荘子の考え方の中に、「物事の本質」というものを垣間見ることができます。皆さんがこれまで学んできた知識はすべて、ある一面からみた知識に過ぎません。荘子が言うように物事は見方を変えれば全く異なる姿が見えてきます。皆さんもこれからは様々な問題意識をもって、ある事柄を一面から見ることなく、様々な観点から見る、すなわち複眼的に見る努力をして欲しいと思います。そこに物事の本質を観ることができます。

歴史的大変革期を生きる

皆さんは、今の大変革期を生きるにあたり、日本は勿論もっと広く世界に目を向け、「社会の変化に対応する」力を身につけなければなりません。では、現代の社会が求める人材、その能力とはどのようなものでしょうか?例えば、決断力、行動力、そして言語運用能力を含むコミュニケーション能力。これらは、しばしば優れたリーダーの素質として語られます。確かにこれらの能力を身につける必要はあります。しかし、急速に変化し続ける現代社会においては、これらの汎用的能力だけでは十分ではありません。これからの社会が求める人材とは、多元的な課題に潜む物事の本質を見極め、従来からの常識や考え方を超えた課題解決を先導できる人材であると私は考えます。「物事の本質を見極める力」とは、現象として認知可能な事象の奥に潜む、その事象のカギとなるもの、そしてその仕組みを見極める力を意味しています。「一芸に秀でた者はすべての道に通じる」という言葉があります。この力の基盤となるのは、特定の分野をとことんまで究めた高度な専門性です。大学が最先端の研究を行い、それに基づく高度な専門教育を行う意義はここにあるのです。

また、物事の見方の転換も重要かもしれません。例えば、科学技術の力で自然を征服するという発想ではなく、如何にすれば人類は自然と共生できるかを真剣に考える必要があります。また老・病・死など人間が避けて通れない問題も、今までは生命科学や医学の発展により克服するという姿勢で研究が行われてきました。しかしそのような発想を転換し、どのようにすれば人類はこれらの問題と共生し心安らかな人生を全うできるかを、見つめなおす必要もあるでしょう。このように、荘子の胡蝶の夢の例のように、物事を見る時一面から見るのではなく、複眼的に様々な観点から見る必要があります。

さらに、物事の全体像を捉える「俯瞰的視点」も重要です。「木を見て森を見ず」という言葉が示すように、一本の木にとって都合の良いことが、必ずしも森全体にとって最善の策とは限りません。短期的にはその木にとって最善の策であっても長期的に森全体にとって悪影響があれば、結局はその木にとって致命的な問題となるのです。

これらの視点を養うのは、幅広い教養教育です。教養教育は、単に知識の蓄積ではなく、広く柔軟な視点の獲得に繋がるものとして重要です。さらに、グローバル社会においては、人類の活動のフィールドはますます拡大していき、異なる言語、文化、民族、宗教、国の相手との関係構築、そして協働が必要となります。そのような状況に適切に対応するためには、孔子の言葉である、相手の心や立場を鑑みて物事を判断する「恕」の心、即ち「寛容の心」と、他者の異なる文化や考え方を理解・尊重する「共生の心」を育むことが重要です。そして、この前提として忘れてはならないのは、「己を知る」ことです。多様性を持つ人類が共存共栄していくためには、まず自己を知り、自国の文化を理解し、かつ尊重することが必要です。自分自身を、自国を愛することができなくて、それらを誇りに思うことができなくて、どうして他人や他国を理解し尊重することができるでしょうか?

皆さんは、大阪大学で思う存分学んでほしいと思います。さらに積極的に自ら問題意識をもって回答を求める努力をしてほしいと思います。また世界に目を向けてほしいと思います。積極的に海外に出かけて様々な国の人と交流してほしいと思います。大阪大学には様々なプログラムや機会があります。是非ともこれらを積極的に有効活用して歴史的大変革期を生きてください。

夢を叶える――マッサンの夢、私たちの夢

皆さんは、今、大阪大学に入学という一つの大きな山の頂に立っているのです。皆さんはその頂に、どのような思いで立っているのでしょうか? ここまでの長い道のりを思い出しな

がら、感慨に耽り目の前の新しい景色を見つめているのかもしれません。あるいは、これから挑戦しなければならない、眼前に聳え立つ山々を仰いでいるかもしれません。皆さん一人一人が見ている景色は様々で異なることでしょう。しかし、皆さんに共通しているのは、その景色は皆さんが今まで見たこともない、経験したこともない景色であるということです。

私は、常日ごろ若い人と話す機会があると、「目の前の山を登りきる」ことの重要性を語ってきました。いくら山に登っても頂上まで登りきらなければ頂上からの新しい景色を見ることはできません。皆さんの前には登るべき山として常に越えなければならない試練や困難、あるいは叶えたいと強く願う志や夢があるはずです。人は夢を心に、あるいは未来への希望を胸に目の前の試練や障害を乗り越えていこうと努力し、そして目の前に聳えている山を登っていきます。

人生における山では、頂上に立って初めてその山の高さがわかります。何より重要なことは、たとえ登りきった山が低い山であったとしても、登りきることにより、今まで見たこともない景色を見ることができるということです。これから進むべき道が、挑戦するべき山が展望できるのです。人生における登山では、どこにも標識はありません。今、自分が何合目にいるのか、それは誰にもわかりません。頂上に立ったとき、「自分が頂上に立ったこと」を初めて知るのです。頂上は、それを求める努力をし、必ずあると信じている人の前に、突如現れます。それは心の準備ができている人に突如訪れる「ひらめき」そのものです。

皆さんは本日晴れて一つの山の頂に立つことの喜び、その意味、そしてその先に広がる未来という素晴らしい景色を展望できることを実感しておられるはずです。1回でも苦しいプロセスを経て頂上に立つことができた人と、途中で下山した人では、大きな違いが生じます。今回の経験を忘れることなく、これからも目の前の山を一つ一つ登りきる努力を怠らず、目指すべき山の頂に立ってほしいと思います。長い人生では山もあれば、谷もあります。たとえ谷底に落ちても、それは次の山登りの絶好のチャンスと捉えて、次の山を、夢を目指せばいいのです。いつまでも未来への希望と夢を失うことなく、皆さんそれぞれの目の前の山を登りきってください。

3月末までNHKの朝ドラで放映されていたマッサンはニッカウキスキーの創業者で日本人初のウイスキー蒸溜技師の竹鶴政孝さんです。実はマッサンは大阪大学工学部の前身である大阪高等工業学校の卒業生です。マッサンは大正から昭和というあの激動の時代に大変な苦労と努力をして、目の前の山を一つ一つ登りきることにより、世界一のウイスキーを創るという、当時の日本では不可能と考えられていた大きな夢を実現させたのです。

「夢は叶えるためにこそある」

夢や理想は実現が困難だから夢であり理想と呼ばれます。現実と夢があまりにもかけ離れているが故に、人は夢を決して手に入れることができない遥か彼方の蜃気楼だとあきらめてしまいます。しかし、夢を忘れることなく、夢に向かう努力を一歩一歩していると、いつの日か夢が現実のものとなります。皆さんは未来という無限の可能性を持っています。どうぞ、この瞬間の、この感激を忘れずに、大いなる志と夢をもって、世界に羽ばたいてください。皆さんがそれぞれの夢を実現するための第一歩を大阪大学で踏み出されることを念じて私からの告辞とさせていただきます。

平成27年4月2日
大阪大学総長　平野俊夫

平成26年度 秋季卒業式・学位記授与式 ──総長式辞

2014年9月25日（木）、大阪大学コンベンションセンターで秋の卒業式・学位記授与式が行われ、、学士36名、修士53名、博士・法務博士162名、あわせて251名（女子79名）に学位が授与されました。

秋の式では外国人留学生が多いことから（114名）、今年から英語による式辞で行うこととし、平野俊夫総長から、「大阪大学で学んだ皆さんには、グローバルに活躍できるリーダーとしての資質と能力が備わっていることを誇りに思い、品格と責任を持って社会に進んでいただきたいと思います」と餞の言葉が送られました。

Creating harmonious diversity in a global society

2014 Osaka University Autumn Graduation Ceremony President's Address

Undergraduate and graduate students, as you take your next step from Osaka University, it is my great pleasure to wish you my heartfelt congratulations. Today represents the culmination of hard work and diligent study. As the president of Osaka University it is my distinct privilege to congratulate you on this the day of your Graduation Ceremony.

I also would like to address the parents and relatives, the supporters of your pursuit of knowledge and truth, and express my deep respect while offering them congratulations for the accomplishments we honor on this day.

Graduate students, today you receive your degrees. I imagine your hopes and dreams will grow as you follow each of your individual paths to success. Utilizing the knowledge and skills you developed at Osaka University, you will become international leaders in your field in various countries and regions, contributing to the future of your country and the welfare and advancement of human society. I am proud that you who have studied at Osaka University are prepared with the disposition and determination to become authorities in the global community, and that you have a sense of responsibility and dignity necessary to move forward in society.

A danger of globalization

The world you inherit is full of diversity – different languages, customs, cultures, peoples, religions, politics and countries. Economic activity on a global scale and the resulting human exchange has brought about dramatic new challenges to our very survival. Global issues such as climate change, energy shortages, food supply and population changes, as well as infectious diseases have become more complicated.

With such interconnected causes, it would be easy to see diversity as a main factor to our world's issues. Human society is replete with examples of strife caused by diversity of peoples and religions. History is full of conflicts arising due to our differences. From that perspective, diversity may be seen as a barrier to a global society.

I do not agree with this perspective. Diversity itself is the source of a rich human spirituality, a source which is a precious factor in the development of the future. It is precisely because of diversity that humankind advances, and with it we will overcome the obstacles that stand in the way of our future. Moreover, it will allow us to continue to develop our society.

Creating harmonious diversity

I believe that in order to live in a global society, we should understand, respect and preserve diversity, and moreover actively encourage it to stimulate innovation. Only with the "creation of harmonious diversity" will humanity ensure global peace and encourage economic and societal innovation. Globalization through the creation of harmonious diversity should be our ultimate goal.

The Osaka University at which you have studied is a center of scholarship. We support research to ascertain the true essence of things and strive to cultivate individuals with the ability to do the same. With the diverse strength of a comprehensive university we offer opportunities to study in a wide variety of fields. Take for instance the study of languages. Osaka University offers a diverse mix of 25 different language majors, leading Japan in the research and education of a variety of Asian languages.

Overcoming barriers brought about by diversity is vital in the global society. Scholarship, along with art, sports, and economic exchange, is a universal human language. We have the unique ability to utilize that universal language to remove barriers to harmony. Universities impart scholarship, a universal language resulting in person to person exchange, which maintains diversity while also overcoming its inherent obstacles. Therefore in the global society of the 21st century, I believe the new role of the university is to "create harmonious diversity through scholarship". In this way, universities, by "creating harmonious diversity," have and will make a profound contribution to the global society. You who have studied and researched at Osaka University will have an indispensable role in the new global society.

A mindset of sharing

How can we as individuals adjust our minds to encourage harmonious diversity? I believe that we must start by recognizing and respecting diversity, namely the importance of mutual understanding and respecting other cultures. For this, it is necessary to have the compassion and open-mindedness to put yourself in another's position and judge things from other perspectives. Coexistence and cooperation with others is important, and to do this you must know yourself and others. If you cannot answer "Who am I?" you will surely be unable to distinguish and respect others.

I believe this "mindset of sharing" is a factor that the global talent of the future must not lack. For the coexistence and co-prosperity of humankind's cultures and religions, the truth of this mindset must be understood, accepted and respected. This is the fundamental heart of the global society. First you must know yourself, love your country and understand and respect its culture. If you cannot first love yourself and your country and have pride in it, how can you respect other countries and cultures?

Much like DNA, individuals and organizations inherit knowledge based on history and early experience. When speaking of the future, I am ever mindful of the past. Starting today, you all share the common history of having studied at Osaka University. As graduates, you will be seen by society as those with singular talents. Expectations will be high and you will have a responsibility to society. An important part of knowing yourself is being aware of Osaka University. What kind of institution is it? On this day of your graduation, I would like you to consider for a moment Osaka University's past, the history of the institution that will forever shape your future.

The origin of Osaka University: "Tekijuku"

Toward the end of the Edo period, in 1838, OGATA Koan founded a private academy named "Tekijuku," with the goal of "helping the people of the world with the latest knowledge." It was housed in a small building, but it had a profound impact on Japan. It was also the origin of the Osaka University from which you graduate today.

More than 1,000 students were educated at Tekijuku from all parts of the country, studying texts on Western science and technology translated to Japanese. Notable leaders from a variety of fields were educated there, including FUKUZAWA Yukichi, who founded Keio University; SANO Tsunetami, who founded the Japan Red Cross; and OTORI Keisuke, who was active as a diplomat. Graduates of Tekijuku such as these went on to modernize Japan at the beginning of the Meiji period. Their influence is still felt to this day.

Osaka University echoes the words of OGATA Koan, "For people, for society, and for the pursuit of truth." We inherit the determination of the young scholars who studied at Tekijuku and the love of Osaka residents for scholarship.

Years after Tekijuku, locals played a key role in a transition that brought about our modern institution. Citizens calling for an "imperial

university in Osaka" lead to the founding of Osaka Imperial University in 1931. They were supported by the president of the Osaka Prefectural Medical School, KUSUMOTO Chozaburo – who later became the university's second president – and the Osaka prefectural governor, SHIBATA Zenzaburo. The sixth imperial university in Japan, under the leadership of the first president NAGAOKA Hantaro, consisted of two schools, medicine and science. In 1933 the Osaka Technical School became the School of Engineering.

A year later, a young scholar introduced an unproven theory about the existence of subatomic particles called "mesons." He was 27 years old, and an associate professor at Osaka Imperial University. His name was Hideki YUKAWA, and he received his doctoral degree from Osaka Imperial University in 1938 with his theory. In 1949, he became the first Japanese Nobel Laureate with the theory he put forth for his PhD thesis at Osaka Imperial University. Later in life he wrote about his time at our university, describing "something about being here makes everyone feel like working"[1]. Osaka University continues to foster the environment he described, one of open research that stimulates diligent study and exchange of ideas.

In the postwar era, with the inclusion of a School of Law and Letters, the framework of our current, comprehensive university began to take shape. Under the motto of "Live Locally, Grow Globally," Osaka University became a national university corporation in 2004 and merged with the Osaka University of Foreign Studies in 2007. We are now a modern, comprehensive university, a representative of the quality of higher education in Japan.

Much like those who studied at Tekijuku and brought about the new age in which we live during the disorder of the closing Edo period; much like Hideki YUKAWA who, influenced by the environment here, produced world-class theoretical research; so too should you, with brilliant dreams and true determination, pave the way for a bright 21st century.

The future of humanity falls to each and every one of you. You will become leaders in your respective fields and fulfil your duty in society; you will make meaningful advances in basic or applied research. This kind of achievement is well within reach for all of you, and it is the heritage of intellectual creativity long nurtured at Osaka University.

[1] Source: The Traveler, the autobiography of Professor YUKAWA

The dream of Osaka University: From "Tekijuku" to "World Tekijuku"

Osaka University is approaching its centenary in 2031. Our goal is to become a World Tekijuku by this time, a worldwide top-ten comprehensive research university, and to contribute to the global society by "creating harmonious diversity through scholarship". Osaka University is actively reforming internal organizations and systems to make this dream a reality by 2031.

Our goal is significant, and it will not be accomplished today or tomorrow. But we will focus on the current challenge, moving steadily towards our dream moment by moment, day by day. I encourage you to do the same. Never be discouraged by your distance from your dreams – focus on your current work and the dreams take care of themselves.

At the end of the Edo period, graduates of Tekijuku spread throughout the country to follow their dreams. So too must you use that which you have learned at this World Tekijuku and share your talents with the world.

"Dreams are meant to be achieved"

Believe in your dreams and live long, fruitful lives.

On this momentous day, as you take your next step from Osaka University, we wish you health, fortune and happiness.

Once again, congratulations.

September 25, 2014
Toshio HIRANO
President of Osaka University

From "Tekijuku" to the "World Tekijuku"

2014 Osaka University Autumn Entrance Ceremony President's Address

平成26年度 秋季入学式──総長告辞

2014年10月1日（水）、大阪大学コンベンションセンターで秋季入学式が行われ、大学院148名、学部40名あわせて188名（女子68名）が大阪大学の門をくぐりました。これまで各部局ごとに行われていましたが、阪大生としての一体感、帰属意識を高めるため、平成26年度から大学全体で行うこととなりました。また、秋入学は外国人留学生が多く（135名）、国際化に対応するため、式はすべて英語で行われました。平野俊夫総長から、「大阪大学で多様な学問を学び、自分の夢と未来に向かって進んでください」と歓迎の言葉が送られました。

Good morning.

I would like to extend a warm welcome to the newest members of our community at Osaka University. I would also like to offer my sincere congratulations to your family members, relatives and friends.

With hearts full of promise and possibility, today you begin your new lives as members of Osaka University. As President of the university it is my distinct pleasure to greet and welcome you today.

Tekijuku, the origin of Osaka University

I will begin by giving you a brief overview of the history of the institution at which you will spend the coming years. Toward the end of the Edo period, in 1838, OGATA Koan founded a private academy named "Tekijuku," with the goal of "helping the people of the world with the latest knowledge." It was housed in a small building, but it had a profound impact on Japan. It was also the origin of the Osaka University which you enter today.

More than 1,000 students were educated at Tekijuku from all parts of the country, studying texts on Western science and technology translated to Japanese. Notable leaders from a variety of fields were educated there, including FUKUZAWA Yukichi, who founded Keio University; SANO Tsunetami, who founded the Japan Red Cross; and OTORI Keisuke, who was active as a diplomat. Graduates of Tekijuku such as these went on to modernize Japan at the beginning of the Meiji period. Their influence is still felt to this day.

Osaka University echoes the words of OGATA Koan, "For people, for society, and for the pursuit of truth." We inherit the determination of the young scholars who studied at Tekijuku and the love of Osaka residents for scholarship.

Years after Tekijuku, locals played a key role in a transition that brought about our modern institution. Citizens calling for an "imperial university in Osaka" lead to the founding of Osaka Imperial University in 1931. They were supported by the president of the Osaka Prefectural Medical School, KUSUMOTO Chozaburo — who later became the university's second president — and the Osaka prefectural governor, SHIBATA Zenzaburo. The sixth imperial university in Japan, under the leadership of the first president NAGAOKA Hantaro, consisted of two schools, medicine and science. In 1933 the Osaka Technical School became the School of Engineering.

In the postwar era, with the inclusion of a School of Law and Letters, the framework of our current, comprehensive university began to take shape. Under the motto of "Live Locally, Grow Globally," Osaka University became a national university corporation in 2004 and merged with the Osaka University of Foreign Studies in 2007. Through the merger, we are now a modern, comprehensive university, a representative of the quality of higher education in Japan.

One of the many intellectuals influenced by our institution was a young associate professor in the early years of Osaka Imperial University. He introduced an unproven theory in 1934 about the existence of subatomic particles called "mesons." He was 27 years old, and his

▶2014年10月1日　平成26年度 秋季入学式 総長告辞 より

name was Hideki YUKAWA. He received his doctoral degree from Osaka Imperial University in 1938. In 1949, he became the first Japanese Nobel Laureate with the theory he put forth for his PhD thesis at Osaka Imperial University. Later in life, he wrote about his time at our university, describing "something about being here makes everyone feel like working."[1] Osaka University continues to foster the environment he described, one of open research that stimulates diligent study and inquiry.

Last May, Osaka University's Graduate School of Science received the actual blackboard that Professor YUKAWA regularly worked with at Columbia University in the United States. Today, the blackboard is used by students and faculty, a lasting symbol of the professor's impact on our academic culture.

[1] Source: The Traveler, the autobiography of Professor YUKAWA

Shining forth into the 22nd century as World Tekijuku

Osaka University will continue to grow under its current motto, "Live Locally, Grow Globally." We inherit a history of rigorous scholarship from Tekijuku, built 176 years ago. We have nurtured many eminent scholars, educators, and intellectuals, as well as key government and business leaders. Osaka University will celebrate the centenary of its founding in 2031. As the World Tekijuku, Osaka University aspires to become one of the world's top 10 research universities by that time. 176 years ago, young minds were first shaped at Tekijuku from all over Japan. They spread throughout Japan with new knowledge and skills and paved the way for the new age of the Meiji Restoration. In the same way, researchers, students, and individuals with a strong passion for learning will gather together at Osaka University, the World Tekijuku, to learn and research. They will then share their talents with the world, much like their predecessors. This will be Osaka University's contribution to global society: the creation of harmonious diversity through scholarship. I truly hope you will remember your enrollment in Osaka University in 2014, our first year as the "World Tekijuku." You are writing a new page in the history of Osaka University with us. Let's make our dreams come true.

My talk today is divided into three parts.

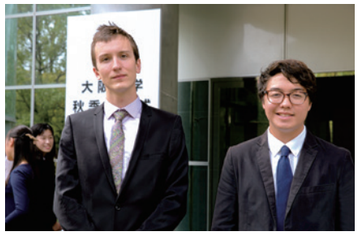
The importance of asking, "why?"

First, I invite you to consider the importance of "asking why."

I am sure there were things you wondered about as a child, but, as you grew up, you lost interest, thinking, "That's just the way it is." Perhaps you wondered, "How did the universe begin?"; "Where and how did life come about?"; "Why do other countries and religions exist in the world?"; and "How do these things impact the current world situation?" There are countless questions that we cannot fully answer. Possibly we stop wondering because some questions seem too simple or common. A university is a place where you can find the answers to these questions, questions that we cannot answer with previous knowledge alone. It is a place where you uncover hidden causes, or solve the as-yet unsolvable. You and you alone are to find the answers. It is a place where you can share your doubts and find your answers. The intent of all scholarship is to ascertain the true essence of things. The place to practice scholarship is a university.

Consider the so-called "accidental" discovery of the first antibiotic. Sir Alexander Fleming, the famous biologist, devoted himself to the development of drugs for infectious diseases. It is said that one day he noticed germs were not growing near a fungus that was mixed in a culture dish by accident. Usually, researchers would consider this a fluke and dispose of the dish, but he wondered if something in the fungus might have prevented the germs from growing. He named that putative component "penicillin." Later, Howard Walter Florey and Ernst Boris Chain read Fleming's paper and succeeded in purifying penicillin in 1940. Fleming, Florey, and Chain won the Nobel Prize in Physiology or Medicine in 1945, and the discovery of penicillin has since saved incalculable lives worldwide.

This penicillin story is commonly framed as a chance discovery; however, I see it as a testament to the importance of keen observation and intellectual curiosity — these were the true qualities that led to this discovery. Intellectual curiosity and the questioning of common wisdom as motivators for basic research bring about the technological innovation necessary to preserve human society. It results in advances such as innovative products and state-of-the-art medical care. In addition, it plays an important role in encouraging dreams and hope in society. Though important, there is more to life than



merely having clothes to wear, food to eat, and a roof over our heads. As art enriches our hearts, basic research enriches our hopes and dreams for the future. The power of a university resides in its ability to open the way to the future and inspire people to dream. The driving force is intellectual curiosity that urges us to never stop asking, "Why?"

Ascertaining the true essence of things and moving towards the future

This brings me to my second and related point, about the necessity of "ascertaining the true essence of things and moving towards the future."

We face an excess of global-scale changes. Modern society, rooted in material civilization and born of the industrial revolution, has radically impacted us all in return for human prosperity. We struggle with the depletion of fossil fuels and the risks of nuclear power. Environmental problems such as global warming and the spread of infectious diseases pose new challenges. Moreover, developments in medicine and improvements in the social environment have resulted in an exploding world population. In addition to food supply issues, in developed countries in particular, a rapid response to aging societies is needed.

Your task will be to perceive and adapt to these global shifts. I believe society is bettered by those who ascertain the true essence of things, the true essence hidden in complex problems; those who can take initiative in solving problems, unhindered by traditional approaches. The ability to ascertain the true essence of things is the ability to find key factors and mechanisms in perceivable phenomenon. It is for this reason that universities conduct advanced research and provide highly specialized education.

Furthermore, we must consider a shift in perspective. Relinquishing the idea of conquering nature with science and technology, we should live in harmony with the environment. Often we have conducted bioscience and medical research with the belief we somehow could sidestep unavoidable issues such as aging,

disease, and death. This outlook must change. Our goal should be to enjoy life while dealing with these diverse problems. In this way, we need to see things not from a single perspective but from many.

One of these perspectives involves the big picture. A common saying invites us to "see the woods for the trees." This is true - doing something good for one of the trees is not always good for the forest as a whole. Even if a measure for a particular tree is optimal in the short term, ignoring long-term, big-picture effects could have lethal consequences for the forest, resulting in the loss of all the trees. Each tree depends on the forest as a whole.

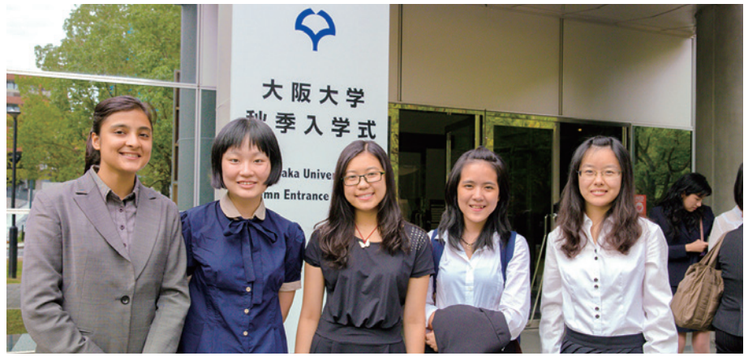
A liberal arts education promotes this manner of multifaceted thinking, as it assists students in acquiring a broad knowledge base and the flexibility to apply it in novel ways.

In the globalized world of the future, our earth will continue to be a smaller place. We will need to build relationships, cooperate and collaborate with those with a multitude of languages, cultures, religions, and nationalities. To adapt in such a global society, we must cultivate "openness," by which I mean the ability to see things from the perspective of others. Openness and a mindset of sharing will allow us to better understand and respect our world's cultures and philosophies.

Creating harmonious diversity through scholarship

Third, I believe that this openness is nurtured at universities, through the universal language of scholarship.

Diversity has been a driving force in the development and enrichment of human society; still, human society is replete with examples of strife caused due to differences between peoples and religions. The scholarship at universities, a kind of language common to all humankind, has the power to overcome such discord. Much like art and sports, academic scholarship facilitates communication and mutual understanding. Scholarship is a means of international friendship, a way in which we can expand our circle



ever outward. In the community of the university, bonds formed with those from different backgrounds develop over time to bring more harmony to society.

Universities must strive to contribute to a new community where people live in harmony despite their differences. The scholarship at universities can act as a universal language and usher in an era of a harmonious global community. I believe this is the mission of universities in the 21st century. In this way, universities must take initiative in creating and contributing to a multicultural society.

This is why I urge you to travel abroad and interact with people in different countries, and why Osaka University is proud to offer a variety of programs for that very purpose. I hope you take steps into our global society and exercise your fluency in the universal language of scholarship. Make the most of these opportunities to do your part in bringing about an era of harmonious diversity in our global society. That is your vital role in the 21st century.

Reaching the top of a mountain

Finally, a personal life lesson I would like to share.

You are now at the summit of a massive mountain, your admission to Osaka University. What are you thinking having conquered this mountain? Whenever I talk with students or young people, I stress the value of reaching the top of the mountains we climb in life.

We do not know how high the mountains in our lives are before we find ourselves at the peak. What matters is that from this new vantage point we can see wider and further than before, regardless of the height of the mountain. Here, we look back on the path which led us and forward to the mountain that awaits us next. We may not see signs as we climb the mountains in our lives. Nobody knows how far they are up the mountain — whether they are only halfway there or nearly at the top. But once we make it to the peak, then and only then do we know that we have reached it. The top of the mountain suddenly unfolds before those who have persistently believed and made the effort — much like the discovery of penicillin by Sir Fleming, 86 years ago.

I am sure that now you feel the joy and momentousness of your achievement atop this mountain as you survey the view stretching out before you — the future. I hope you will make the effort to climb new mountains one after another, reaching every summit you choose.

Dreams are for achieving

I believe your future holds infinite possibilities. Today is an exciting day — hold on to this excitement and make your dreams come true. At the 100th anniversary of Osaka University's founding in 2031, you will have inherited the world. I hope you make every effort to achieve our great dream to make Osaka University one of the top ten research universities as the World Tekijuku. Achieving dreams is difficult, and that is why they are called dreams. A dream is not reality and cannot be achieved easily. So it is only too easy to think that achieving dreams is impossible and, thus, give up. If we hold on to our dreams and continue to make every effort to achieve them, one day, those dreams will come true.

Remember "Dreams are meant to be achieved."

Allow me to close by wishing you all good fortune, and once again, congratulations and welcome to Osaka University.

October 1, 2014
Toshio HIRANO
President of Osaka University

▶2011年12月発行　大阪大学ニューズレター54号 掲載　総長と学生の対話 より

研究の原動力は知的好奇心だ

物事の本質を見極め、世界に羽ばたく

平野俊夫総長は就任以来、基盤研究重視の方向を打ち出し、「22世紀にも輝き続ける大学」を目指している。それを可能にするのは、いま勉学・研究にいそしんでいる一人ひとりが知的好奇心を追求し、物事の本質に迫ることだという。平野総長を囲んで、大学院生たちが研究の面白さ、研究者の生き方などを話し合った。

▶総長と学生との対話

平野 俊夫　大阪大学総長
廣部 祥子　薬学部 6年生
伊與田（いよた） 宗慶　工学研究科博士後期課程 マテリアル生産科学専攻1年生
樋口（まさみち） 騰迪　文学研究科博士前期課程 文化表現論専攻（音楽学）2年生

大阪大学を選んだ理由は?

平野　今日は大阪大学で学び研究している皆さんに、日ごろ感じ、考えていることを語ってもらいます。まずは自己紹介から。

伊與田　僕は工学研究科マテリアル生産科学専攻に所属し、簡単に言うと金属をくっつける溶接の研究をしています。構造化デザイン講座プロセスメカニックス領域で、特に自動車のボディーなどの抵抗スポット溶接という、点でくっつけていく溶接の強度について研究しています。

僕の場合は、5年制の工業高等専門学校から大阪大学の3年次への編入学です。明石高専には大阪大学出身の先生がいらっしゃって、親しみやすく面白い方々だったので、こういう先生になれたらいいなと思いました。

廣部　私は生物が好きで、総合大学の医療系を志望していました。母が薬剤師ということもあって薬学部に入学しましたが、高校の担任の先生が大阪大学の理学部出身で、やっぱり面白い方でした。

私は、薬学部が6年制と4年制に分かれてからの第1期生です。現在6年生で、医学部の先生にご協力いただいて「貼るワクチン」の臨床研究に携わっています。「皮膚内溶解型マイクロニードル」という細かい針を有するものと、湿布状の「親水性ゲルパッチ」の2種類に関して、ヒトにおける安全性を確かめるための臨床研究を進めています。今は研究が面白くて、薬剤師の仕事をする気はなくなりました。いちばん好きな学問領域が免疫ですので、今日は平野先生にお会いできて光栄というか、緊張しています。

樋口　僕が大阪大学に決めた理由ははっきりしていて、4年制の総合大学で音楽学の講座があるのは大阪大学だけだったからです。今、文学研究科文化表現論専攻で、主に19世紀末から1930年代ぐらいまでのフランス音楽を研究しています。また、当時の音楽が日本にどういうふうに入ってきて、それを日本人がどう受け入れて展開していったか、大正から1960年代あたりの音楽から見た文化史を含めて明らかにしたいと思っています。

平野　私はクラシック音楽やオペラが好きなのですが、20世紀初頭のフランス音楽といえば、例えば作曲家では?

樋口　ポピュラーなのはラヴェルやフォーレですが、僕はヴァンサン・ダンディや「フランス6人組」と呼ばれるグループなど、ちょっとマニアックな音楽が好きです。フランスに留学してダンディに学んだ高木東六に注目して修士論文を書いています。

平野　ほう。実際に音楽学を専攻していて、総合大学で学ぶメリットを感じていますか。

樋口　芸大や音楽大学など単科大学で音楽学を学ぶよりも、美学や哲学、西洋史や東洋史、文学などと横のつながりを持ちながら追究できることに大きな意義があると思います。学会などで発表を聴いても、総合大学で音楽を考えるほうが、研究のスケールが大きいというか、他の専門分野の人にも刺激を与えられるような研究になり得るのではないかと感じています。

授業が面白くて目からウロコ

平野　大学院で研究に熱中するのは当然ですが、学部生時代に印象的な授業はありましたか。

伊與田　僕は編入学でしたから、すぐに専門の授業が始まりました。高専では溶接の工場実習を経験しましたが、大学では一口に溶接といっても、力学的な強度や材質の変化、プラズマの現象など、研究分野がそれぞれ奥が深く、とにかく授業が面白くて、こんなこともあるんだと驚きの連続でした。

溶接は、建物、自動車など、身の回りにいっぱい使われています。先生が実例を挙げてくださって、ここはうちが携わっているとか、研究したことが応用されているとかいう話を聞いたときに、すごくかっこいいなと思いました。ある意味でものすごくダサイものが、ものすごくかっこよくなり、まさに目からウロコでした。溶接に対して誇りを持つようになり、最近は街を歩いていても溶接を見ると、ああきれいやなあと、見とれてしまうほどマニアになっています。

平野　大阪大学にはその分野でトップレベルの接合科学研究所がありますし、最近は構造物の耐震の面からも注目されていますね。廣部さんと樋口さんは、専門以外の授業も受けたのでしょう。

廣部　大学に入り、研究分野の多さ、学問の多さにびっくりしました。宇宙を対象にしても、宇宙空間の話だったり、微小な物理学的な話だったり、宇宙の中の生命体の話だったり。総合大学でいろんな先生に出会えたのはよかったと思います。

『THE CELL』という細胞生物学の分厚い教科書の奥の深さも衝撃的でした。問題を解けば解答が得られた高校までの授業から一転して、何か奥が深くてよく分からないけれど、自分の生体で起こっていることが書いてある。それもまたショックでした。

樋口　専門である音楽学の講義以外では1年生の後期にドイツ文学の入門的な授業で、カフカを研究されている三谷研爾先生が、ドイツの文学・文化が世界や日本でどういう展開

総長×学生対話

▶2011年12月発行　大阪大学ニューズレター54号 掲載　総長と学生の対話 より

総長×学生 対話

学問に終わりはありません。
常に知的好奇心を持ち続けて、
パズルを解くようなものです。

伊與田さん

廣部さん

樋口さん

平野総長

をしたのか、熱狂的な口調で話されたのが印象的でした。ドイツ文学が好きな人が好きなことを好きなように、しかも学問的な体系に基づいてアウトプットしたらこうなるのかと思いました。

僕はずっと音楽が好きで、自分なりに音楽を聴いたり本を読んだりしてきたのですが、音楽学という学問がいったいどういうものなのかイメージできていませんでした。2年生になって伊東信宏先生、現在名誉教授の根岸一美先生の授業を受けたとき、音楽学とはこういう学問なのかと目を開かせていただきました。

常に知的好奇心を持って挑戦

平野　研究していて感じる喜びや難しさを、もっと聞かせてください。

伊與田　溶接もそうですが、ものづくりは職人さんの勘に頼っている部分があり、現場における溶接作業や、製品化への応用は企業の方にはかないません。では大学では何ができるかということになります。僕は、溶接のメカニズムを明らかにする基礎研究が大事だと思っています。

自分の研究テーマである抵抗スポット溶接をみても、どんどん鉄の品質が上がって高強度化が求められているなかで、今までと同じような評価指標でよいのか、もう一度見直したい。そういう基礎研究となると、何か自分でゼロから生み出さないといけない、新しい考え方を示さないといけないと頭を悩ましているところです。ドクターの3年間で自分が新たな指標を完全に作り上げられなくても、その種を作りたいと思っています。

ドクター1年生が何を言っているのだと思われるかもしれませんが、実験していると、なるほどということが少しずつでも出てくることがあります。うまくいかないことが多いのですが、いい結果が出たときはガッツポーズですね。学会などでデータを出したときに海外の人からも面白いとか言われるとうれしくて、もっと何か分からないかと考える、そういうことの積み重ねですね。

平野　伊與田君の言うとおりだと思います。人の知らないこと、分かっていないことを明らかにするのが、学問、研究です。君は研究者としての経験は浅いかもしれないけれど、ノーベル賞を受賞した人でもそれは同じで、何か一つ分かったらまた次の分からないことに挑戦します。学問に終わりはありません。常に知的好奇心を持ち続けて、パズルを解くようなものです。

私の場合は生命科学だから、何か新しいものを創るというのではなくて、人間もあらゆる生物も存在し、生命活動を営んでおり、既に仕組みが作動しているわけです。生命科学はそこに潜んでいるメカニズムを明らかにしようとするが、その過程で知的好奇心が大切であることや、そこにロマンがあることでは他の学問と共通です。

点を線でつなぎ言語化したい

廣部　ワクチン抗原を新しい製剤として開発するのが、私のメインの研究ですので、新しいものづくりと基礎研究の二つが重なっています。結果が間近に見られて、抗体価が上がったときは、その瞬間に先生のところへプレートを持ってダッシュし、「出ました、出ました」と報告すると、先生がにこにこして「やった、やった」と(笑)。そういう喜びは、何ものにも代えられません。

一方、皮膚でどのような免疫反応が起こっているのか、私たちの製剤でどうなるかということも含めて、もっと解明していかなければなりません。免疫学に関するさまざまな因子がどんどん発見されている現在、私に何ができるのか、何を見いだせるのか、そのために基礎の勉強をどれだけしなければならないかも分かりませんが、乗り越えていきたいところです。

樋口　音楽学に限らず、人文科学には共通の性格だと思うのですが、ダイレクトに即効性を持って世の中の役に立っているわけではありません。しかし、音楽が嫌いという人はあまりいないなかで、専門家として何をしなければいけないのかを考えています。

そこで、人々が興味のある「点」を我々が「線」でつなぐことができないかと思っています。例えば、ベートーヴェンの「運命」の「ダダダダーン」というモチーフ。あれは200年以上たっても、今日の作曲家にも影響を及ぼしている部分があるわけです。漠然と浮かび上がっているものを我々が線でつないで言語化していく作業が面白い。ただ音楽を言葉で語ることの限界は、どうしても付きまといます。言葉にしてしまったときにこぼれ落ちていくものがあっても、感覚的に感じ取っているものを代弁していくというのが専門家の役目かと思います。

本質に迫る研究で社会に貢献

平野　どの分野であれ、研究者は知的好奇心に生きる者です。ただそれだけでなく、物事の本質をつくこと、本質に迫ることが大事です。何か一つの本質につき当たって、自分が明らかにしたことをジェネラライズし、いろんな現象が説明できるようなものにつながったら、それは社会的な広がりのある大きな研究になります。そういうことを伝えたくて、私の研究室のホームページには、「物事の本質を見極め、世界に羽ばたく」という標語を掲げ続けています。

ここで、皆さんの将来の希望や目標を聞かせてください。

廣部　薬剤師の仕事を通じて患者さんのお役に立てると思っていたのですが、社会に貢献する薬に関する研究の大切さを実感できました。製剤開発から基礎研究までかかわらせてもらって、研究に喜びを感じ、大学院で研究を続けることにしました。

6年制だから学べたことが多くあり、附属病院や薬局での臨床実習も、研究室にこもるような基礎研究も経験しました。それを社会に還元し、大阪大学の薬学部の6年制がいかに充実しているかを伝えていきたいと思っています。

伊與田　僕は工学研究科ですので、最終的にはエンジニアリングにしていかなければいけないと考えています。ただし、企業と共同研究をする場合、企業からこういうことをやってください、分かりました、やりました、というのでは、大学で研究する意味がないと思っています。偉そうなこと言っていますが、大学の研究で何ができるのかというと、やっぱり先生がおっしゃったように本質をつきつめて、そこから面白い種を作り、種をまいていくことが大事なんじゃないでしょうか。本質をついた研究成果を発表することで、企業とつながり、さらに企業と企業がつながり、溶接が鉄と鉄をつなげるように、人と人とをつなげてどんどんネットワークを広げていきたいと思っています。

溶接の強度がそんなに強くなくても、くっついているからいい、建っているからいい、という考え方があるのも事実です。それでも、物事の真理をつくことでそういう考え方をちょっとずつでも変えていけないかなあと思いながら、大学に残って研究しています。

知的好奇心とロマンを追求

平野　私が思っていることを、すべて言ってくれましたね(笑)。大学の本来の使命は基盤研究にあり、そこから10年先20年先50年先の産学連携につながるようなことをやっていくのは、ロマンを追求するだけでなく、それはまさに大学の社会貢献の一つです。

社会貢献という意味では、工学部や医歯薬系は、製品化や病気の治療を通じて出口は社会につながっています。しかし、理学部や文学部などは社会との接点が見えにくいのですが、人間は衣食住が足りるだけで心が満たされるものではありません。知的好奇心を追求し、ロマンを追い求めるのが人間です。基盤研究には、将来の応用研究や産学連携につながる面とともに、ロマンを追求し社会に発信する、世の中に夢を与えるという面もあります。

樋口　平野先生がおっしゃったように、また「人はパンだけで生きるものではない」と聖書にあるように、パン以外のものを世の中に生み出していくことは、大学の大きな役割だと思うのです。もちろん、パンを提供することは本当に大事なんですが。

僕は将来、専門的な音楽学の研究だけでなく、音楽批評を書いたりしていくつもりですが、それを読んで面白いと思っていただけたらいいし、こいつはアホかと徹底的に批判されてもいいのです。批判する過程でその人の中に気づきや新たな理論が生まれてくると思いますから。もし、僕が本質をつけたら、その本質を土台にして何か違うところに思考を働かせて応用していってもらえるかもしれません。受け取る人がさらに豊かに発想を広げていけるようなものを提供できたらいいのかなあと思っています。

平野　皆さんのお話を聞いて、大阪大学の学生さんは素晴らしいと再認識するとともに、大阪大学の輝く未来を確信しました。学生の皆さんをはじめ一人ひとりの大学構成員の皆さんと力を合わせて、22世紀にも大阪大学が輝き続ける基盤を築いて行きたいと思います。最後に、私がよく学生の皆さんに言っているこの言葉で締めくくりたいと思います。私になくて君たちにあるものは、未来という無限の可能性です。

▶2014年9月発行　大阪大学ニューズレター65号 掲載　阪大なでしこ 世界にチャレンジ より

阪大なでしこ

トビタテ! 留学JAPAN
その経験が、未来の自信。

官民協働海外留学支援制度～トビタテ! 留学JAPAN 日本代表プログラム～ 大阪大学から7人が留学

世界にチャレンジ

日本人学生の海外留学の後押しのため、今年度から、官民協働海外留学支援制度～トビタテ! 留学JAPAN日本代表プログラム～がスタートした。多様な活動の認定と返還不要で従来の2倍の金額の奨学金、事前・事後研修、留学生ネットワークなど手厚いサポートが大きな特徴だ。第1期の募集には全国から221校・1700人の学生が応募。全国で323人、阪大からは7人の女子学生が選ばれた。平野俊夫総長が世界にチャレンジする「阪大なでしこ」たちを激励した。

女子7人は阪大の元気の象徴

総長　「トビタテ! 留学JAPAN日本代表プログラム」の最終選考を勝ち抜いたのは、全員女性なのですね(笑)。阪大の女子学生は本当にたくましいと思います。皆さんは阪大の代表、日本の代表として世界にチャレンジされるわけで、大いに期待しています。今日は留学に関する目標や今後の夢などをうかがいたいと思います。簡単な自己紹介からお願いします。

相川恵梨子　医学部5年です。「自然科学系、複合・融合系人材コース」で採用されました。英国のキングス・カレッジ・ロンドンに来年1月から3カ月間留学し、附属病院遺伝子皮膚病グループで実践を学ぶ予定です。春休みとクリニカルクラークシップ(臨床参加型実習)の期間を利用して、留学します。

齊藤小夏　外国語学部3年、ビルマ語専攻です。「新興国コース」で今年12月から10カ月間、ミャンマーのヤンゴン外国語大学ビルマ語学科に語学留学します。

平野美優　外国語学部3年、ロシア語専攻です。私も「新興国コース」で、8月から12カ月間、ロシアのサンクトペテルブルク大学ジャーナリズム・マスコミュニケーション学部に留学します。その後ウズベキスタンで、日本語教育など草の根交流を行っている「リシタンジャパンセンター」での1カ月間のボランティアに携わる予定です。

森裕美　外国語学部3年、英語専攻です。「世界トップレベル大学等コース」で、9月から9カ月間、米国・カリフォルニア大学サンタバーバラ校・教養学部コミュニケーション学科で、交換留学生として学ばせていただきます。

対馬ひとみ　法学部3年、国際公共政策学科に所属します。私も「世界トップレベル大学等コース」で、9月から8カ月間、カナダのマックマスター大学・社会科学部に交換留学させていただきます。

中嶋沙蘭　同じく法学部3年、国際公共政策学科です。「多様性人材コース」で、来年1月から1年間、米国・ジョージア大学・国際関係学部もしくはテキサスA&M大学国際関係学部で交換留学生として学ぶ予定です。

北岡志織　文学研究科修士2年、文化動態論専攻です。外国語学部出身でドイツ語を専攻していました。「多様性人材コース」で、9月から11カ月間、ドイツのハンブルク大学・人文科学研究科ドイツ文学専攻に所属しながら、Bluespots Productionsという演劇カンパニーでインターンとして働きます。

留学で何を学ぶか

総長　阪大の原点は、緒方洪庵の適塾です。そして今、世界から人を集め交流する「世界適塾」の実現と、学問による調和ある多様性の創造をめざしています。皆さんも今回のチャレンジで、きっとそのような体験ができるものと信じています。留学に向けて皆さんは、どのような夢を持っていますか。

相川　MD研究者育成プログラム(未来の医療を切り開く医学研究者を育成する)に所属しています。キングス・カレッジ・ロンドンを選んだのは、病院と研究所、医師と医師以外の研究者が一体で活動しているという先進的な研究・治療システムを、ぜひ見学したいと思ったからです。

最先端医療イノベーションセンター棟

▶2014年9月発行　大阪大学ニュースレター65号 掲載　阪大なでしこ 世界にチャレンジ より

トビタテ! 留学JAPAN
その経験が、未来の自信。

応援団から阪大なでしこたちにエールが送られました

相川恵梨子さん　平野美優さん　齊藤小夏さん　森 裕美さん　北岡志織さん

平野俊夫総長

中嶋沙蘭さん　対馬ひとみさん

皆さんからは自分の夢を自分でつかみ取り実現するエネルギーを感じました

齊藤　ビルマ語専攻なので、ミャンマーで学ぶことによって、しっかりとビルマ語を話せるようになりたいと思いました。またミャンマーは、軍事政権による民主化が図られているようですが、現在どのような状況なのかを自分の目で確かめたいです。私のビルマ名(ビルマ語専攻の学生はビルマ名を授与される)は「スーチー・シエ」なので、アウンサンスーチーさんにも会えたらうれしいです(笑)。アジアが好きなので、将来は東南アジアに関わるような仕事ができればと考えています。

平野　サンクトペテルブルク大学でジャーナリズムを学ぶのは、もともと国際協力に興味があり、途上国などでは市民の声が政府に届いていないことに注目したからです。アルバイトをして毎年海外に出かけていて、これまでにイギリスやバングラデシュにも行きました。今回の留学先としてロシアを選んだのは、中央アジアやチェチェン紛争に興味があったからです。

森　コミュニケーションについて学べる留学先を探しました。阪大の外国語学部でもコミュニケーション関連の科目はありますが、私は今、カリフォルニア大学からの留学生のサポーターをしていて、彼らのエネルギーに圧倒されています。そのようなエネルギッシュな大学に身を置いて勉強し、将来は自分の学んだことを大学や社会に還元できればと思っています。

対馬　主に国際関係に興味があり、国際公共政策学科でも紛争などについて学んでいて、カナダでは「平和学」を中心に勉強したいと思っています。カナダは「人種のモザイク」と言われるように移民が多く、多様な意見や考えが存在する国。そのような国の大学で、広い視野を持って平和学を学べたらと思いました。

中嶋　高校生の時(2010年)、エジプトのカイロで開催された「平和の祭典アートマイルMURAMID展」に日本ユースとして派遣され、楽しく魅了されました。今ゼミなどで地域紛争について学んでいますが、将来はパレスチナなど中東の平和構築に貢献したいと思っています。そのためにも、中東に影響力を持つアメリカの大学で、アメリカの外交政策について学びたいと考えました。

北岡　ドイツ語をツールとして自分にできることを考えた結果、ドイツ現代演劇を研究しておられる市川明先生の演劇学研究室に入り、演劇の理論と実践を学びました。また今年2月、ドイツのアウグスブルクで行われた国際的マルチメディア演劇プロジェクトに参加し、字幕やドイツ・アメリカ・日本(阪大)の3劇団のアテンドスタッフを務めました。現代劇と能を融合させた市川先生演出の作品は高く評価され、その時、演劇を通して文化交流ができるのではと感じ、ドイツの大学で学びながら演劇カンパニーで研修しようと思いました。

阪大生はもっと異文化体験を

総長　皆さんしっかりしていて、非常に頼もしいですね。今回の留学以前にも海外経験が豊富ですし、皆さんのような学生がいれば、阪大は必ず世界トップ10になれると感じます。ところで皆さんは、なぜ「トビタテ!留学JAPAN」に応募しようと思ったのですか。阪大生がもっと多く留学するためには、どうすればよいと思いますか?

森　「トビタテ! 留学JAPAN」の1期生ということで、何か新しいことができるのではないかという思いがありました。それに奨学金など金銭的なサポートも大きな魅力でした。

齊藤　外国語学部の学生は、留学への意欲が強いのが特徴です。キャンパスや学部を超えたつながりがあれば、男子学生を含むもっと多くの学生が応募するのではないでしょうか。

北岡　今回の応募にあたり、文学部の国際連携室に毎週のように通い、すごくお世話になりました。親身になってサポートしてくださる職員の皆さんがいて、経済的にも手厚いサポートがあるのに、この留学制度を利用しないのはもったいないと思います。そういうサポートがあることをもっと知ってもらえたらと思います。留学には不安もありますが、得られるものの大きさを考えるとワクワクします。

夢を自分でつかみ取る

総長　皆さん、留学に対する本気度が違いますね。阪大のキャンパスにいても多様な知識は得られますが、「百聞は一見に如かず」。海外に行き、こういう考え方があるのか、こういうことが世の中にあるのかという異なる視点を得ることはとても大事です。将来どのような分野に進むにしても、いろいろな見方を知ったうえで、これが正しいという本質を見極めていってほしい。それは、皆さんの将来にとっても次世代の社会にも大切です。不可能と思われることも、挑戦し続けていると必ず現実になります。皆さんからは、自分の夢を自分でつかみ取り実現するエネルギーを感じました。頑張ってください。

第2期生の募集が10月初旬に行われる予定です。次回は阪大の男子学生も大勢応募して採用されるよう、ぜひ皆さん、どうすれば採用されるかというメソッドを含めて、大いに他の学生にも宣伝してください。

全員　今日はありがとうございました。

夢は叶えるためにある。

Gagus Ketut Sunnardiantoさん　　Sastia Prama Putri助教

インドネシアと日本——互いの文化をリスペクトし調和ある多様性の創造に取り組む

大阪大学の学生と教職員が、学問による「調和ある多様性を創造」することに努力しているなか、7月7日(火)、Sastia Prama Putri助教(工学研究科)とGagus Ketut Sunnardiantoさん(基礎工学研究科博士後期課程2年)が平野俊夫総長を訪ね、お二人の今までの取り組みについて、平野総長と3人で懇談が行われました。日本の高等教育を海外(特に母国のインドネシア)で推進するなど、その取り組みについてお二人に語っていただきました。

英語版

インドネシア語版

Putri助教は現在、工学研究科 福崎ラボで研究を行っていますが、アジア人材育成のための領域横断国際研究教育拠点形成事業(CAREN)のメンバーでもあり、どちらも日々努力しています。さらに、CARENのメンバーとして、インドネシアの中でトップクラスの大学と言われているバンドン工科大学生命科学技術学研究科 (ITB, インドネシア)と大阪大学とのダブル・ディグリー・プログラムを設立させることに貢献しました。

元大阪奈良地域インドネシア学生協会長のSunnardiantoさんは現在、Taiyo no Indonesia Foundationの会長として日々努力しています。Taiyo no Indonesia Foundation(たいようのインドネシア・ファンデーション)とは、インドネシアの遠隔地の学校に学資援助や優れた高校生に奨学金を提供する協会です。そのために、近頃、Sunnardiantoさんが19人のインドネシア人の学生や卒業生から日本でのサクセス・ストーリーを編集し、「Living the Dream in the Land of Sakura: Anthology of Inspirational Stories」という本を英語とインドネシア語の2ヶ国語で出版しました。この本は現在、インドネシアで発売されていて、この本の売り上げのすべてがTaiyo no Indonesia Foundationを通じて、インドネシアの恵まれない学生たちに提供されます。これまで、Taiyo no Indonesia Foundationがサポートした小学生は約100人で、1年間の奨学金が提供された中学生や高校生は25人近くいます。

お二人に今までの取り組みをご紹介いただいた後、いろんなテーマについて3人が語り合いました。将来の夢は何かと聞かれたPutri助教、「阪大で勉強をするという、最初の夢はもう叶いましたので、次は阪大の正式教員になる夢を叶えることに努力しています」。Putri助教と阪大との関わりも、10年以上前からのもので、学生としても、職員としても、そしてCARENのメンバーとしても、非常に長いです。インドネシアの大学や研究機関の一員になって、インドネシアの人々に教育を推進することがSunnardiantoさんの夢です。お二人の夢を聞いた平野総長は「夢は叶えるためにある。叶わなければ、夢は変わらず夢のままである。だが、夢が叶うまでのプロセスも大事だ。人生を充実させるものである」と、その夢が人生に必要なものだと励ましました。

世界が狭くなり、その結果、暮らす多様な人々がお互い接する機会が多くなりました。かつて遠く離れていた人類の多様性が集約されつつある情報化時代の今、お互い相手の文化をリスペクトすることが今までよりも必要であるという点で3人の意見が一致しました。Putri助教が属している研究所では、ほとんどのラボが現在English Onlyになっているそうです。特にPutri助教の授業では、英語での議論などが行われていて、まさに多様な学生たちがポジティブに語り合える場づくりを行っています。Taiyo no Indonesia Foundationの第一作目の成功につづき、Sunnardiantoさんは、現在第二作目を考えているとのことです。次の作品ももちろん、日本の高等教育を推進することや、インドネシアの人々を援助することに貢献するでしょう。

最後に、平野総長が再び、大阪大学の一つの目標であり、そして人類の生存に必要な要素である「調和ある多様性を創造」することに貢献するPutri助教とSunnardiantoさんの今までの取り組みを称賛しました。これからのお二人のご活躍が一層期待できるに違いありません。

Dreams are meant to be achieved.

Promoting Japanese Education and Research Abroad for Indonesian Students

In a world of increasing globalization, Osaka University students, faculty, and staff are hard at work in their efforts to promote harmonious diversity through scholarship. Assistant Professor Sastia Prama Putri of the Graduate School of Engineering and 2nd year Ph.D. student Gagus Ketut Sunnardianto of the Graduate School of Engineering Science met with Osaka University President Toshio HIRANO to talk about their individual efforts in promoting education in Japan overseas, specifically in their home country of Indonesia.

Dr. Putri, currently an assistant professor in the Fukusaki Laboratory of the Graduate School of Engineering at Osaka University, is also a member of the Center for the Advancement of Research and Education Exchange Networks in Asia (CAREN). She contributed to the establishment of the double-degree program between Osaka University and Institut Teknologi Bandung (ITB), a top university in Indonesia, through her work at CAREN.

Mr. Sunnardianto, former president of the Indonesian Student Association of Osaka-Nara, is currently serving as the president of Taiyo no Indonesia Foundation, an organization which offers aid to schools in remote areas of Indonesia, as well as scholarships for outstanding high school students who would not otherwise be able to pursue further education after graduation. Recently, Mr. Sunnardianto has compiled the stories of 19 OU students and alumni from Indonesia into a book entitled Living the Dream in the Land of Sakura: Anthology of Inspirational Stories of Studying in Japan (Indonesian: Menghidupkan Mimpi ke Negeri Sakura). This book, currently available in Indonesian bookstores, features success stories of Indonesian students studying in Japan, and will serve as an inspiration to those Indonesian students looking to study abroad in Japan. All proceeds from this book will go towards the efforts of the Taiyo no Indonesia Foundation to support underprivileged Indonesian students. Through sales of this book, the Taiyo no Indonesia Organization has helped nearly 100 elementary school students by buying school supplies such as bags and shoes, as well as providing over 25 junior high school and high school students with one-year scholarships.

After their introductions, Dr. Putri and Mr. Sunnardianto had a conversation with President HIRANO on a variety of topics. When asked about their dreams, Dr. Putri mentioned that her original dream of studying at OU had already been achieved, and that she has moved on to her next dream of becoming a faculty member at OU. Dr. Putri has been affiliated with Osaka University for over 10 years, either as a student or in her current role as researcher and CAREN member. As for Mr. Sunnardianto, he dreams of promoting education abroad to Indonesian students through taking a position at an Indonesian university or research facility. President HIRANO was impressed by the efforts of Dr. Putri and Mr. Sunnardianto in promoting Japanese education abroad, and gave some inspiring advice to the two of them on what is to come: "Dreams are meant to be achieved. If we don't achieve our dreams, they will stay dreams forever." He added, "But the process [of achieving those dreams] is great. It will make your life very fruitful." He went on to mention that those dreams are vital to our lives.

The world around us is slowly becoming smaller and, as a result, people are becoming closer. In the age of the internet, the once isolated diversity of the human race is now being heavily concentrated, and the three agreed that mutual respect for different cultures has become more important than ever. Dr. Putri mentioned that many of the laboratories in her department have made the switch to an all English environment, and that in her own class, she has been holding debate sessions in English, further lending to positive and open communication between students of different cultures and backgrounds. Mr. Sunnardianto, following the success of Taiyo no Indonesia Organization's first book, is currently in the planning stage of a second book, which will continue to promote study and life in Japan while helping those in need in Indonesia. President HIRANO praised Mr. Sunnardianto and Dr. Putri for their actions in "promoting harmonious diversity through scholarship," one of the pillars of Osaka University, and a vital component in the survival of humankind. Osaka University will continue to support this kind of mutual respect between different cultures in the hopes that more faculty, staff, and students will follow in the footsteps of Mr. Sunnardianto and Dr. Putri in their efforts of promoting education both in Japan and overseas.

命にはたくさんの奇跡が重なっていて、とても価値のある素晴らしいことだと改めて感じた。

今回の講演を聞いて、きつくても自分が進みたいと思った道なら頑張れると思った。

「今を生きる大切さ」を学べた。看護師になるという夢を叶えるために，一瞬を大切にしながら努力していきたいと思った。

講演後の高校生の感想

限られた人生の中で自分の学びたいことに向かって努力することが最も大切だと思った。「目の前の山を登り切る」ことで将来やりたいことも見えてくることがわかった。

「自分のこれからの人生の中で，今が一番若い自分」という言葉がとても心に響いた。

今の一瞬をどう過ごすのかが大切であり、山を登り切ったときの景色を望める日が来るの楽しみにしたいと思った。

祖先の行動が少しでも違えば現在の自分はいない，という内容の話がとても心に残った。

「人は日々変化する、未来は無限の可能性がある」という言葉は、僕に勇気を与えてくれた。

「夢」をあきらめず、最後まで、その夢がかなうまで人生の瞬間瞬間を大切に一生懸命生きていくという強い意志を抱いた。今回の講演を聞いていろんなことに対してやる気が湧いた。

医学と「いのち」をテーマに高校生に熱い講義

平野総長が高校生に語る

動画 大阪府立豊中高校特別講演『医学と「いのち」』(2015.7.8)
youtu.be/kgL6FKn2TRU

本学と大阪府教育委員会や進学指導特色校（GLHS：グローバル・リーダーズハイスクール）の指定を受けている10校との連携事業の一環として、大阪大学の魅力、学問や研究のおもしろさを高校生に伝えるため、総長をはじめ理事・副学長が各校を訪問し、講演や懇談会など対話による高大連携活動を行っています。

平野俊夫総長も母校の天王寺高等学校をはじめ、GLHS・6校、私立清教学園高等学校に特別講義を計8回実施し、学問の楽しさ、研究の面白さとともに、大阪大学の魅力を高校生に伝えました。

絶対に無理だとあきらめていたことがあったが、挑戦してみようという気になった。

「一瞬をどう生きるか」が大切だと知った。自分のやりたいことに向かって一つ一つ進んでいきたいと思う。

2012年4月20日
大阪府立天王寺高等学校

2012年10月19日
大阪府立三国丘高等学校

目の前の山を登りきる―。最高学府の長として、また、少し長く生きる人生の先輩として、このメッセージを未来ある高校生に伝えるべく、平野総長が大阪府立三国丘高等学校を訪問しました。

講演では、大阪大学の歴史、総長自身の専門である免疫学や、医工連携等による最新医学研究に触れながら、「命の大切さ」と「いかに生きるか?」を主題とし、総長自身の信念である「目の前の山を登りきる」ことの大切さについて力を込めて語りました。

講演後、医歯薬系への進学希望者を対象に懇談会が開かれ、そこでは進路選択に悩む生徒や研究に興味を示す生徒から質問が複数寄せられました。

懇談会の終わりには、「自分が今ベストだと思ったこと、目の前のことに真面目に一生懸命頑張るしかない。難しく考えないで、自分の可能性を狭めるようなことはせず、幅広い分野の知識を吸収し、夢を持ち続けてほしい。2年後大阪大学のキャンパスで君たちに会えることを楽しみにしている」とメッセージ を送りました。

2013年8月26日
大阪府立岸和田高等学校

～この“いのち”を大切に　この瞬間を必死に生きて欲しい ～

生命の歴史から見ればたった1億分の2にすぎない私たちの人生。だからこそ、「今、この瞬間、みなさんが、私が、ここに生き、そして、ここで出会えた『一期一会』の奇跡を大切に、この“いのち”を大切にして欲しい」。

大阪府立岸和田高校を訪れた平野俊夫総長が、講演会の冒頭、1年生の生徒360名に向け、命の大切さについてメッセージを送りました。講演では、適塾から繋がる大阪大学の歴史のほか、専門である医学分野の最先端研究の紹介、そして、インターロイキン6の発見に至るまでの困難から得た総長自身の信念である「目の前の山を一つ一つ登りきる」ことの大切さについて熱く語り、講演会の最後にはフロアに降り、高校生に「将来の夢」を直接問いかけるなど、生徒たちとの交流を楽しみました。

2013年11月6日
大阪府立四條畷高等学校

GLHS訪問として、平野総長が大阪府立四條畷高校を訪れ、1年生の全生徒360名を対象に講演会を行いました。

「医学と“いのち”」をテーマに、医学の歴史や最先端医療を紹介するとともに、生あるものは必ず変化し、そして死ぬからこそ、「いのち」の大切さや、「今のこの瞬間を必死に生きること」の大切さについて熱く語りました。

講演会は、平野総長が壇上を降り、高校生と直接対話をしながら話を進め、また、発言してもらった生徒には総長直筆サイン入りの「大阪大学NEWS LETTER特集号」をプレゼントするなど、終始楽しげな雰囲気の中で進行しました。

2014年7月9日
大阪府立豊中高等学校

2014年7月9日に大阪府立豊中高等学校の学習サポートプログラムが大阪大学会館で行われ、豊中高校1年生全員（361名）が大阪大学を訪れました。

プログラム冒頭の平野総長講話「医学といのち」では、本学卒業生の手塚治虫氏著作「ブラックジャック」のエピソードを用い、移植医療・再生医療を題材に「いのち」とは何かを考えました。

また、平野総長は自身のインターロイキン6発見に至る話を絡め、夢を持ち「眼の前の山を登りきる」ことの大切さについて熱く語りました。

質疑応答では高校生ならではの率直な質問もあり、終始和やかな雰囲気でした。引率教員からは「大阪大学に興味が惹かれる、高校生にとって大変わかりやすい内容だったと思う、大変感激した」と本講演会が高校生に大変有意義であったとのコメントがありました。

2015年1月29日
大阪府立茨木高等学校

2015年1月29日に茨木高校の1年生全員（319名）を対象とした平野総長による「医学といのち」の講演を茨木市福祉文化会館・オークシアターで行いました。

平野総長は講演で医学といのちについて、ブラックジャック等の分かりやすい例を交えながら、「今を如何に生きるか、この一瞬を大切にしてほしい」と熱くメッセージを送りました。講演後に行われた質疑応答では十数人が質問するなど、生徒は熱いメッセージに心動かされたようでした。総長は最後に「茨木高校のみなさん、大阪大学の入学式でまた会いましょう」と締めくくり、熱を帯びた雰囲気のまま終演を迎えました。

2015年3月7日
私立清教学園高等学校

2015年7月8日
大阪府立豊中高等学校

大阪府立豊中高等学校の学習サポートプログラムが大阪大学会館で行われ、豊中高校の1年生全員が大阪大学を訪れました。

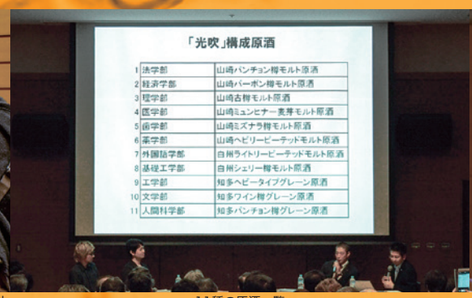
平野俊夫総長から、「医学といのち」の講話を行い、本学卒業生の手塚治虫の「ブラックジャック」のエピソードを用いて、移植医療や再生医療を題材に「いのち」とは何か、そして「生きる」ことの意味を一緒に考えました。

▶2015年4月発行 阪大NOW 144号 掲載 TOPICS より

大阪大学オリジナルウイスキー完成記念イベントを開催

左から嶋谷氏、平野俊夫総長、東島清理事・副学長

メディアの取材に応じる超域学生の立石和博さん（左・医学系研究科博士後期課程2年）と奥野輔さん（基礎工学研究科博士前期課程1年）



11種の原酒一覧

嶋谷氏

2015年3月19日（木）、大阪大学ウイスキーの完成を記念するイベントが大阪大学中之島センターで開催され、卒業生ら約200人が参加しました。

本学超域学生の企画による大阪大学オリジナルウイスキー『光吹—MIBUKI—』の開発プロジェクトは、産学連携による人材育成の取り組みとして、サントリースピリッツ株式会社のご協力のもと、2014年6月から進められてきました。

この日のイベントでは、ミニレクチャーやトークを通じて、阪大とジャパニーズウイスキーの「レジェンドたち」との深いかかわりや、開発プロジェクトの経過などを紹介しました。

ゲストスピーカーの嶋谷幸雄・元サントリー山崎蒸留所工場長（大阪大学工学部発酵工学科卒）から、「ウイスキーでは阪大が掲げる『調和ある多様性』が実現しています」との話がありました。

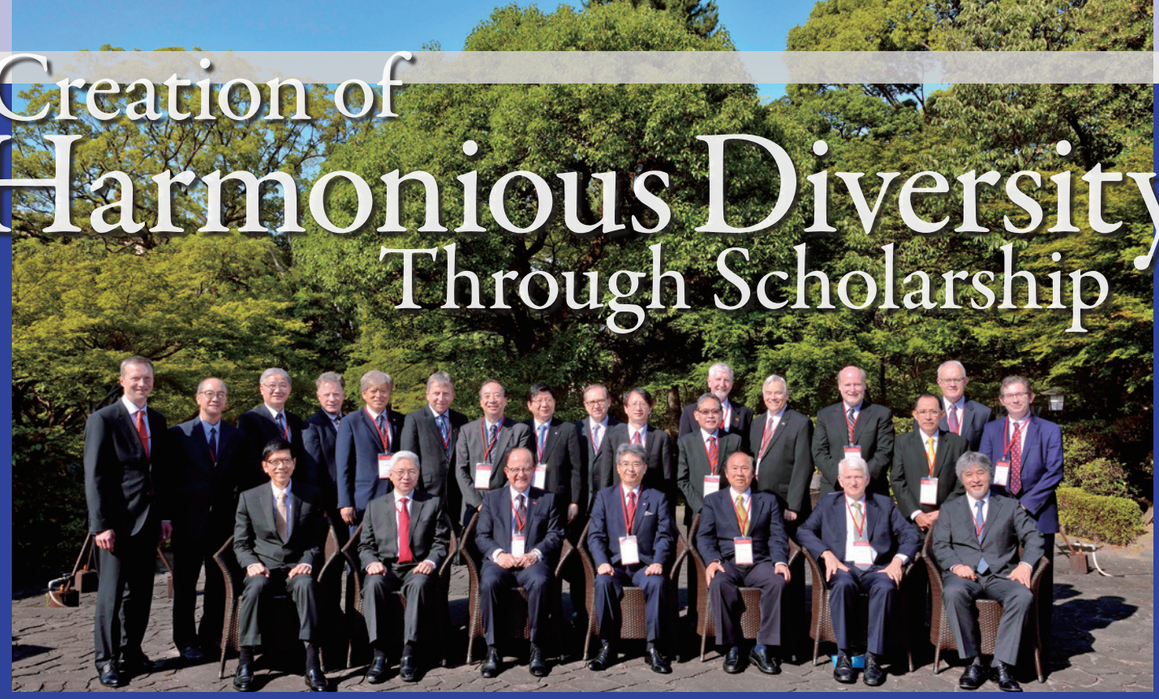
学生らによるプロジェクト報告では、「阪大11学部の学生をイメージして厳選された11種の原酒を、学生構成比に応じてブレンドした」との秘話も披露されました。まさに「調和ある多様性の創造」を具現化したものです。

完成したてのウイスキーの試飲では、参加者は香りと味のハーモニーを楽しみ、学生たちが製品に込めた「願い」に思いを馳せました。

「光吹—MIBUKI—」のイベントレポートや詳細をご覧いただけます。

「光吹—MIBUKI—」スペシャルサイト
http://www.osaka-u.ac.jp/sp/mibuki

Creation of Harmonious Diversity Through Scholarship



動画 環太平洋大学協会(APRU) 第19回年次学長会議公式レセプション(2015.6.29) youtu.be/AYsRUCKRu1g

▶環太平洋大学協会(APRU)の第19回年次学長会議 平野俊夫総長 挨拶 より

環太平洋大学協会(Association of Pacific Rim Universities、略称APRU)は環太平洋地域を代表する大学の学長で構成される組織で、各国の高等教育の相互協力関係を強め、環太平洋地域社会にとって重要な諸問題(例えば経済発展、都市化、技術移転、大気汚染、資源枯渇等)に対し、教育・研究の分野から協力・貢献することを目的として 1997年に設立されました。

第19回年次学長会議は、大阪大学をホスト校として2015年6月28日〜6月30日の3日間開催されました。

APRU
The 19th Annual Presidents Meeting

環太平洋大学協会(APRU) 第19回年次学長会議

Welcoming Remarks by President Toshio Hirano, Osaka University
on the occasion of the Opening of APRU Presidential Retreat and 19th APRU Annual Presidents Meeting
Monday, June 29, 2015
Oh-en-ka Meeting Room, Hilton Osaka Hotel

Deputy Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology Mr. Kihei Maekawa, Presidents, Chancellors and Vice Chancellors, distinguished guests, ladies and gentlemen, Good morning. It is a great pleasure and honor for me to see all of you here this morning for the opening of the APRU Presidential Retreat and 19th Annual Presidents Meeting. On behalf of Osaka University, I would like to extend a hearty welcome to the 25 Presidents, Chancellors and Vice Chancellors, as well as the staff of APRU member universities and the Secretariat, who join us today.

This is the second APRU Annual Presidents Meeting held in Japan after the one hosted by Keio University in Tokyo in 2008. This is therefore the first APM to be held in the western part of Japan. I am pleased that some of you already visited our Suita campus yesterday. We are happy not only to host you for this important meeting but also to have an opportunity to introduce you to our university in the vibrant city of Osaka.

Osaka is the second largest metropolitan area in Japan and has been a major commercial center and economic hub for centuries. Historically, Osaka was home to one of the oldest capitals of Japan, and its ports functioned as a primary gateway for the world beyond the sea. Osaka was a landing point for visitors from the Asian continent and a departure base for missions to China as early as the 7th century. With this interchange of people, knowledge, ideas and technology from China and Korea first entered Osaka. Thereafter such knowledge spread to the rest of Japan. Later, during the Edo period, Osaka was known as "the nation's kitchen" and has remained a key center of commerce and trade. In fact, the concept of trading in futures emerged in Osaka hundreds of years ago, anticipating a modern financial system. To this day, openness to new ideas and the spirit of innovation and entrepreneurship characterize the city and its people.

Osaka University is a leading comprehensive national university located in this dynamic city. The university traces its history back to its school of origin, Tekijuku, established in 1838 by Ogata Koan, one of Japan's eminent and foresighted educators. At this private academy of Dutch studies and Western medicine, young people gathered from all over Japan, regardless of social standing, to study and to excel, in an environment of friendly competition. It was Tekijuku where many of Japan's leaders in the early Meiji period were educated. Subsequently, Osaka University was founded as an Imperial University with two schools, Medicine and Science, in 1931. Unlike many government schools of the time, Osaka University was established with the enthusiastic support and financial contributions of people in Osaka. Thus, the university has always been supported by and loyal to the citizens and traditions of Osaka. Open-mindedness, a passion for learning and an education that cultivates social awareness and a sense of responsibility are all legacies of Tekijuku that live on at Osaka University.

This conference is held under the theme of "The University as an Agent for Global Transformation." I believe that universities in the 21st century not only respond to challenges of the global society but are more proactive in initiating positive changes. I consider this the "Century of an Explosion in Diversity." The history of society is in many ways the history of diversity, and it is diversity which fosters innovation, the foundation of a prosperous human society. Diversity can also be a source of conflict, even war. Our world is getting smaller due to dramatic population growth and vastly improved means of transportation and communication, and the negative aspects of diversity have become more apparent than ever. Overcoming this inherent conflict in the coming diversity explosion is essential for our survival. As a President and a scholar, I have strong faith in the universal language of scholarship. Much like art and sports, scholarship has the power to overcome conflict by engendering harmonious diversity. I believe that universities must disseminate values that transcend differences, while upholding their fundamental roles in education and research. Our common language of scholarship becomes a tool to overcome differences between languages, cultures, religions and political standings. Therefore I strongly believe that the mission of universities in the 21st century is to foster harmonious diversity through scholarship for the betterment of human society.

The morning session that immediately follows this Opening will feature prominent keynote speakers who represent the Japanese government, industry and academia. They will discuss the status and changing mission of higher education in Japan as well as challenges and prospects for the future. It will be followed by a panel session in which we will hear the voices of the leaders of Japanese research universities and their visions as "Agents for Global Transformation."

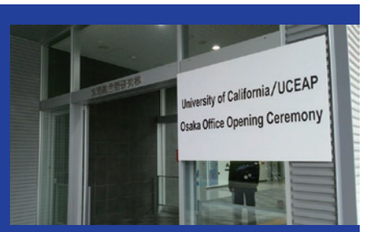
All of us who gather here represent the leading research universities in the Asia Pacific, as the region continues its historic transformation and growth. Indeed, some predict that Asia will account for more than half of the global GDP by 2050. We train leaders and professionals of the next generation, and we pioneer innovations that will enrich our society. Unmistakably, our universities set the course for the growth and prosperity of this region and beyond. I once again welcome active participation of presidents and higher education leaders from the Pacific Rim. I hope all of you will have a fruitful and productive meeting. I also hope you will enjoy your time in Osaka. Thank you very much.

Toshio HIRANO
President, Osaka University

APRU関係者の適塾見学会も行われました。

学生・研究者交流の新たな拠点
大阪大学のグローバルキャンパス化が更に加速

カリフォルニア大学(UC/UCEAP)が大阪大学にオフィスを開設



大阪大学とカリフォルニア大学の交流実績

- ●交換留学：派遣／11名　受入／17名※本学の最大規模の交流協定校
- ●フロンティア・ラボ：理工系の「研究室」で指導教員のもと、先端的テーマの研究を実施(最長1年間)(13名受入)
- ●ショートステイ・ショートビジット：毎年、30名程度を派遣、20名程度を受入
- ●JShIP：日本語学習者のための短期プログラム(23名受入)

2014年12月3日、豊中キャンパス文理融合型研究棟7階に、本学の大学間学術交流協定校で、米国カリフォルニア大学の国内2番目のオフィスが設置され、「University of California(UC)/University of California Education Abroad Program(UCEAP)大阪オフィス開所式」が開催されました。

開所式では、Jean-Xavier Guinard UCEAP本部代表による挨拶、次いで平野俊夫総長による挨拶、松本英登文部科学省高等教育局高等教育企画課国際企画室長、Keith Lommel駐大阪・神戸米国総領事館関西アメリカンセンター館長より来賓祝辞が述べられた後、テープカットが行われ、来賓・UC/UCEAP関係者・UC/UCEAPと関係が深い本学教員等、60名を超える出席者がありました。

その後、UC/UCEAP大阪オフィスの見学やレセプションが行われ、岡村康行理事・副学長から「このオフィスの開所が、大阪大学とカリフォルニア大学の関係をより緊密にし、21世紀におけるさらなる学生交流、研究者交流、共同研究等が促進されることを願っている」との挨拶がありました。

同開所式に先立ってJean-Xavier Guinard UCEAP本部代表は、平野俊夫総長を表敬訪問され、本学からは、岡村康行理事・副学長、東島 清理事・副学長らが同席しました。平野総長から世界適塾構想の説明を受けたGuinard代表は深く感銘を受けられた様子で、今後の両大学間の学生交流について、懇談が行われました。

また、12月18日（木）から、UC/UCEAP大阪オフィスと協力して企画した英語特別講義“Case Based Critical Thinking”シリーズが始まりました。これは、本学未来戦略機構のJOHN HAMPTON INO(ジョン ハンプトン イノ)特任教授による、グループ討論型のインタラクティブな演習講義で、身近な論争的課題を具体的な討論事例として、ステークホルダーアナリシス等を通して多面的・批判的に、また楽しくポジティブに考え、論理的な思考・情報発信能力を高める英語講義です。

今後、世界有数の教育研究機関であるカリフォルニア大学との連携が緊密になり、交流がより一層活発となることが期待されます。

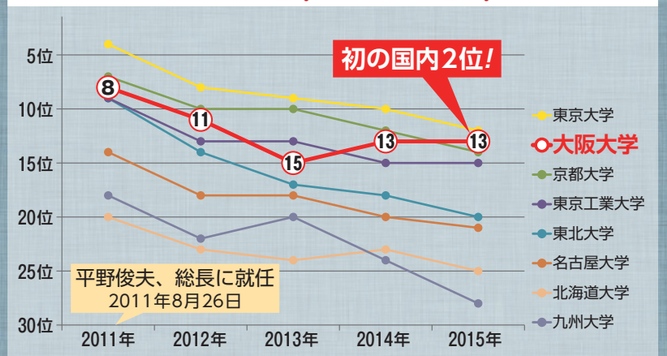
『3位じゃダメなんです。』
阪大なら実現できる。世界トップ10の研究型総合大学を。

2014年12月28日(日)、29日(月)の日本経済新聞(全国版)朝刊に、平野総長自らが登場する大阪大学の広告を掲載。

ダメなんです。
阪大は、日本で3番目の大学じゃダメなんです。
海外学術誌の掲載論文数や研究費の獲得など、
国内3位の実績は数あれど、
阪大が目指すべきものはそこじゃない。
世界の大学、研究機関、企業が、
真っ先にイメージする日本の大学、
基礎研究や応用研究で、
世界にインパクトを与える
研究型総合大学になるのです。

阪大の原点である適塾に集まった若者が、
明治の新しい時代を切り開いたように、
阪大の「学問による調和ある多様性」こそが、
次の時代を創造していく。
2031年の創立100周年には、
GLOBAL UNIVERSITY「世界適塾」として、
世界の若者や研究者が目標とする大学へと
生まれ変わります。

2015年QSアジア大学ランキング
阪大が国内2位、アジア13位！



6月10日、世界の高等教育機関に関する情報を提供しているQuacquarelli Symonds(QS)社から、「2015年アジア大学ランキング」が発表され、大阪大学は総合ポイント94.7(一昨年93.8、昨年94.5)で、アジア全体13位で国内2位(一昨年はアジア全体15位で国内4位、昨年はアジア全体13位で国内3位)にランクされています。

QSホームページ
http://www.topuniversities.com/university-rankings/asian-university-rankings/2015

平野俊夫総長の足跡

2011.8～2015.8

トピックス

2011年

8月 26日 • 第17代総長就任
11月 • 審良静男特別教授ガードナー国際賞受賞
12月 • 未来戦略機構設置
• 博士課程教育リーディングプログラム採択(2件)

2012年

4月 • 新運営体制、全学教育推進機構開始
5月 • 未来戦略2012－2015「22世紀に輝く」策定
• 学内財源配分の見直し策定・実施
• 施設老朽化対策計画策定・実施
6月 ● スロバキア共和国
イヴァン・ガシュバロヴィチ大統領来学
• 平野博文文部科学大臣来学
7月 • 総長顕彰・総長奨励賞制度開始
10月 ● 豊中キャンパスにまちかね保育園開園
11月 • 金森順次郎第13代総長逝去

• 博士課程教育リーディングプログラム採択(3件)
• 国立大学改革強化推進補助金事業採択
• 卓越した大学院拠点形成支援補助金事業採択
• 産学共同の研究開発による実用化促進
(大学に対する出資事業)採択
• リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保
するシステムの整備事業採択

2013年

4月 • 世界トップ10に向けた支援策策定・実施
• 未来トーク開始
6月 • 未来戦略シンポジウム開始
● 天皇皇后両陛下行幸啓
● 安倍晋三内閣総理大臣来学
● 吹田キャンパス総合グラウンド(すいらん)竣工
7月 • 特別教授称号授与策定・実施
8月 • 総長顕彰・奨励賞表彰策定・実施
• 適塾創設175周年記念シンポジウム開催
10月 • 未来基金創立100周年ゆめ募金開始
• 国際共同研究促進プログラム策定・実施
• 未来研究イニシアティブ・グループ
支援事業策定・実施
• 日独6大学学長会議出席
• 日中学長会議出席

• 研究大学強化促進事業採択

2014年

1月 • 博士課程教育リーディングプログラム
フォーラム開催
4月 • 世界適塾構想策定
● 霞が関に東京オフィス開設
● 最先端医療イノベーションセンター竣工
• 文理融合型研究棟竣工
• 吹田・豊中に未来戦略機構拠点設置
5月 ● 適塾改修リニューアルオープン
● 湯川秀樹愛用の黒板、学位論文披露
• 日英研究教育大学協議会出席
6月 • マチカネワニ化石国の登録記念物指定
8月 • 未来基金３０億円突破
9月 • 秋季卒業式実施
10月 • 秋季入学式実施
12月 • ＵＣ/ＵＣＥＡＰ大阪オフィス開所
• 大阪大学ベンチャーキャピタル株式会社設立

• スーパーグローバル大学創成支援事業採択

2015年

2月 ● ロシア科学アカデミーと学術交流協定締結
3月 • 世界適塾入試導入発表
● 10年ぶりに入試合格者を掲示板発表
• 大阪大学オリジナルウイスキー
「光吹－MIBUKI－」完成
• 坂口志文特別教授ガードナー国際賞受賞決定
6月 • QS「2015アジアランキング」国内2位
• 西尾章治郎教授を次期総長予定者に選出
● ガードナー財団のJohn Dirks総裁来学
● 箕面キャンパス移転発表
• 環太平洋大学協会(ＡＰＲＵ)
第19回年次学長会議開催
7月 • 南部陽一郎特別栄誉教授逝去
• 最終講義
8月 25日 • 総長退任

• 大阪大学名誉教授

平野俊夫総長 4年間の理事・監事

2011.8.26～2015.8.25

■理事

恵比須 繁之（企画、評価担当）
2011.8.26～2015.8.25

東 島　　清（教育担当）
2011.8.26～2015.8.25

馬 場　章 夫（産学連携・情報担当）
2011.8.26～2015.8.25

相 本　三 郎（基盤研究・リスク管理担当）
2011.8.26～2015.8.25

尾山眞之助（人事労務・多様な人材活用・事務改革担当）
2011.8.26～2014.1.30

阿 部　顕 三（財務戦略担当）
2011.8.26～2013.8.25

江 口　太 郎（広報・社学連携担当）
2011.8.26～2013.8.25

高 橋　　明（国際戦略担当）
2011.8.26～2012.12.31

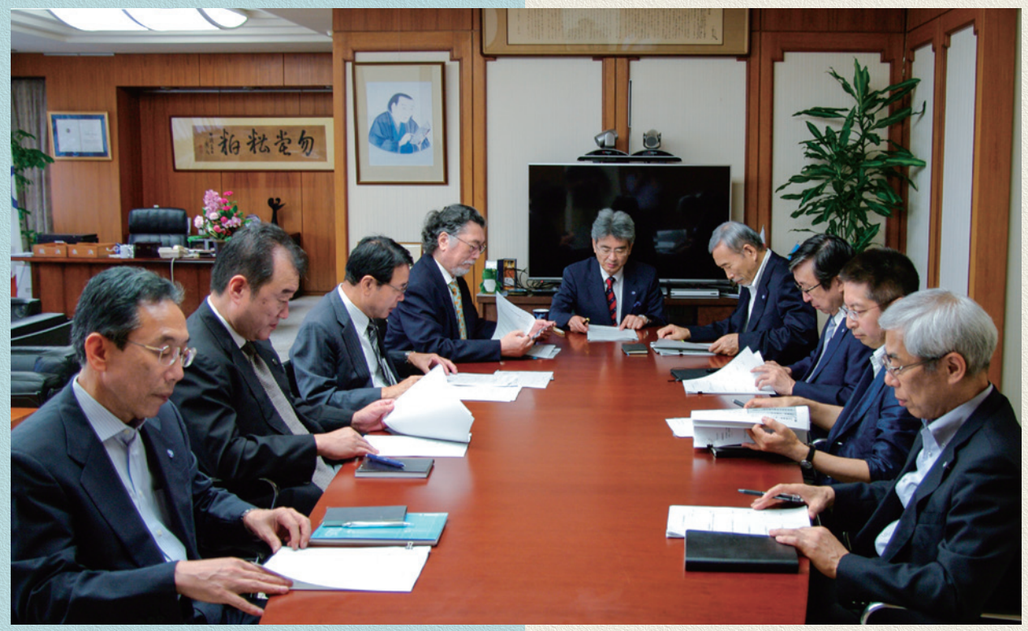
大 竹　文 雄（財務戦略担当）
2013.8.26～2015.8.25

岡 村　康 行（国際・広報戦略、社学連携担当）
2013.8.26～2015.8.25

大 木　高 仁（人事労務・多様な人材活用・事務改革担当）
2014.2.1～2015.8.25

■監事

関 順一郎　　山崎 優 ～2014.3.31　　内藤 欣也 2014.4.1～



恵比須 繁之
（企画、評価担当）

平成23年8月に就任して以来、ゆっくり熟慮した後に行動するというよりは、走りながらあるいは歩きながら企画するという4年間でした。「適塾から世界適塾へ」という平野総長の合言葉の下、未来戦略機構の創設や、学生・教職員のためのキャンパス環境の整備、さらには施設老朽化対策の策定や大学留保ポスト(所謂90%ルール)の実施といった痛みを伴った施策を、関係者のご協力によって遂行できたことを感謝しております。半世紀近い年月を過ごさせていただいた大阪大学の更なる発展を祈念しています。

東島　清
（教育担当）

平成23年度には博士課程教育リーディングプログラムを実施する未来戦略機構、平成24年度は全学教育推進機構・教育学習支援センター(TLSC)・キャンパスライフ支援センター、平成25年度からは教育目標・3つのポリシー策定とカリキュラム改革・入試改革・教育国際化を一体的に推進する教育改革推進会議、平成26年度にはグローバルアドミッションズオフィス(GAO)設置とスーパーグローバル大学「世界適塾」など教育改革に邁進して参りました。皆様の多大なご協力に感謝いたします。

馬場 章夫
（産学連携、情報担当）

もっとも印象に残っているのは、平野先生のお部屋で理事になるように告げられ、なぜか即答してしまった4年前のことかもしれません。そのあとは、それまで全く経験したことのない世界に触れながら、息継ぎをする暇もなく全力で泳いできました。後ろを振り返ることはほとんどなく、時々は山の頂上を通過したとしても意識すらしないような感覚の4年間でした。少し時間をかけて整理し、色々と思い出してみたいものです。

相本 三郎
（基盤研究、リスク管理担当）

世界適塾構想を具体化することに奮闘した4年間でした。世界中から学生や研究者が集まる魅力ある大阪大学となることを目指して、研究推進や研究環境のグローバル化のための一連のプログラムを策定し、実施して参りました。未来戦略機構の4つの研究部門の創設や、国際共同研究促進プログラムをベースとした国際ジョイントラボの全部局での立ち上げなど、大阪大学の未来戦略を推進する基礎作りができたのではないかと思っています。

大竹 文雄
（財務戦略担当）

財務、未来基金、卒業生室の担当でした。運営費交付金の減少が続く中、人事院勧告上昇による人件費増加、電子ジャーナル価格・電力料金の上昇など、財務担当としての環境は悪かったと思います。予算を削減するという悪役を演じてきましたが、関係者のご理解で財務改革は進展したと思います。未来基金へのご寄付も増えてきましたし、卒業生のネットワークも強化されてきました。ご協力いただいた方々のお陰です。皆様に感謝いたします。

大木 高仁
（人事労務戦略、多様な人材活用、事務改革担当）

縁あって本学にお世話になり、左右覚束ない中で平野総長及び理事・監事の皆様方には言い尽くせぬ御指導・御厚情を賜りました。私が担当の人事制度については、年俸制、クロス・アポイントメントなど、総長のリーダーシップの下で他に先駆けた構想が既にできあがっており、それを本学に最適化させることが私の課題でした。その成果は現時点ではまだ定かでありませんが、いずれにせよ大変よい仕事をさせていただいたものと感謝いたしております。これで平野執行部は解散となりますが、皆様方の末永い御健勝・御活躍をお祈りいたします。

岡村 康行
（国際・広報戦略、社学連携担当）

「国際・広報戦略、社学連携が担当である」と総長から言われたとき、本当にこんなに多くのことが自分に果たしてできるのかと正直思いました。無理を承知で役割をこなして、なんとか皆様のご協力でここまでやってこられたと思っています。APRU学長会議の開催、海外拠点の充実、国際戦略の策定、東京オフィスの設置、近隣自治体やメディア、海外の大学との良好な関係構築など、多くのやりがいのある仕事を与えられ、充実した2年間でした。大阪大学の発展に少しですが貢献できたことを誇りに思っております。

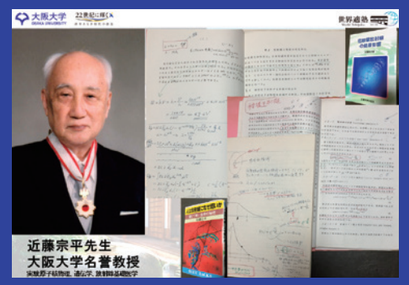
平野俊夫総長 最終講義

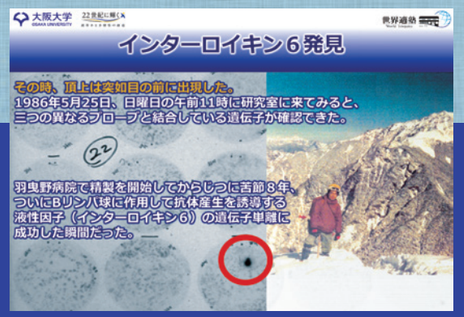
免疫学者として、総長として 来し方を思い、未来を想う——

▶2015年7月14日

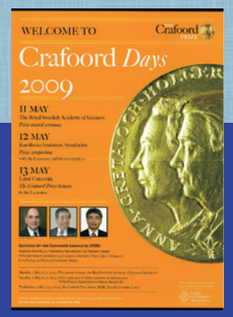
動画 平野俊夫総長最終講義(2015.7.14)
youtu.be/uIe3SuJwjUA

2015年8月25日に退任する大阪大学第17代・平野俊夫総長が7月14日、吹田キャンパスのコンベンションセンターで最終講義を行い、「夢は叶えるためにある」と語りかけました。講義は、豊中キャンパス、箕面キャンパスなど4カ所でも中継され、学生や教職員、学外関係者など約650人が聴講しました。





「1978年から実験を始めましたが、その道のりは険しい山道を登るような、そんな感覚に似ていました。それでもひたすらに前に進み、険しい山道を登り続けました。『免疫応答の本態を突き止めたい』という強いモチベーションがあったからです。」——平野総長講義より



2009年5月、スウェーデン王立科学アカデミーから、岸本忠三元総長らとともに、日本人として初めてとなるクラフォード賞を受賞

皆様一人一人の力と英知を合わせて、大阪大学を「世界適塾」へと導いてほしいと思います。それができるのは他でもない、教職員・学生の皆様一人一人の力です。

「夢は叶えるためにある」

私と共に走り続けてくださった役員、教員、事務職員、研究室の皆様、本当にありがとうございました。

天の川 世界適塾 はるかなり

俊夫

1947年4月17日大阪府生まれ。1972年大阪大学医学部卒業。1973年より1976年までNIH留学。大阪府立羽曳野病院内科を経て、熊本大学助教授、大阪大学助教授、同教授、生命機能研究科長を歴任。2008年4月から2011年3月まで同大学院医学系研究科長・医学部長。2011年8月26日、第17代大阪大学総長に就任。(任期：2015年8月25日まで。)2005年～06年日本免疫学会会長。日本学術会議会員。総合科学技術・イノベーション会議議員。サンド免疫学賞、クラフォード賞、日本国際賞などを受賞。2006年紫綬褒章受章。専門は免疫学。免疫機能における情報伝達において重要な働きをするインターロイキン6(IL-6)を発見し、そのメカニズムと自己免疫疾患との関連性を解明。

世界適塾
World Tekijuku
since 1838

22世紀に輝く
Harmonious Diversity

大阪大学
OSAKA UNIVERSITY
www.osaka-u.ac.jp

「大 阪 大 学 NewsLetter 2011-2015」
大阪大学第17代総長 平野俊夫の4年間

編　　集　大阪大学広報・社学連携オフィス広報課
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-1
TEL 06-6877-5111

編集協力　毎日新聞大阪本社 総合事業局

発　　行　2015年 8月

大阪大学公式
Facebook
www.facebook.com/OsakaUniversity